
流星のロックマン～星の祈り～

テンペスト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

流星のロックマン〜星の祈り〜

【Nコード】

N3928G

【作者名】

テンペスト

【あらすじ】

舞台は『ディーラー』の魔の手から逃れて早数ヶ月の地球。スバルは中学に進学し平穏な日々を過ごしていた。しかし新たな組織が地球を狙う！

第一話 動き始めた歯車

動き出す歯車

嘗て、この青き美しき惑星『地球』は三度存亡の危機に立たされた。ある時は宇宙人の襲来、またある時は古代文明の復活、拳句にその地球に住むとある科学者が世界征服を企むなどである。だが、その何れも『青き英雄』が立ち上がり世界を救った。

しかし

くアンドロメダ星雲の内部く

ここは宇宙の果てにある、地球から『アンドロメダ星雲』と呼ばれる星雲があった。

しかし実態はとある凶悪な電波宇宙人犯罪者の溜まり場だ。そしてそれを纏めるとある組織が動き出そうとしている。

「ビガ！皆、ヨク集マツテクレタビガネ！」

アンドロメダ星雲の中心部にとある機械的なしゃべり方をする、UFOのような電波体が一声を放った。

それに呼応するかのように次々と電波体が集まってくる。先程の電波体も含めれば全部で6体いる。

「・・・新しい『獲物』が見つかったのか？『UFO』。」

高圧的な、サソリのような電波体が呟いた。

答えるかのように『UFO』と呼ばれた電波体はコクリと首を縦に振る。

その隣にいる老人のような、しかし威厳のありそうな電波体は指をパキパキ鳴らしている。

「ふむう、今度こそ奪い甲斐のある星だと良いのだがな。」

「心配ねえよ。つまらん星だったらUFOが招集をかけてくることもねえじゃん。」

その真向かいには、盾のような形をした電波体が呟いた。高圧的な態度で話しかけてくる電波体の発言を水瓶をモチーフとした電波体はやれやれと肩を竦めながらため息をつく。

「ハア……、だからって調子に乗ってはいけませんよ。」

美しい、澄み切った女声の電波体がそう言った。
しかし隣に羽ばたく鳥のような気高そうな赤い電波体もその星に興味を持っているようだ。

燃える鳥のような電波体は声すら気高くこう言った。

「だが、UFOのお目に叶う星となるとやる気を上げていく必要があると思うのだがね。」

その一言はその場にいた全電波体の腕を組ませた。
ようやく、といった表情でUFOは話し始める。

「ソノ通り！今度狙ウ星ハ『地球』ト呼バレル星ビガ！」

「……『地球！？』……」

UFOを除く五体の電波体を思わず声を上げた。

それもその筈『地球』は中々文明が発達している星で、電波環境も充実。

おまけにそれでいながら自然環境は美しいと称されている。
しかしその一方で数々の危機から生き延びた、と噂されていた。

「なるほど。その地球が今回のターゲットか。」

「こりゃ盛り上がってきたゾイ！」

「へっ、ちたあ骨のあるヤツがいて欲しいもんだねエ。」

「……今回はそう簡単にいかないかもしれませんね。」

「だがそれでこそ面白みがあるではないか！私は気に入ったぞ！！」
次々と電波体がやる気を見せる。

そしてこの集団のリーダーであるUFOも相当この星を気に入っていた。

嘗てブラックホールを操ると恐れられていた『シリウス』という電波体が目をつけたほどである（そのシリウスも地球の者によって倒されたと聞く）。

「・・・決マリビガ！サツソク行動開始ビガヨ！！」

「「「「「了解。「「「「」

そして六体の電波体はその場を去った

。

ここは喉かな小さな町、コダマタウン。
そしてその中でのとある家。

ベッドで眠る、一人の少年が目覚めようとしていた。

「うゝ・・・ん・・・。後5分・・・。」

『ってオイ!とつとと起きやがれスバル!』

ハンターV Gの中から怒声が響き渡った。

漸く重たい瞼を開けたこの少年こそ幾度も世界を救ったロックマン
こと『星河スバル』。

眠そうな目をゴシゴシこすり、スバルはハンターV Gの中にいるウ
イザードの挨拶した。

「あ、おはようロック。」

『おはようなんか言ってる場合か!時計を見やがれ!』

「時計?」

ロックと呼ばれたウイザード(性格には電波宇宙人)『ウォーロッ
ク』は画面の右斜め上にある時刻を指差した。

そこに表示されている時刻は・・・7:14。

「ね、ね、ね・・・寝坊だア~~~~ッ!?!?」

慌てるスバルにウォーロックはハンターV Gから飛び出、肩を竦め
て見せた。

あのクリムゾン・ドラゴンとの戦いが終結してからはすっかりこの

調子だ。

世界を救った英雄は、どうやら早起きは苦手らしい。
意外な早業で速攻で着替え、朝食を済ませたスバルは弾かれるよう
に家を飛び出した。

「い、言ってきました すー!」

「気をつけるのよ。」

その後から彼の母親である星河あかねも声をかけた。
彼の父親である星河大吾もすでに仕事に向かっている。
自分以外誰もいないリビングであかねは息をつきながら呟いた。

「ふふふ。今日から新しい家族が来るものね。しっかり掃除してお
かなくちゃ」

一方……。

「ね、ねえロック！電波変換で……!」

『アホ！たまには起こされる俺の身にもなるんだな。』

「そ、そんなあ~~~~!!!!」

この地球を何度も救ったコンビがまた、新たな危機と立ち向かう事

になるとはこの時まで誰も知る由は無かった

。

第一話 動き始めた歯車（後書き）

ども！お初にお目にかかりますテンペストと申します！

この度は僕の小説をごらんいただき真にありがとうございます！！
いろんなところで小説を書いているのでこちらの更新は少々遅く
なりますが今後もよろしくお願いします！

第二話 巡り合う赤い糸

キンコーンカーンコーン……

在り来たりなチャイムが鳴り、ホームルームが始まった。

スバルは息絶え絶えに机にうつ伏せてしまっている。

命からがら間に合ったらしい。

「では白金さん、号令を。」

男の先生の声で号令をかけるのは小学校のころでも一緒だった学級委員長こと『白金ルナ』。

スバルと同じ中学に入ってから生徒会長だった経験を生かし、学級委員長に就任した。

そしてそのお供である『牛島ゴン太』や『最小院キザマロ』、そして『ジャック』もまた然り。ただこの日は何か違った。

「起立、礼！」

『おはようございまーす！』

ルナの挨拶に続き、クラスの皆が挨拶する。

全員が着席をし終えたところで先生が改まった表情で皆に向き合った。

「今日は転校生がこのクラスに来ます。皆さん、分かっているとは思いますが決してパニックになったりしないように。」

『はっ。』

先生の一言で全員が啞然とした。

それもその筈『仲良くしてくださいね』ならまだしも『パニックにならないでくださいね』とはいささか理解しにくい。

だが、運命の歯車は容赦なく(?)回り続ける。

「では、入ってきてください。」

「はい！」

先生の更なる一言で扉は勢いよく開かれた。

それに伴って聞こえたソプラノトーンの、可愛らしい声。

スバルは知っていた、この声の持ち主を。

「ま、さか……。」

『やっぱりな。』

スバルは徐々に驚きに満ち溢れるような声をした。

それに比べてウォーロックは意地悪そうな笑みを浮かべる。

その問題の転校生は黒板に自分の名前を書いたあと、皆と向き合った。

「ベイサイドシティから転向してきました響ミソラです！」

『……………(絶句)。』

皆は何もいえなかった。

だがコレが常識人の全くもって常識的な反応といえるだろう。

だって転校生は超人気アイドル。小学生の頃にデビューしているの

にもかかわらず未だに人気は衰えるどころか一方的に上がっていく一方。様々なドラマや映画にもひっぱりだこの売れっ子女優。そんな人物がこんな小さな町に引っ越してくるとは各々の眼を疑って信じない。

「では、響さんはお好きな席をどうぞ。」

『！！！！！』

そういう意味では優遇されているのだろうか、ミソラは好きな席を選ぶ事にした。

その瞬間、男子の目はキラリと光った。

何せあの響ミソラが隣に座ってくれる機会など本来なら悪魔と契約したって叶わない。

そんな銀河のご真ん中で落とされたコンタクトを見つけるにも等しい確率の出来事がいま実現しようとしている。

(あ、あ、あのミソラちゃんの笑顔を・・・特等席で・・・ッ！！！！)

(ミソラちゃんの笑顔は俺のものだ・・・！)

(何、キサマ！友を裏切るのか！！？)

(ああ！キサマとの安っぽい友情に比べたら、軽すぎる犠牲よ！)

(ほざけ！ミソラちゃんがいるべき場所は俺の隣なのさア！！)

(何を！我こそがミソラちゃんと共に有るべき存在なのだ！！！！)

次々とミソラの隣をめぐって目線だけの骨肉の争いが（空想上）繰り広げられる。

因みにこの間コンマ3秒。無駄に精神が神の域にも達している。だが、女神は、ミソラはある意味残酷だった。

「私スバルくんの隣が良いです」

『なぬううう！！？』

全員が目を見開いた。そして男子は絶望した。

ミソラは何の迷いも無くスバルの隣を選んだのである。

全員は嫉妬、羨望、恨み、つらみ、僻みといった視線をスバルに向ける。

何故こうなるのか？

・まず、ミソラは超国民的アイドル。隣に座った時点で男子からは目の敵だ。

・第二にスバルの席は教室の隅辺り、即ち誰にも邪魔される事無くミソラの隣を独占し続ける事が出来る、オイシイ場所。

・そしてここが重要な三点目、彼女がはっきりと『スバルくん』と読んだからである。

これは二人が過去会ったことを示している。おまけに『くん』付けされている以上、親密な関係である事に間違いはない。

「では響さんの席はスバ『よろしくねスバルくん』」

「え！？あ、う、うん……。」

先生の声も聞かずにミソラはスバルの隣に座った。

そしていきなり初回のウインク付きの笑顔。ファンはらコレを間近で見ただけで天国に逝けてしまうほど強烈。しかもスバルが影となって他の男子には一切見えない。

(おのれエ……！！スバルウウウウウウ！！！)

荒くれた男子どもはスバルに対し激しい憎悪を持ったという。

後にこのミソラ争奪戦に敗れた哀れな男達は給食をヤケ食いしたと聞く。

そしてホームルームが終了した後ルナに、

「……後で私のところにいらっしやい？」

凄まじくドス黒い笑顔を差し向けられたという。

一方その頃……。

「ポロロン、お久しぶりねロック。」

「ケッ、もっと早く連絡寄越せってたんだ。」

既に彼らのウィザード、ウォーロックとそしてミソラの相棒『ハープ』はウィザードオンにして外に出ていた。

本来なら誰もが気づくはずなのだが皆ミソラに夢中になっているため気づかなかったのだ。

「あら、それじゃドッキリの意味が無いでしょ？」

「やれやれ……。俺のいつもの日常が崩れ去っていくぜ。」

「なら私がアグレッシブな日々に変えてあげるわよ」

「丁寧に断りさせていただきます（汗）。」

昼休み

「……で、ここが屋上だよ。」

「わあ〜！凄いい！」

スバルは先生からミソラの学校案内を任されてしまった。しかしスバルの方も満更ではなかったようだ。今思えば先生の粋な取り計らいだったのかもしれない。

「風が気持ちいい」

「うん、季節問わず楽しめるスポットだからね。」

スバルはフェンスにもたれ掛かりながら言った。そして辺りを見回す。そう、ここは確かにこの中学校内の有名スポット。

……であるはずだが今は誰もいない。

「ね、ねえスバルくん。」

「え、何？」

ミソラは急に顔を赤らめながらスバルに訊ねた。

何やら周りの雰囲気が一転した。

時期は春、とりあえず桜は咲いてはいるが・・・それ以上にピンクな感じがする。

「あ、あの、ね。私・・・ホントは転向するの咎められてたんだ。」

「え、じゃあ何で・・・。」

ミソラは『遂に来た!』と言うような表情をして大きく深呼吸をした。

ヒッヒッフー、ヒッヒッフーとラマーズ式呼吸法で息を整える。

そして遂に言葉を紡いだ。

スバルはミソラを優しく抱きしめた。

「ぼ、僕で・・・よければ・・・。」

体中から熱がこみ上げてくる。

恐らく今ならへそで灼熱の茶を沸かせられるだろう。

そしてミソラは、嬉しさの余り涙を流した。

「嬉しい・・・。」

二人はお互いの体から伝わるぬくもりを感じながら昼休みの残りを過ごした。

一方、教室……。

「感じるわ……。」

「い、委員長何をですか？」

「忌々しい何かをオオオ……。」

ルナは今なら大量のクリムゾンを生み出せるであろうと言っほどの
覇気を伴いながらドス黒いオーラを噴き出している。
いかん、理性が崩壊しかけたとゴン太とジャックは何とか宥めよう
とする。

「い、委員長落ち着いてくれよお！」

「そ、そうだぜ所詮は勘だろ？」

「黙らっしやいいいい！！！！！」

「」「ヒイツ！！？」「」

「こちらも相当苦労したと聞く……」

更にその頃……。

「へエ……。ここが地球ねエ……。悪くねエじゃん……」

ある電波体が動き始めていた……。

第二話 巡り合う赤い糸（後書き）

ども〜！いきなり何という展開にしてみましたのでしょ…
（オイ）。

ミソラが告白して、そしてスバルがハグしちゃいましたよ！
これからもよろしくお願いします！！！！

第三話 まさかの展開

キーンコーンカーンコーン……

「ではこれで今日の授業は終わりだ。皆気をつけて帰るように。」

「起立、礼……。」

『ありがとうございます……。』

ようやく今日の授業が終了し、開放された気分になる。

……のが普通なのだが教室中の皆は今日はスバルに対し憎悪を燃やし尽くしているため声が異常に低い。無論、ルナのあのオーラは収まるどころかその大きさを徐々に大きくさせていく。

「じゃ、僕帰るから！」

「あ、スバルくん待ってよ〜！」

そう言っただけで仲良く帰る二人。

だがその前にラスボスが立ちはだかった。

「……待ちなさい、スバルくん」

「い、委員長……。」

何といつの間にかルナがスバルとミソラの前に立っていた。

笑顔で語りかけているというのにその笑顔が大きくなれば大きくなるほど周りに気温が徐々に下がっていくのは気のせいだろうか？

その後ろにいるゴン太達はペコペコ頭を下げている。

「折角このクラスに転向してきたんですもの。色々聞いておかないと・・・ねえ？」

（目が笑ってないよ委員長・・・！）

一瞬だけスバルが見たあの鋭き眼光は正しく『獲物を追い詰めた時の目』。

スバルはもう、逃げ場は無かった。

頼みの綱のウォーロックとハーブは今、別行動をとっているため電波変換も無理だ。

観念したのか、深くいため息をつくと同時にスバルはがっくりと肩を落としたのだった。

「そう言えば家はどこなんですか？」

キザマロの、何気に呟いた一言が大惨事に繋がるとは思っても見なかった。

ミソラは『付いてきてみる？』と笑顔で言うのでついてくる。

学校から徒歩10分弱のところその家はあった。

町の端っこに立てられており屋根は青い。

そしてスバルは見慣れた・・・というよりここは・・・。

「・・・って僕の家？」

スバルがポカンとしながら呟いた。

そして油が切れたロボットみたいに首をギギギとミソラに向ければ

彼女は既に家の前に立っていた。

「というわけで改めて居候する事になった響ミソラです！よろしくね」

『マジですかあああああ！！？』

「うん、大マジ」

ミソラは否定する素振りすら全く見せ付けずそう言う。

スバルはもちろん驚いていたが今はそれ以上に後ろから来る殺気というものを背中に直に感じてしまっている。

「・・・どういう事かしらねえ・・・？」

ヤバイ、地面が震えている。

このまま委員長の怒りのボルテージが上がり続けたら地球はどうなってしまうのだろうか？

世界を幾度も救ったスバルですらもはやミソラの回答に全てを委ねるしかなかった。

スバルは心の中で激しく祈った。だが

「うん、この町に引越してくるのはいいんだけど知り合いがいなかったからスバルくんのお母様が家に招いてくださって。マネージヤーも『まあ、仕事に支障をきたさないのなら別にどこで住もうが問題は無いだろ』っていうんで」

と、鷹揚にミソラは答えた。

スバルは背中に感じる殺気の強さで委員長の心象を読み取る。

・・・少しは収まってきたようだ。

「なるほどねえ……。ま、これ以上二人が変な仲にならないのなら問題ないわ。」

ホッ、とようやく一息つくスバル。

嗚呼、まるで重苦しい鎧を外したかのような爽やかさだ。

しかしミソラは可愛らしく舌をペロツと出しながらスバルの腕を組むと、

「問題ないよ。私達カップルだもん」

……。爆弾発言。

見よ、委員長の怒りのボルテージの上昇率を。

もはやプログラムなしで『ファイナライズ』可能な域に達してしまわれている。

幸せ気分なミソラとは正反対に恐怖に震えるスバル。

そしてゴン太たちは……。

「あ、そろそろ俺牛丼を食わねえと！じゃあな！オックス行くぞ！」

『お、おう……。』

ゴン太はそう言いながらそのふくよかな体とは想像もしがたいスピードで家に駆け込んだ。
そしてキザマロは、

「僕も宿題がありますので……。ペディア！」

『この場にいると巻き込まれる確率……。！！』

と、これまた踵を返してしまう。

残るジャックも相棒のウィザードを見ながら、

「そ、そうだな！俺もキザマロに教えてもらわねえとなコーヴァス
！」

『イ、イエス！さっさと行くぜ！』

皆スバルを見捨て各々の向かう場所（という名の言い訳）へ向かっていく。

因みに超絶に蛇足だがジャックが話しているウィザードの『コーヴァス』元は凶悪なFM星人だったがデリートされた今ではWAXAから特別に許可を得てハンターV.Gで再構築したものである。

「さあて、どう始末付けてくれようかしら・・・？」

委員長、もはや今なら逆に地球を救えるのではないかというほどの禍々しいパワーをあふれ出させていく。
スバルのとった行動、それは・・・。

「・・・ミソラちゃん！早く来て！！！」

ミソラの手を繋いで家に駆け込むことだった・・・。

「ちっ、まあいいわ。明日、ゆっくりと話し合しましょう・・・ウフフ。」

誰となくルナは恐ろしい一言を呟いたのだという・・・。

スバル邸

・・・

「ハアゝ・・・死ぬかと思った・・・。」

「アハハ！スバルくんでもやっぱりルナちゃんの事は手に負えないんだ。」

スバルは今は自分の部屋にミソラを入れている。

今はあかねはパートの方に向かって行つたため今この家にはスバルとミソラしかない。スバルは入れてきたコーヒーで一服しながら落ち着こうとした。

「ミソラちゃんも少し『カップル』っていうのは自重してね？」

「え、何で？私のこと嫌いな・・・？」

「い、いやそうじゃなくてそれだと委員長やファンの人たちに殺されかねないから！」

そりゃあそうだ、誰もがこの光景を目にしたら眩きたくなる一言である。

超国民的アイドルと恋人になる＝全てのファンを敵に回すという事。

委員長一人であの始末、全ミソラファンを敵に回すとしたらおぞましい光景になる。

しかし、ミソラはスバルに抱きつきながらこういった。

「大丈夫だよ 私達の愛はそんな事じゃ壊れないもん！」

(そうきましたか・・・。)

苦笑いして見せたスバルだが、本当にミソラのことは好きなため良しとした。

と、ここでようやくウォーロックたちが帰ってきた。

「いよお今戻ったぜ！」

「ポロロン、すっかり仲良しね」

ミソラに抱きつかれたままのスバルを見てハープは笑った。

まあ、こんな状況を見てカップルだと思わないのが普通はありえないだろう。

更にはそれに乗じてかあかねも帰ってきた。

「ただいま・・・ってあら？早速幸せそうな事してるんじゃないかい」

抱きついたままのミソラを見てあかねは早速いじり始めた。ミソラは今や彼女の母であるあかねに向かってこう言った。

「はい！私達今やカップルなんです！」

「う、うんまあ・・・ア、アハハハ・・・。」

スバルも顔を赤くさせながら笑う事しか出来なかった。

「さあ〜てと！先ずはこの町に住む『ロックマン』とやらの戦闘力を調べねエとな。」

ヤンキー口調の盾型の電波体は指をパチンと鳴らした。それに乗じてウィルスがウジャウジャと集まり始める。そして電波体が手を振り、ウィルスたちは一斉に向かった。

「　　！オイ、スバル！」

「どうしたのロック？」

スバルは現実世界に出ているウォーロックに訊ねる。
ハープも慌てたように話を繋げる。

「大量のウィルスと一人の電波生命体の反応を感じたわ！」

「何ですって!?!」

それを聞くや否やあかねの制止も全く無視して二人は電波変換し、
外に飛び出した。

残されたあかねは心配そうに彼らが消えていった虚空を見詰める。

「・・・大丈夫かしら？」

「フッフッフ……ん？なんだありゃ？」

盾の電波生命体はしばらくウイルスによる破壊活動をウェーブロードから眺めていた。

しかし、その破壊活動が行われている広場でウイルスが突如あわられた青い少年によって次々とデリートされていく。

「オオウ！あれが噂のロックマンねエ！お手並み拝見つと……。」

しかし、ロックマンは手をソードに変換させた。

そして迫り狂うウイルスを切り払い、次々と切り裂いていった。

予想以上のやり手と見たのか上から眺めていた電波生命体は向かってくるウイルスの大群に命じロックマンに押し寄せた。だが、

「バトルカードプレデーション！フウジン……ラケット！！！」

焦ることなくロックマンは手を団扇に変え、風圧で大群を壁に押し付けた。

吹き飛ばされたウイルス達は風圧と叩きつけられた衝撃で起き上がれずにいる。

その隙を逃さずロックマンは更に畳み掛ける。

「ギャラクシーアドバンス！……インパクトキャノン！！！」

凄まじい一撃が、ウイルス達に打ち込まれる。

一箇所に固まっていたためにウイルス達は全滅した。

そしてハープ・ノートも駆け寄ってくる。

「こつちも終わったよ!」

「じゃあ、後は電波生命体なんだろうけど……。」

二人は辺りを見回す。

そしてハーブ・ノートはウェーブロードから眺める一体の電波体を発見した。

「あ、あそこ!」

「待てっ!」

しかし電波生命体は逃げる素振りすら見せず、その場に佇んでいた。そして二人を目の当たりにしてようやく言葉を出した。

「オオウ!誰かと思いきやウォーロックじゃねエか!それにハーブもか。」

「お前は……スクトウム!」

「あなたが何故ここに!!!?」

ウォーロックは盾のような電波生命体を『スクトウム』と呼んだ。そしてどうやらハーブも面識があるらしい。

「ロック、知ってるの?」

「昔、コーヴァスとヴァルゴが所属していた犯罪集団『ブラックホル』の一員だ!」

「ええ、今や様々な星を奪っては売り払うタチの悪い『星の闇商社』よ！」

「そんな言い方はねエだろお？」

スクトウムは肩をすくめた。

しかしスバル達も腕を下ろそうとしない。

「ところで、アンタが噂のロックマン、か。UFOが目をつけるだけの存在であることはよくわかったよ。・・・次は容赦しねエからな。」

そう言い残してスクトウムはその場を去っていった。

辺りにはウイルスもいなかったのでスバル達は一旦帰ることにした。

スバル邸

「「ただいま！」」

「おかえりなさい！怪我とかしてない！？」

「大丈夫だよ母さん。」

スバル達は笑顔で帰ってきた。

見たところ、大きな怪我も無かったのであかねの心配も吹き飛ぶ。

疲れた様子でミソラと一緒にソファに座り込むとあかねが話しかけてきた。

「あ、ところで今週の日曜日ミソラちゃん空いているかしら？」

「はい。しばらくは休暇なので……。」

「なら春だし皆でドリームアイランドの公園でお花見でもしようかと思ってるのよ。」

大吾さんも久しぶりに休みが取れるって言ってたし。」

花見か、とスバルは天井を見上げる。

そういえばここ最近まともに花見などしなかったなと思う。

父の大吾も中々仕事でこれなかったこともあり、確かに行きたい。

「それじゃ決まりだね。」

「ええ。大吾さんは今日も残業があるって言うから先に夕飯にしましょ。」

「「はい!!」」

スバルとミソラは夕飯に望んだ……。

某国某所

—

「ってな感じだぜ。参考になったかUFO?」

「モチロン、サンキュービガヨ!」

ここはとある研究施設。

いまやすっかり廃棄されているような感じだが機械自体は生きており、彼らがこうして利用している。

「さて、ファントム・ブラックよ。完成したかな?」

「んфффф。当然だ!ワザワザWAXAに忍び込んでデータを頂戴したのだからな。」

老人のような電波体が振り返ったその先に、いた。

嘗て何度も暗躍した敵、ファントム・ブラック。

どうやら打倒ロックマンに燃えているようだ。

「これで君達も人間に頼らずとも適当なワイザードさえあれば電波変換できるようになる!」

ファントム・ブラックはそう言いながらチップみたいなのを渡す。

「これはムーで生産されていた『エランド』のデータを基にしたも

のだ。」

エラントとはムーの科学力で作られた電波兵士。しかも戦闘能力が高いだけでなくムーの電波生命体と電波変換も可能なのだ。

それをこのチップに応用したわけである。

「このたびの協力、感謝します。」

「君のおかげで今回の仕事も順調に行きそうだよ。」

「ソフソフ。私はただロックマンに復讐したいだけだ。」

悪の脚本は描き続かっていた

第三話 まさかの展開（後書き）

スミマセン、コーヴァス結構好きだったので復活させちゃいました。
そしてファントム・ブラックまで・・・。

もはやミソラがスバルの家に居候するのは王道となってきたいるの
でしょうか？

では読んでくださりありがとうございました！！

第四話 星空の下で感じる幸せ

さて、スバルとミソラはあかねの夕食を食べていた。

あかねの作る料理は絶品で、嘗て引きこもりだったスバルも彼女の手料理を食べれば元気が自然と湧いてくるほどだ。残念な部分は父の大吾が仕事で今いないことであろう。それでも美味しく感じられた。

「ミソラちゃん、お口に合うかしら？」

「はい！とってもおいしいです！」

ミソラのその言葉に偽りは無く目の前に盛られている料理がダム決壊の如くのスピードで消え去っていくではないか。

あかねの料理が美味しいのはもちろんのことだがそれ以上にスバルに告白できた事が何より嬉しかったのであろう、相乗効果というモノを生み出している。

『・・・オイ、ミソラって普段はこれぐらい大食らいなのか？』

『いいえ！育ち盛り&恋の成就による相乗効果よ！』

ウォーロックやハーブも意味不明な会話を交わしている。

だが、箸が進んでいるのはミソラだけではない。

そう、スバルも嬉しかったのである。こちらもゲシュタルト崩壊のように凄まじい速度で料理が平らげられていく。

「「「うちそうさまでしたー！！！！」」」

「はい、お粗末様。」

あかねは綺麗に食べつくされた後の皿を片付けようと腰を上げる。

「あ、お母様手伝いましょうか？」

「良いのよこれ位。それに今日から家族なんだから『お母さん』でいいわ。」

「ハイ！お母さん！！！」

するとミソラの笑顔が一際大きくなった。

彼女が笑顔で『お母さん』と呼ばれた事が、何より嬉しかったのだ。するとスバルがミソラを呼んだ。

「ミソラちゃん！これから展望台に行こうと思うんだけど一緒に行く？」

「うん！じゃお母さん行つてきます！」

「気を付けていくのよー！」

あかねもいつもの事だから笑顔で承諾し、二人を見送った。

そして皿洗いしながら一人呟いた。

「うふふ スバルも遂に彼女持ちね〜」

その後は上機嫌な鼻歌をしながら皿洗いを続けた。

「あら、ロックは行かないのかしら？」

既にワイザードオンしてあるハーブが、ウォーロックに訊ねた。テレビの前に置かれているソファに寝転がっている彼はあくびをしながら言う。

「どーせ展望台だろ？あそこヒマなんだよ！それより今から『レジエンドポリス24時』が始まる時間なんだぜ！！」

ウォーロックはそう言いながらリモコンのボタンを押す。

彼が見ようとしているのは今大人気の刑事ドラマ『レジエンドポリス24時』。

至極単純なネーミングと在り来たりな王道パターンの多さが逆に大反響を呼んでいる。

しかしハーブは顔を歪めながらリモコンを奪い去っていった。

「いいえ！この時間帯は『いい旅・電波気分』に決まってるでしょ！！」

そしてチャンネルを変えるハーブ。

彼女の見ようとしている番組も大人気の景色を紹介する番組だ。

ガッツなウォーロックに比べれば、確かにハーブは風情のある所が好きようだ。

因みにミソラもいずれはこの番組に（スバルと一緒に）出てみたいらしい。

「オイゴラ！今時刑事ドラマを見ないとは何事かあ！者共出会えい！！」

「・・・それは大河ドラマじゃなくて？」

そんな宇宙人の新鮮なコントにクスクス笑うあかねだった。

「わあ！綺麗……。」

「そつでなきやこんな所に展望台なんて立ってないよ。」

展望台に付いた彼らを出迎えたのは辺りを包む美しき星空。

まるで宝石のように散りばられたそれは見る者の心を奪う。

本来はよく見るための高台があるのだが今回は草原に寝転がる事にした。

「……思えば僕とミソラちゃんはここで出会ったんだよね。」

「うん。あの時の私は歌う価値を見出せていなかった……。」

この星空を見上げながら二人は過去を振り返った。

あの時のミソラのメロディは、確かに綺麗ではあったが悲しみも含まれていた。

彼女の音楽は、心の現われ。彼女は助けを求めていたのだと思う。

そんな中現れたのが、今隣にいる一人の少年。

「……スバルくんがいなかったら、きっと私はいなかったのかも
しれない……。」

あの時は本当に苦しかった。

そんな彼女を支えてくれたのが星河スバル。今や彼女の大好きな人
何時からだろう、ミソラは彼のためなら何でもできると思っていた。
そのために彼を裏切ってしまった事もあった。けれどもこうやって
彼はいつでもミソラを助け出している。

「……でも、今は違つてしょ。」

「……?」

「え……つと、うまく言えなんだけど……『幸せだ』って思えない?」

「……うん。私、今とっても幸せ……。」

彼は顔を赤らめながら言った。そしてミソラは笑顔で答える。
ミソラはこの彼の優しさに、温もりに、惚れたのだろう。
こんなにも優しい彼に。

「……あ、流れ星!」

「え、あ、ホントだ!」

今一瞬、夜空を駆ける流れ星が落ちた。
その青白き閃光は一瞬であったが、忘れる事は無い。
願わくば、もう一度降って欲しいところだ。

「……あ、また流れたよ!」

「うん! 願い事しちゃった!」

「実は僕も……。」

……実は二人の願い事は重なっていた。
それに気づいたのか、二人は一齐に言う事にした。
タイミングを合わせ、呼吸を整えていった。

「この幸せな時間が何時までも続きますように。」

二人は笑顔で笑い、そして唇を重ねた。

そろそろ寒くなるので二人は戻る事にした。
そして家の玄関を開ける。

「「ただいま。」」

「お帰りなさい。すっかりカップルね。」

「ああ、うちのスバルもようやく『漢』になったもんだ。」

「あ、父さん帰ってたんだ。」

大吾はリビングでコーヒーを飲みながら二人の帰りを待っていた。
そして二人の仲のよさを改めて実感する。

「じゃ、折角だしミソラもこれからは俺の事を『お父さん』って呼ぶように。」

「ハイ、お父さん！」

ミソラは、心の奥底から幸せを感じていた。

「行けえええ！そこだ大力いいいい！！コブラツイストだああああ
ツ！！！！」

「そう、そこを・・・そう！そのまま一気に固めなさい！！！」

突如、テレビの方から大歓声が聞こえてきた。

二人が振り返るとプロレス番組を見ているウォーロックとハープの
姿が。

あの後どうやらあかねの仲裁で（二人の見たがっていた番組はそれ
ぞれビデオで録画する事で合意）面白そうなプロレス番組を見るこ
とにしたら、これが以外にもツボにハマったらしく、この通り熱狂
的になっているわけである。

「あの通り二人ももう立派な家族の一員だ。」

「家族が増えて母さん嬉しいわ〜。」

「ア、アハハハハ・・・。」

二人は乾ききった声で笑う事しか出来なかったそうなの・・・。

さて、時は変わって風呂上り……。

「ふっサツパリした！」

ミソラが風呂から上がった。

スバルもすでに風呂に入っており、宿題も済ました。因みにウォーロックとハーブはその後、大力が逆転負けした事に激しく失望しそのままふてくされてハンターの中に戻っていった。そしてスバルとミソラはスバルのベッドの上で他愛も無い話をしていたがもう夜遅いことに気づくと、ここで……。

「あれ？そういえばミソラちゃんの布団って、どこ？」

思えばミソラはどこで寝るのか全く聞かされていない。普通ならばあかねの部屋であろう。

そして間違っただけでも大吾の部屋はあつてはならない。もしそうであれば自分の父親であるのがオーバークイルだ。しかしミソラは歌うように言った。

「もちろんスバルくんの布団で寝るんだよ」

「ああ、そうなんだ……って何ですとおおおっ!!!?!?」

因みに今、夜の11:00をとっくに過ぎている。ある意味近所迷惑だが驚くのが一般的な行動だろう。

「えー、そんなに驚く事?」

「で、でっでっでっ、でもある意味ヤバくない……!!!?!?」

「私達カップルなんだし大丈夫」

ミソラはスバルの腕に飛びつきながらそのままスバルのベッドに潜り込んだ。

スバルは謎の力に一切抵抗できずに布団へのご招待される。

「あっははは スバルくんってやっぱり温かい……」

「ミ、ミソラちゃん引っ付きすぎ……//」

ミソラは現在、薄いパジャマを装備。

すぐにミソラの体温が、じかに肌に伝わってくる。スバルの心臓はどんどん早くなっていく。

(あわわ……!落ち着け、落ち着くんだけ僕!!!!)

しかし神は更なる試練を与えた。

「スー……、スー……。」

(ってミソラちゃんもう寝ちゃったああああ!!?)

なんと、スバルの首元から心地よさそうなミソラの寝息が聞こえてくる。

勿論腕は抱かれたまま、おまけに首元に彼女の理性までくすぐらせるような寝息が当たると。

(どうしよ!? 僕、どうしよおお!!?)

そのスバルの問いに答えられるものはいない。
今やもう夜中、12:00近く。

周りは静寂に包まれており、ウォーロックたちの声も聞こえない。

そう、『何をしようが誰にも止められない状況』になりつつあった。
。。。

(って何想像してんだ僕 !!? わあああ 煩惱退散 !
!?!)

こういう時だけいつもは喧しいウォーロックを恨めしく思う。
スバルは思春期真っ只中。

そんな彼は遂に……気絶した。

「あれ？もスバルくん寝ちやっただの？」

「と、いうより始めての出来事がありすぎて耐えられなかったみたい……。」

「何で女ってのはこんな事したがるんだ？」

実は起きていた三人だったと言う……。

第四話 星空の下で感じる幸せ（後書き）

やっぱりスバルミソ路線。今回はかなり甘くしてみた方です。つてかスバルが何気に口説きに入っていたりするかも……。ではでは、感想お待ちしております。

今回も読んでいただき真にありがとうございます!!!

第五話 桜舞い散るお花見

ミソラがこの町にやってきてはや数日。

星河一家は今日は以前、あかねが言っていたようにドリーム公園に家族全員で花見に来ていた。

本当ならルナ達を誘ってもよかったのだがたまには家族水入らずのお出かけも良い物である。

ウェーブライナーを降りてみればマテリアルウェーブで構築されていない、本物の桜が辺りを桃色一色に塗り染めている。

「わぁ！すごい！」

「本当！花見なんて何年振りかな？」

「はっはっは。俺も家族で花見に来るのは何年振りだろうな？」

「さあさ、ロックくん達に場所を任せてあるそうだから行きましょ。」

「

そう、実は先にウォーロックとハープには場所取りを任せてある。

とは言えここは人気の花見スポット。早々簡単に場所が取れるものではない。

しかし、言ってみれば以外にもウォーロックとハープは大きな桜のすぐしたという、中々の好立地をとっているではないか。

桜の花びらは常に舞い散り、周りの景観もいい。

「うおっしゃあ！ウォーロックとハープよ！グッジョブ！」

それを見た大吾は親指を立てる。

同じくしてウォーロックも親指を絶て、歯をキラリ光らせる。

「ケツ、俺をなめるなってーの大吾！」

「（ホントは脅して・・・なんて言わない方がいいわね。）」

言わぬが仏の類であろう。

「さ、早速お弁当を広げましょ。」

「「「「やったあゝゝ!!!」「」」」

三人は大いに手を広げ喜んだと言う（大人が約一名）。

そしてウォーロックとハーブは人間の食事を食べられないため、実質ここからがお役御免ということになってしまう。

「さてと、俺は寝るとするかなあゝ・・・。」

「ポロン、じゃ私もそうしようかしら」

こうして電波体二人は寝転がってしまった。

まあ気持ちよさそうに寝てるので起こす方が面倒だ。

それはさておきあかねの渾身の弁当を見て三人は息を飲んだ。

「さ、三段重ねの重箱・・・！」

「一段目はお赤飯、二段目はヘルシーな副菜、そして三段目は豪華なから揚げを初めとしたおかず・・・!!！」

「正しくどれをとっても最高完璧な配合バランス・・・!!！」

「当然よ！」

まさしく今のスバル達はお預けを食らった犬も同然だ。
そして箸を取り、手を合わせる。

「「「「「いただきま〜〜す！！！」「」「」

彼らが食事をする姿は本当に幸せそうだったと言う・・・。

ここは以前から使われているゴミ集積所。
普段なら関係者以外立ち入り禁止の場所ではあるが何やら音が聞こえる。

その奥には……。

『いつかこの手に触れる明日への地図、強く、高く、届くまで、輝いて』

「ふんふん ミソラちゃんの曲は何時間聞いても最高じゃのう」

「そうじゃなクラウンよ。これでユーレイとなった余にも生きる希望がわいてきたわい」

ゴミ集積所にたまたまあつたらしいラジオから流れる音楽をノリノリで聴いているのはユーレイのジャンクローヌ・ベルモンド・ジョルジョワール又十四世（以下クローヌ又十四世と略）と彼に取り付いた冠のような電液体『クラウン』である。

どうやら彼もキャンサーやウルフと同じく地球に残留した模様。

そしてミソラの曲と出会い、このような熱狂的ファンとなってしまうっている。

「はあ……にしても余はユーレイじゃからな。ミソラちゃんのライブにいけないのが口惜しいわい……。」

「まあ今度ワシも忍び込んでカメラで録画してやるから安心せい。」

因みにクラウンが提案した事は違法である。皆さんも気をつけましょう。

と、そんな一組をある電液体が上空から窺っていた。

『ブラックホール』のリーダー格、UFOである。

「アレハ、クラウン！ヤツホド戦闘力が高い電波体ヲ放ツテオクノハモツタイナイビガネ。」

そう考えたUFOは一気にクラウンたちに近づいた。曲に戯れている最中とは言え、クラウンもやってきた電波体の力の大きさに回りを探る。

「?どうしたクラウン？」

「・・・何かが来る！電波変換じゃクローヌ！」

クローヌ十四世は状況が飲み込めずにいたがとりあえず電波変換し『クラウン・サンダー』となった。そしてUFOは一気に舞い降りた。

「ヨ！久シブリビガ、クラウン！」

「お主は・・・UFO！何故この星に!？」

クラウンは周りに多数のドクロを従え、迎え撃つ準備をしていた。一方のUFOはそのまま怪しく宙を漂いながら話し続ける。

「オイオイ！我ラノ事ヲ知ラナイトハ言ワセナイビガ。」

「まさか・・・この星も狙っておるのか！」

「ソウイウ事ビガ！ソノ前ニオ前ヲ使ツテロックマント戦ワセテヤルビガ〜!!!!」

そう言うとUFOは高く舞い上がった。

クラウンは何をしでかすか、様子をじっと窺っている。

しかしUFOはクラウン・サンダーの真上にまで来ると怪しげな光を出した。

怪しげな光をまともに食らってしまったクラウン・サンダーは苦しみ始める。

「な、何じゃこれは・・・ぬううあああああああ!!!??」

「安心スルビガ。ソレハタダノ『洗脳光線』ビガヨ。」

「一体・・・何の目的で・・・ぐうあっ!!!??」

UFOは容赦なくそのまま洗脳光線を当て続けた。

そしてとうとう苦悶に耐え切れなくなったクラウンは地に伏せてしまふ。

表情こそ無表情なもの、眼差しを冷酷にして言い放った。

「言ッタハズビガヨ。『ロックマント戦ワス』トビガネ・・・。」

さて、お弁当も終わり楽しい団欒もそろそろ終わりを迎えた。
ついでにウォーロック達もようやく起き上がる。

「ふあゝあ。よく寝たぜ……。」

「ええ。お昼寝するのも最適ね、ここ。」

電波体二人はどうやら（昼寝場として）ここを気に入ったようだ。
展開していたランチマットや辺りのゴミを綺麗さっぱり片付けた。

「じゃ、そろそろ撤収……。」

と、大吾が言いかけたときだった。

「うわあああ　　！！！！ユーレイだあああ！！！！？」

「真昼間からでるお化けなんて……ありえない！！！！！」

突如人々の悲鳴が響き渡ってきた。

騒ぎに気づいたスバルとミソラは辺りを見回す。
すると確かに宙にドクロが浮いているではないか！

「あれは確か・・・クラウン・サンダーの！？」

「ああ、間違いねえぜ！ありゃクラウンの手下どもだ！」

ドクロはボーガン、ランス、ハンマーなどの武器を用い、人々に襲い掛かっていく。

逃げ惑う人々はたちまちドクロに取り囲まれてしまった。
スバルとミソラは大吾とあかねの方に振り返る。

「父さん、母さん！荷物をもって先に帰って！」

「大丈夫、ちゃんと帰ってくるから！」

そついい切った二人にあかねは心配そうな顔をするが大吾は信頼しきったような表情だった。

そして二人の肩に両手を乗せ力強く頷いた。

「わかった。ちゃんと帰って来るんだぞ。」

「うん！！」

それだけの会話を交わし大吾はあかねを連れ、先にウェーブライナーに乗って帰った。

それを見届けた二人は人気の無いところへと走りこむ。
そしてハンターV.Gを高々と掲げる！

「行くよ、ロック！クラウン・サンダーを止めるんだ！」

「分かりきってんだ！」

「ハープもスタンバイはいい？」

「いつでもOKよ、ミソラ！」

二人は光に包まれる！！！！

「電波変換！星河スバル、オンエア！」

「電波変換！響ミソラ、オンエア！」

二人は電波変換し、ロックマンとハープ・ノートとなった。
そして人々に襲い掛かる無数のドクロの群れにかかっていった。

第五話 桜舞い散るお花見（後書き）

お花見いいですよね。え、僕ですか？忙しくていけません（泣）
そして出しちゃいましたクラウン・サンダー！実は大好きです！！！！
次回は暴走クラウンとの対決！こっご期待！！！！

第六話 暴走クラウン！

「うわあああ ツ！！！！」

「た、助けてえ ！！！！」

人々は逃げ惑う。

宙に浮くドクロから逃れようと。

しかし、取り囲まれてしまい身動きがとれずにいる。
ドクロはそれぞれ武器を持って人々に詰め寄った。

「ロックバスター！」

「シヨックノート！」

突如、放たれた閃光と音符がドクロを攻撃した。
攻撃されたドクロはそのままデリートされていく。
そして二人の戦士は降り立った。

「あ、あれってもしかしてロックマンじゃ！？」

「せ、世界を救ったヒーローだよな！？」

ロックマンを見るなり歓喜する人々。

その様子に顔を赤くするスバルだった。

「さ、行くよロックマン！」

「え、あ、うん！」

ハープ・ノートに先導され、ようやく動くロックマン。
その後も迫り来るどくろを千切っては投げ、千切っては投げた。
そしてようやくゴミ集積所の奥へとたどり着いた。
クラウン・サンダーはそこにたたずんでいた。

「見つけたぞ！クラウン・サンダー！！」

「いい加減に大人しくなさい！！」

ロックマンはバスターを、ハープ・ノートはギターを構える。
しかし、一方のクラウンは様子がおかしい。
今までのクラウンとは到底思えない殺気を醸し出している。

「おい、スバル！クラウンの様子がヘンだぜ！？」

「ええ、なんとというか・・・我を失っているのかしら？」

ウォーロックとハープもクラウンの違和感に気が付く。
と、次の瞬間クラウンは両手を広げ、ドクロを出した。
出したドクロにはボーガンが装備されていた。

「ウガアアアア！！イカクボーガン！！」

ドクロはクラウンの指示に合わせ、矢を放った。
ロックマンとハープ・ノートは飛び上がり矢をかわす。
そしてウェーブロードに飛び移り、反撃へと転じた。

「バトルカード、マッドバルカン！」

「パルスソングー!!」

ロックマンは左手をバルカンへと変化させ、狙いを定める。同じくハーブ・ノートはギターをかき鳴らしハート型の音波を飛ばした。

だがクラウンは彼らと同じく飛び上がり、攻撃を回避する。クラウンはウェーブロードに飛び乗ると更に攻撃を繰り出してきた。

「又オオオオオオ!!! フォールサンダー!!!」

「うわああああっ!!!」

「きゃあああああ!!!」

三度降る落雷がロックマンとハーブ・ノートを捕らえた。しかも落雷のせいで体が麻痺してしまう。更なる追い討ちをかけようとクラウンはドクロを呼び出した。

「イカクボーガン、トツゲキランス、ハジヨウハンマー!!!」

次々とドクロが攻撃を繰り出した。

麻痺しているため、ロックマンとハーブ・ノートは合えなく袋叩きを食らってしまう。

そして何とか身体を起こした。

「っ、強い・・・!!」

「ああ、つってもアイツここまで強かったか!？」

スバルとウォーロックは以前、彼と戦った事がある。

そのときも善戦はしたがここまでには至らなかったはずだ。しかし、クラウンはもう一度落雷を落とす。

「フォールサンダー!!!」

「そうは行かないよ！バリアー!!」

ハーブ・ノートは危ういところでバリアを展開させた。落雷はバリアによって瞬く間に弾かれてしまう。ホッ、と一瞬安堵したがクラウンの暴走は終わらない。

「ハジヨウハンマー!!!」

ドクロがハンマーを振り下ろし、衝撃波を巻き起こす。衝撃波はバリアを何と剥ぎ取ってしまった。

「グオオオオオ!!!トツゲキランス!!!」

「ミソラちゃん危ない!!!」

繰り出されたドクロはランスをドリルのように回転させながら突き出す。

スバルはミソラの前に立ち、ガードで庇おうとするがランスによってガードは崩されてしまう。

クラウンは執拗に落雷を落とし続けた。

「うわああああ!!!」

「スバルくん!!!」

ミソラの前に立っていたため、スバルは落雷を全て受けてしまった。体中から煙を上げながら片膝を突いてしまうスバル。

「スバルくんは何するのよこのガイコツ！！ショックノート！！」

ミソラはギターを弾くように弾き、音符型の攻撃を出した。しかし余りにも直線的なためクラウンは悠々とそれを避ける。外れてしまったショックノートはゴミの山に当たった。と、その時歌が流れた。

『見上げる空は 心に積もる願いの色 描く夢を映し出す』

「これって・・・私の曲!？」

どうやらミソラの出したショックノートが弾みでラジオにスイッチを入れたようだ。

すると、クラウンは急に動きを止める。まるでショートしたかのようだ。

「.....」

「ねえ、もしかしてクラウンはあなたのファンじゃない?」

「ってことは.....」

ハープの提案にミソラは何かを思いつく。

一方のスバルもようやく落雷のダメージから立ち上がった。すると、

「必ず いつか この手に 触れる明日への地図」

ミソラは突然歌いだした。

スバルは一瞬お出来事に啞然となるが対象にクラウンの硬直は続く。いや、それどころか両目の端に涙を浮かべているではないか！

「強く 高く届くまで 輝いて」

ミソラは歌い終わり盛大に決めポーズをとる。

クラウンの視線はもはやミソラに集まっている。

ウォーロックは一気に叫んだ。

「今だスバル！」

「バトルカード、プレデーション！！ジャングルストーム！！！」

凄まじい風が、クラウンの身体を容赦なく襲っていく。

おまけに彼は電機属性。木属性のバトルカードには滅法弱い。

その狙いは見事的中し、クラウン・サンダーは倒れた。

「む・・・むむむう・・・アチコチがズキズキするわい・・・。」

「どうやら元に戻ったようだな。」

「ええ、この口調はいつものクラウンね。」

ウォーロックとハープも彼が元に戻った事を確認する。

するとクラウン・サンダーは電波変換を解き、元のクローヌ十四世とクラウンに分離した。

それを見てスバルたちも電波変換を解除する。

目を覚ましたクローヌ十四世とクラウンはスバルたちを見る。

「お、お主は確か星河スバル、そしてミ、ミ、ミ、」

「ミソラちゃんではないかあああああ！！！！」

ミソラを見るや否や急にアグレッシブになる老人二人。

すると腰にきたのか慌てて腰を抑える。(元々ユーレイなるクローヌ十四世に腰の痛みを感じるかどうかは別として)

彼らはミソラにサインや一曲アンコールをせがむ等など老人とは思えないはしゃぎぶりである。

「ホントに、ミソラちゃんが好きなんだねこの二人……。」

「老いぼれ、しかもユーレイすら虜にするとは恐るべきだな……。」

「

ボソボソと呟くスバルとウォーロック。

しかしそれをクラウン達が聞き取る事は無かった。

とりあえず手短なところにあったハンカチにサインを終えるミソラ。

「で、何で暴走してたのよアンタ達。」

ハープがようやくよく本題を切り出した。

クラウンは『おお、』と呟くと話し始めた。

「いやな、急にUFOの奴が出てきおったんじゃ。」

「「UFOだと(ですって)！！?」「」

クラウンの第一声でウォーロックとハーブの声は珍しく八モる。
この小さな奇跡に目をパチクリさせながらもスバルとミソラは訊ねる。

「あ、あのさ……。」

「何、その『UFO』って?」

するとクラウンが前に出てきて説明する。

因みに話に興味の無いクローヌ十四世はミソラから貰ったサイン入りハンカチを宝物のように扱っている。

「うむ、『UFO』とは闇の星商社、『ブラックホール』のリーダーじゃ。」

かつてアンドロメダのように開発された電波兵器なんじゃ。」

「で、電波兵器!?!?」

スバルとミソラは思わず声を荒げてしまった。

しかし無理も無いだろう。嘗て惑星すら滅ぼした事のある『アンドロメダ』という電波兵器と同じような存在とは信じたくも無いだろう。

「しかし、奴は急に自我を持ち初め、そして暴れだしおった。」

ケフェウス様はやむを得ずUFOを永久凍結する事にしたのじゃが……。」

「奴は脱走し、姿をくらませた。ところがそれから数年たって奴はいくつかの電波生命体を呼び集め、とある犯罪集団を作り出した。」

「それがUFOが事実上支配する組織、『ブラックホール』よ。」
クラウン、ウォーロック、ハーブがそれぞれ説明する。

「で、話は戻るがの。そのUFOが突然光線を余に浴びさせよったんじゃ！」

「それで暴走したってワケか。」

「どつちかという洗脳っぽいね。」

ウォーロックとスバルは肩をすくめて見せる。
そしてクラウンもまた肩を落とす。

「それにしても操られていたとは言え、ミソラちゃんに攻撃してしまっなど……。」

「ま、まあ私はいいよ。大丈夫！」

ミソラはクラウンに笑顔を向けた。
途端、クラウンは爆発し、飛び上がった。

「ぬっほおお　　っ!!！」

「ずるいぞクラウン！お主だけミソラちゃんのを笑顔を独り占めしよっなど！」

と、突如どうでもいい喧嘩が始まってしまった。
周りを見ても騒ぎは収まってきたようだ。
それを見たスバルとミソラは撤収する事にした。

「お、ちょっと待たれよミソラちゃん。」

クラウンがミソラを呼び止めた。

因みにスバルは振り返らない。お呼びでないのだから。

とはいえ、いつも穏やかな彼もいくらか青筋を浮かべてしまっているが。

「何？」

「もし、必要とあらばいつでも力になるぞい！！」

「あ、ありがとう……。」

ミソラは苦笑いで、スバルは一切振り返らずにその場を去った。

スバル邸

「はあ、とんだお花見だったね。」

「でも私は嬉しかったよ。」

そういつてベッドの上から笑顔を向けるミソラ。

と、ここでハンターが鳴り出した。

着信音から見てどうやらメールらしい。

スバルは送信されたメールを読み始めた。

「あ、委員長からだ。」

「ルナちゃんは何て？」

「えつとね……」

『星河くん、あとそこにいるだろうからミソラちゃんへ。』

実はパパがヤシブタウンのデパート屋上で展覧会をすることになったの。

その名も『今消えつつある熱帯雨林』よ。

今度の日曜の朝10:00にウェーブステーション前に集合よ！それじゃ』

・・・って拒否権なしですか？」

文中に『できれば』のような意味の言葉が見当たらないためおおよそ強制だろう。

苦笑いを浮かべるスバルに対しミソラは小首をかしげた。

「あれ？ヤシブタウンって前へビの展覧会やってなかったけ？」

「うん、今度やる展覧会は生き物よりも自然をテーマにするんだって。

実物の植物を展覧するらしいよ。」

スバルはメールに添付されていた広告を見てそう答えた。
そしてミソラはポンと手をたたく。

「うん、私近くで撮影あるから丁度いけるよ！」

「じゃあ決まりだね。」

スバルはルナに返信のメールを打っていた。

一方ウオーロックとハーブは・・・。

(ってかミソラってえらくスバルと都合が合うな？)

(ミソラがそうなるように頑張っているのよ)

と、話していたと言う・・・。

「ヘエ〜ん、そんな程度なのか？」

「ダガ油断八禁物ビガ。」

「そうだな。過去三度も地球を危機から救った人物だからな。」

スクトゥムとUFO、そして鳥のような電波体は話し合っていた。すると地面に黒い穴が開く。

そこから出てきたのはファントム・ブラックだった。

「ンフフフ！耳寄り情報を手に入れてきたぞ。」

「今度八何ビガカ、ファントム・ブラック？」

「ロックマンの親友の小娘の父親が今度植物の展覧会をするらしい。おそらく、ロックマンこと星河スバルもそこへ移動するだろう。」

それは耳寄り情報だと、スクトゥムが腰を上げた。

「植物と来たなら・・・俺の出番だねエ・・・!!!!」

高らかに笑うスクトゥムだった。

第六話 暴走クラウン！（後書き）

今更ながらこのお話はゲームとアニメの設定が混じっております。
今更スミマセンでした。

今回はクラウン・サンダーとのバトル如何でしたか？

いい点や悪い点も含めて感想をもらえるとすっごく嬉しいです！！
では、今日はこの辺で~~~~。

第七話 展覧会での激闘

「さ、皆いくわよ!」

時間は過ぎ去って早くも日曜日となった。

スバル達はルナの約束（と言う名の強制）でヤシブタウンにいつものメンバーで来ていた。

もつとも、興味があるのはルナとミソラ、そしてキザマロくらいでジャックやゴン太はそれぞれ別の事を考えていた。

（まったく！俺は植物なんざ興味ねーっつーの!）

（ここレストランの牛丼うまいんだよなあ・・・。）

この二人を見てハアと肩をすくめるコーヴァスとオックス。

この電波体達の苦勞が忍ばれる・・・。

しかしそんな事は露知らずルナを筆頭に屋上へと案内させられた。

屋上は前回のヘビの展覧会の時とは違い植物がメインなためか以前より大きく作られている。

「オイ、スバル。俺退屈だから別んどこ行っていいか?」

「まあ我慢してよロック。委員長怒ると手が付けられないんだから・・・。」

そう言いながら展覧会のゲートを潜った。

ゲートを潜った先には人口の川、そして木造の小型舟があった。

スバル達が（ルナを除く）小首をかしげていると係員が説明してくる。

「ようこそいらっしやいました。この展覧会はよりよく本格的な熱帯雨林を楽しんでいただくため二人一組のペアで船に乗っていただきます。」

なるほど、とゴン太を除くスバル達は理解した。

確かに冒険のようにすれば多少なりとも臨場感が溢れてくる。と、ここでルナが持ちかけてきた。

「さ、早速ペアを組みましょう。」

ここでようやくスバル達はルナの狙いに気づいた。

有無を言わせぬ迫力を伴ってルナは静かにスバルに歩み寄る。

しかしスバルの腕はいつの間にかミソラに抱かれている。

この修羅場を切り抜けようと、スバルはゴン太とキザマロにSOSを求める。

「ゴン太くん！僕とペアを！」

「お、おう！それが一番だな！」

ちやっかりと一抜けしおったよ、この二人。

その間にもルナは足を進めてくる。

今度はジャックに救援要請を試みる。が、

（無理無理！俺じゃ無理！！！てか、お前がルナと乗れ！）

すっかり冷や汗ダダラダで首を必死に横に振った。

無言だったと言いたい事はよく分かった。

そしてついに決断を迫られる事となった。

「さあスバルくん！」

「私とルナちゃん、どっちと乗るつもり?!?!?」

「……（ええい、もうヤケクソだ!!!）」

スバルは顔を真っ赤にさせ、ミソラの手をとり近くにあった船に乗った。

即ちペアはスバルとミソラ、ゴン太とキザマロ、そして鬼……ではなくルナとジャックのペアとなった。

「では出発します。」

係員はそう言いながらスイッチを押す。

ガクン、と船が一瞬だけゆれ動き出したのだった。

「うわぁー！凄いや、色んな植物があるよスバルくん！」

「う、うん……。そだね……。」

スバルはガチガチだった。

確かにへびなどの生物はいないが変わりに現地直送の大型食虫植物もあった。

しかしそれ以上に船の後方から見なくても分かるほど禍々しいオラを醸し出しているルナの視線が怖かった。だがスバル以上に可哀想なのはそのルナと一緒に乗り合わせてしまったジャックであろう。

(ちつくしよ……スバルの奴！いずれペインヘルフレームをお見舞いしてやる……ッ！)

だがミソラは知ってか知らずかスバルにベツタリだ。

それによりルナの嫉妬の炎は大炎上、ジャックの恨みの視線も大きくなった。

反対に平和的なのはキザマロとゴン太だ。

「おおーっ！あれはウカルムマンドゴラにペペロンコリス……凄いですよゴン太くん！」

「……zzz……。」

予想はしてはいたが勉強熱心なキザマロはすっかり釘付けで、植物に興味のないゴン太はスリープモードに突入している。

「つたくよー、何でルナはこんな事を提案してきたんだ？」

「分からないのロツク？ルナちゃんはね、スバルくんと一緒にいたかったのよ。」

「地球人ってそーゆーもんなのかオツクス？」

「さあな。俺が知るわけねーだろコーヴァス。」

電波体4人組みもそれぞれ談笑していたと言う……。

「さあて、どいつと電波変換すつかねエ？」

このヤシブタウン上空のウェーブロードにスクトウムが現れた。彼は電波変換できそうな人間を探す。が、中々見つからない。すると……。

「ん？ありやここのガードウィザードのリーダーか？」

真下に数体のガードウィザードを従えた体格の大きいウィザードがいた。

ガードウィザードとはその名の通り、いわゆるガードマン。それを纏めるウィザードともなればそれなりに戦力は期待できる。

「しーめた！さっそくファントム・ブラックからもらったこいつをつかうとするかねェ！」

スクトウムはバッジを装備し、真下に突っ込んだ。

「　　！おい、スバル！何か来るぞ！」

「え、何ウオーロック？」

ミソラのはしやぎっぷりに困惑していたスバルがようやくこっちの世界に戻られた。

だが、そんな事を言っているうちにとんでもない事が起こった。

「うわあああ　　ッ！？」

「え、ちょ、何が・・・ってキャ　　ッ！！？」

突如、キザマロの悲鳴が響き渡った。

振り返ると何とキザマロが植物のつるに巻きつかれ、宙吊りにされている。

更にはルナも雁字搦めにされてしまう。

この悲鳴でルナも、ゴン太も正気に戻った。

「き、キザマロ、委員長！今助けに……ってわあああ！！？」

「おい、ゴン……って俺もかあ！！！！」

助けようとしたゴン太、そしてジャックもつるに巻きつかれてしまった。

だが、冷静にワイザードオンする。

「くそ！オックス、電波変換だ！」

「俺達もだコーヴァス！」

「「分かった！」」

電波体二人はそれぞれの相棒の身体に突っ込んでいく。だが、次の瞬間には二人とも弾かれてしまった。

「ダメだ！この植物、強力な妨害電波がこめられていやがる！」

「これじゃ俺達の炎でも焼ききれねえぞ！」

このやり取りをみてウォーロックとハーブは確信した。

「おい、ハーブ！この騒ぎは……！！」

「間違いないわね！スクトゥムの仕業よ！」

と、話し込んでいるうちにつるがまた延びてきた。しかし、そう簡単には捕まらない二人だった。

「電波変換！！！！！」

激しい光が、つるを弾く。

スバルとミソラは一旦展示会場を出て、ウェーブロードに上った。展示会の植物の根やつるはデパート全体に伸び、次々と人々を襲った。

「まずいよ！このままじゃ・・・！！」

「どこかにいるスクトゥムを探そう！」

とFM星人の気配を感じ取られるウォーロックとハーブに任せることにした。

ウェーブロードを走る事、すぐにスクトゥムの気配が感じ取れた。いや、向こうから近づいてきたのだ。

「よお、ロックマン、ハーブ・ノート！あんぐれエじゃなあ、くたばんねエか！！」

そこにいた電波変換体は簡単にいうなれば顔の書かれた盾に手足が生え出した感じだった。

それを見てロックマンとハーブ・ノートは吹き出してしまった。ウォーロックにいたっては大笑いだ。

「アツヒヤツヒヤツヒヤ！おまつ・・・ブフ　　ッ！！！！」

「あははは！そのバランスの悪さは反則だって・・・あははは！！」

ハープまでもがバランスの悪さで高笑いしている。
そして何かがぷちんと切れた音がした。

「・・・キサマらああああ！！黙って聞いてりゃ好き勝手言いやがってエ！！！！」

すると、スクトゥムは両手に剣を出現させた。
今まで大笑いしていたロックマンとハープ・ノートも戦闘体制に入る。

「ここまでだ！スクトゥム！」

「これ以上人々を傷つけさせないんだから！」

「スクトゥムじゃねエ！！俺は・・・『スクトゥム・ジャングル』だ！！！！」

スクトゥムとの戦いが今始まる！！！！！！

第七話 展覧会での激闘（後書き）

さて、とうとうスクトゥムと対戦。

果たして勝てるのか！？

では応援よろしくお願いします！：！：！

第八話 鉄壁の盾

「さあ、来な！この『スクトゥム・ジャングル』が相手してやんよお！！」

スクトゥム・ジャングルの一声でロックマンとハーブ・ノートが左右に飛ぶ。

しっかりとスクトゥムを見逃さない位置に降り立った。

そしてしっかりと確認し、攻撃に移った。

「いくぞ！ロックバスター！」

「シヨックノート！！」

ロックマンは左手からバスターを、ハーブ・ノートはギターをかき鳴らし音波を繰り出した。

だが、スクトゥムは一步も動こうとしない。

あの、盾から手足が伸びたようなスタイルでは動きづらいのだろうか。

「オイオイ！俺の硬さを忘れてんじゃねエだろおなあ！！？」

なんと二人の攻撃はスクトゥムに当たった瞬間、弾かれた。

しかも弾かれた攻撃は二人に返ってくる。

ロックマンとハーブ・ノートはウェーブロードを蹴り、やり過ぎた。

「チッ、相変わらずの硬さだな！」

「電波変換した事でリフレクトの効果までついてしまったのね。」

ウォーロックとハーブも睨みつけた。

スクトゥム・ジャングルは両手に握ってある剣を持ちながらロックマンに向かって跳んできた。

「食らいやがれ！ウツディブレード！」

「バトルカード、ソードファイター！」

次々と繰り出される木の剣を、ロックマンは華麗な剣技で跳ね返し、斬りつける。

だが、彼の硬さはソードを簡単にへし折ってしまった。

一気に剣を振り上げるスクトゥムだったがその手が急遽止まった。

「スバルくんから・・・離れなさいっ！！」

ハーブ・ノートのマシンガンストリングがスクトゥムの手を止めていたのだった。

そして一気に振り上げ、上空へと投げ出す。

しかし、スクトゥムはもう片方の剣で糸を切り裂き、体制を整えた。

「へっへっへエー！やってくれんじゃねエか！・・・シールドチエイサー！！」

スクトゥムは手足を引っ込めるとその場でチェインソーみたいに回転させた。

そしてブーメランのように曲がりながら飛んでくる。

スピードも凄まじいためロックマンとハーブ・ノートは弾かれてしまっ

「うわあぁっ！！」

「きゃああああー！！」

「チャンス到来！バックレーザー！！」

空中で回転をやめ、手足を迫り出すスクトゥム。

ロックマンとハーブ・ノートが転がったその隙に背を向けた。緑色のレーザーが二人に向かって伸びてくる。

しかしいち早く立ち上がったハーブ・ノートが手を差し出す。

「バトルカード、バリアー！！」

繰り出された障壁が、レーザーを阻む。

これでしのげると思ったがスクトゥムは更なる一撃を繰り出してきた。

「ハッハッハ！防御範囲が地上のみと言うのが仇となったな！ジャングルカーニバル！！！」

スクトゥムが両手の剣を一気に逆手に持ち替え、地面に突き刺した。するとロックマンとハーブ・ノートの足元が膨れ上がる。

「ぐ、うわああああー！！」

「きゃあああああー！！？」

地面から鋭い木の杭が次々と出てくる。

ロックマンとハーブ・ノートは張ったバリアが仇となり杭の餌食と

なっていました。

しかもそれだけでなく空中へと打ち上げられた二人を植物のつるが縛り上げた。

「し、しまっ……。」「

「うう……。っ!」「

「でっひゃっひゃっひゃ!こんな程度だったとは、今までやられた奴のシヨボさが目に見える!」「

両手剣を悠々と構えながら徐々に近づいてくるスクトウム。

両手を縛られているためソードも使えない。

しかし、そんな時ウォーロックが小声で言った。

(スバル!シドウからメールだ!)

(何でこんなときに!?)

(それがな……。)

その後、ウォーロックとスバルは相談し続けた。

スバルもすぐにコクリと首を縦に振る。

しかし、スクトウムは目の前にまで迫っていた。

「さて、まずはアンタからだ……。アバヨ!!!」

「ス、スバルくん!!!!!」

ハーブ・ノートが、ミソラが叫んだ。

しかし、その時ロックマンの周りに何かが集まりだした。

「な、何なのこれ……?」

「ノイズ……ノイズか!？」

スクトウムの予想したとおり、ノイズだった。

大量のノイズがロックマンに集まってきているのだった。そして数値が読み上げられていく。

『ノイズ率……50%……75%……100%!!!』

100%に達したその時、ロックマンから光が放たれた。

その輝きにハープ・ノートとスクトウム・ジャングルまでもが目を瞑る。

次の瞬間にはロックマンは上空に上がっていた。

降り立ったその時には全く姿が変わっていた。

「ロックマン……コーヴァスノイズ!」

この現象こそそう、『ノイズチェンジ』である。

全身がカラスのような黒色に覆われた姿、正しくコーヴァスだ。

そしてこの事態にハープ・ノートは愚か、スクトウムも狼狽していた。

「な、何故だ!?何故、メテオGがなくなった今でもノイズチェンジができるんだあああああああ!!!?」

ロックマンはスクトウムに目を向けるまでも無くハープ・ノートを縛っているつるに狙いを定める。その銃口から火が吹き上げた。

「シヨツキングフレア！」

激しき炎がつるを焼ききつた。

ハープ・ノートは縛り上げから開放され、落ちていくハープ・ノートをロックマンが抱える。

そしてウェーブロードにおろすと改めてスクトゥムと向き合った。

スクトゥムは冷や汗を少し流していたが押されまいと強がって見せる。

「へ、へッ！いくらノイズチェンジできても俺のこの硬さの前じゃ無意味なんだよッ！！」

「じゃあ試してみようか？・・・ぶっ放すぜ、スバル！！」

「うん！」

ロックマンは腰を落とし、バスターを構える。

その口から火の塊が大きくなり始めた。

その威力に次第に辺りが揺れ始める。

「アトミックブレイザー！！！！」

「ぐ・・・オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！！？」

スクトゥムはその身だけでなく、両手剣を前に突き出し盾にした。

だが放たれた閃光は余りに大きく易々とスクトゥムを飲み込んでいった。

しかし閃光が晴れるとそこにはまだしっかりと両手で立っているスクトゥムがいた。両手の剣はどうやら燃え尽きたようで身体も熱を

帯びている。

「へ・・・へへへっ！俺は耐え切ったぜエー！！ノイズチェンジとやらも、使い手が悪けりゃシヨボいっモンよ！！ハーツハツハツハ
！」

「だと良いけどね。バトルカード、ワイドウェーブ！」

ハープ・ノートは横一直線に広がる水の刃を飛ばした。

己のみの硬さからかそこを動かこうともしないスクトウム。

しかし、今度は彼が仇となる番だった。

ビキビキッ！！！！

「な、何だとおおお！？何故、体が一気に・・・うう、うおお
ああああ・・・！！！」

体が一気にひび割れていく。

徐々に朽ち始める身体にスクトウムは苦しんでいく。

ロックマンは言った。

「当たり前だよ。冷たい食器に熱を注げば割れやすくなる。それは
勿論、君の身体も一緒だ！！！」

「今度はテメエのその硬さに対する自信が仇となったな！トドメだ、
スバル！！！」

ウォーロックの声に合わせ、スバルは更にノイズを取り入れる。

彼のノイズ率は更に上がっていく。

ノイズ率が上がるにつれ、スクトウムの体の震えは大きくなる。

「110%・・・153%・・・187%・・・ノイズ率、
200%!!!」

「ひ、ひいッ!!ここは逃げ・・・」

「させない!マシンガンストリング!!」

逃げようとするスクトウムをハープ・ノートが押さえた。
そして、

「ファイナライズ!!ブラックエース!!!」

ノイズがロックマンを包んでいく。

そしてノイズの球体が離れたその時、ロックマンはコーヴァスノイズ以上の黒さをその身に宿していた。

遥かに大きいその翼、無駄の無いボディ、漆黒を掛ける閃光、ブラックエースである。

ロックマンは掌から巨大なブラックホールを生み出し、スクトウムを飲み込んだ。

「う、うわあああああああ・・・!!」

「ブラックエンド・・・ギヤラクシー!!!!!!」

ロックマンはまさに目にも留まらぬ速さで黒球をソードで真っ二つに切り裂いた。

そして凄まじい衝撃と爆発がスクトウムを襲う。

「ぎゃあああああああああッ！！！！・・・クソがッ！！！」
もはやこれまでと悟ったスクトウムは取り付いていたガードウィザードと分離した。

そして捨てゼリフを残すことなく上空へと飛び立った。
地上に降り立つとスバルとミソラは電波変換を解除する。

「あ、植物も元に戻っていくみたいよ！」

ミソラが指差すとおり植物のつるも引っ込んでいった。
縛り上げられていく人々もすっかり解放されている。

『スクトウムが去ったんですもの。これで元通りよ。』

『ああ。あんにやる空気読めねー奴とはいえしばらくは襲ってこねーだろうよ。』

『あなたもね。』

『んだとツ！！？』

電波体二人のやり取りにミソラはクスクスと笑った。
しかし、先ほどからスバルが会話に参加していない。
ミソラが振り向くとスバルがふらついている様だった。

「スバルくん！？大丈夫・・・。」

ミソラがスバルの肩を掴んだとき、スバルはまるで糸が切れた人形のようにその場に崩れ落ちていった。ミソラは驚き、口元を抑える。

そしてスバルの身体を抱きかかえた。

「スバルくん！しっかりしてスバルくん！！！！」

スバルの顔色はかなり悪くしかも腕に赤いものが広がっていく。

スバルの腕からは傷がむざむざと付けられており、そこから血が溢れ出しているのだった。

ミソラは二人に相談して開放されたであろうルナ達に応援を求めに行った。

「ロックマンガノイズチェンジ・・・ネエ・・・」

「ああ、間違いねエ！ありや完璧にファイナライズまで使ってきたがった！」

「それは真か。なら、強敵だな。」

「ええ。我々にとって邪魔以外の何者でもありません。」

UFOとスクトゥム、そして鳥のような電波体と水がめのような電波体が話し合っている。

するとファントム・ブラックも姿を現した。

「んфффф。どうやら、ロックマンがアドリブを起こしたようだな。」

「ええ。彼のあの力、まさに脅威といっても差し支えないでしょう。」

「しかし！それでこそ脚本はよりよく面白くなる。そして最後は脚本どおり、主人公とその一行である我々が勝つ！！・・・何も焦る事は無い。」

ファントム・ブラックは怪しく微笑んでいた。

第九話 スバルの新たな力

「・・・う、うゝ・・・ん・・・。」

スバルは呻きながら目を開けた。

見上げるとそこは空ではなく、真っ白な天井。

スバルはどうやら今はベッドに寝転がっているらしい。

つい先ほどまで自分はデパートの屋上にいたはずなのに。

(あれ？僕、どうしちゃったんだろ・・・?)

とりあえず状況を確認しようと体を起こす。

すると物凄い勢いで目覚めるのを待っていたらしいミソラが胸に飛びついてきた。

「スバルくんっ!!！」

「だああああっ!!!？」

予想以上の衝撃に意識が再びブラックアウトしてしまうところだったが何とか堪え、ミソラを抱きとめた。

そしてウォーロックとハープもウィザードオンにして出てきた。

「ったく、ここまで寝ぼすけだったとはな。」

「3時間以上も目覚めないから心配したのよ。特にミソラがね。」

「オイオイ！俺だってその・・・心配したんだぜ!!！」

相変わらず言い合うウォーロックとハープ。
ミソラも安心したのか一旦離れてくれたので改めて周りを見る。
どうやら周りにおいてある医療器具や数々のベッド、周りをさえぎるための白いカーテンなどからどこかの病院の病室だ。

「でもスバルくんが無事でよかった!」

ミソラは両目の端に少し涙を浮かべて言う。

しかし腕を見てみるとまざまざしい傷が数多く、くつきりと残っていた。

そうやってしていると病室と廊下をさえぎるドアからノックが聞こえてきた。

「よ、起きたかスバル?」

「ご気分の方は如何ですか?」

「あ、暁さん!アシッド!」

そこへ現れたのはサテラポリスのエース、ディーラー事件でも心強い味方となった男、『暁シドウ』である。後ろには彼の相棒である『アシッド』もいた。

その手には大量のお見舞いらしき彼の好物『うまい棒』が抱えられている。

シドウは空いているベッドにそのうまい棒をおくと容態を窺い始めた。

「さて、容態の方はどうだ?」

「傷は少し痛むけど、気分自体は良いです。」

スバルは笑顔で答えた。
彼の気分が良かった事を確認するとシドウは頭を抑えてハア〜とため息ついた。

「さてスバル。お前メールを最後まで読まなかったな？」

「え、あ、はい。一応ピンチだったから……。」

スバルは後ろ頭をかきながらそう応えた。
すると話が飲み込めないミソラは訊ねてきた。

「あの……。どうしてスバルくんはノイズチェンジャやファイナライズを使えるようになったの？」

「それは俺が『ジョーカーPGM』と『エースPGM』をメールで添付したからさ。」

その問いに答えたのはシドウだった。
さかのぼる事、数刻前。

スバルたちがスクトゥムに締め上げられていたあのときだった。

『スバル！シドウからメールだ！』

『こんな時に何！？』

そこにはこう書かれていた。

『スバルへ。今はどうやらピンチみたいだな。今、ヨイリー博士が『ジヨーカーPGM』と『エースPGM』の調整を終えたからお前らに渡しておく。』

ヨイリー博士のおかげでWAXA本部に新たに開発されたサーバーにアクセスすれば再びのノイズチェンジやファイナライズも使えるようになる。』

スバルとウォーロックはこの先を読んでいなかったため鵜呑みにし、思うが俣ノイズチェンジを、ファイナライズを使っていったというわけである。

「・・・で、そのメールの続きを読んでみる。」

スバルとウォーロック、そしてミソラとハープはそのメールの続きを読んでみる事にした。

そこにはこう書かれている。

『ただし、まだメテオGのように完全にノイズを制御しきれるほどのサーバーを作り上げたわけじゃないから無闇にNFBノイズフォースビッグバン、あまつさえファイナライズをすれば身体にダメージを与える事になるから多様は禁物だぞ。』

「……………」

四人は当然のように言葉を失っていた。

即ち、スバルの身体へのダメージもNFBの多様やファイナライズが原因と言う事になる。

まさに『諸刃の剣』と言うものである。

「もし、体中にダメージを追った状態でファイナライズしてまでのNFBをすれば体全体が崩壊するかもしれません。使用する際には十分な注意を払ってください。」

アシッドが付け加える。

確かにファイナライズをしてのNFBであのザマだ。

体中ポロポロで使用すれば吹き飛んでしまうかもしれない。

「とはいえノイズチェンジくらいだったらお前達なら大丈夫だ。ファイナライズだって訓練していけばだんだん馴染んでくるはずさ。」

「それにヨイリー博士も今回の知らせを受けてサーバーの調整を行ってくれています。近いうちにファイナライズも使いこなせるようになるでしょう。」

シドウとアシッドがそれぞれ言ってくれた。

まだ希望は捨てていいわけじゃないと四人は歓喜した。

と、ここでシドウとアシッドは立ち上がった。

「さてと、後はジャック達との時間だ。」

「しつこいようですが、今後も注意を払ってください。」

それだけを言い残し、二人はドアから去っていった。代わりに入れ替わるようにしてルナ達が雪崩れ込んできた。

「スバルくん！もう大丈夫なの！？」

「本当に大丈夫ですか！？」

「もし気分が悪かったら俺に言えよ！牛丼奢ってやるからよ！」

「・・・お前、ただ食いたいただけだろ。」

四人がそれぞれ口々に言ってくる。

それにたじろぐスバルだったがとりあえず無事を伝えると四人ともホッとした表情で胸をなでおろした。

どうやら明日にも退院できるようなのでとりあえず落ち着くことにした。

「そうだ！スバルくんの気分転換に私、今度船で撮影を行うんだ。」

「あ、僕それ知ってます！『デイタニック』ですね！？」

デイタニックとは今度の夏、ミソラが主演で撮影される映画で船でのラブストーリーというもの。

相手役も今大人気の少年俳優だとかで今、世間の注目を浴びている。そのチケットを人数分、ミソラは差し出して見せた。

「と言うわけで人数分あるから今度の連休に行こう！そこで船上パーティーもあるし。」

「そうね。この連休を無駄に過ごす手はないわ。」

ミソラの意見をルナが押す。

勿論、反対意見は誰も上がらずむしろすでに船の上でのパーティーを誰も空想を浮かべている。

「船上パーティーか……。牛井でるかなあ……。？」

『ゴン太、それは無い。』

オックスがハンターの中からこっそり突っ込んだ。

キザマロも、ジャックもすでにスケジュールの確認に移っている。一方のスバルも連休は常にオフだ。

（船上パーティーか……。楽しみだな。）

結果、今度の連休にミソラの映画撮影に付き合うことになった。

「ケツ、何で俺がウォーロック如きに負けなければならねえんだよ！」

その頃、スクトゥムは荒れていた。

UFOから実質的なお仕置きは無かったものの、自身のプライドが許せなかった。

と、そこへ燃える鳥のような電波体が近づいてきた。

「荒れているようだね、スクトゥム。」

「……なんだ、フェニックスか。」

そこへ現れた電波体を『フェニックス』と呼ぶスクトゥム。フェニックスはその場に腰を掛けながら話し始める。

「君が負けた唯一つの理由、それはパートナーだ。」

「パートナーあー？」

スクトゥムは耳をほじくりながらフェニックスの話を書く。気高そうだが彼の實力は本物。

アドバイスは素直に聞いておくことにした。

「そうだ。いくら強力なウィザードに取り付いていてもそのスペック自体低ければ、何の意味も成さない。」

「んじゃあ、お前さんは見つけたのかい？そのパートナーとやらを
」？」

「ああ、勿論さ。さて、これからそのパートナーの所に行って来る。
」

「で、今度お前が出るそうだな？何時、どこに出るんだ？」

振り返り際にスクトゥムは質問を投げかけた。
するとフェニックスはフツと笑いながら答えた。

「今度の連休で行われる、映画の船上パーティーさ。」

第九話 スバルの新たな力（後書き）

今回は短くてすみません（汗）。

これから頑張っていきますので感想をお願いします！

読んでくださり、ありがとうございます！

第十話 スバルの激昂と確かな想い

スバルが病院から戻って帰宅した。

家には帰りを待ちわびていたあかねと大吾が心配そうにソファに座っていたが元気そうなスバルとミソラを見てとりあえずホッと一息をついた。

「スバル！もう身体は大丈夫みたいだな。ミソラも無事で何よりだ。」

「父さん、母さん、心配掛けてごめん。」

「けれどこの通りピンピンしてます！」

大吾のおおらかな問いに二人は笑顔で答えた。だがその隣のあかねはそうもいかなかった。

「全く、ミソラから電話があったときは焦ったけれども、無茶はしないで頂戴。」

あかねは大吾に比べて少しきつめの目で二人を見た。

ロックマンとハープ・ノートの正体がこの二人である事をすでにあかねと大吾は知っている。

二人は戦わなければいけないとは言え傷ついて欲しくないと言う、あかねの愛情でもある。

しかし、そんなきつい顔もすぐに緩めると食卓へと案内する。

「さあ！今日もご馳走よ！」

「俺も手伝ったからな。これを食べて更に元気を付けるよ！」

「はあ〜い！」

二人は相当疲れていたのか、物凄い勢いで食事にかぶりついた。そしてミソラはあのお話を切り出すことにする。

「あ、そういえばお父さん、お母さん！今度の連休空いてる？」

「?どうしたんだ急に。」

大吾がおつまみを口の中に放り込みながら問う。

ミソラはスバルと笑顔で顔を合わせた後、ポケットからチケットを取り出した。

「今度船で映画の撮影をすることになったんで特別の招待券をもらってきたの！」

「お、本当か!・・・長官休みくれるかな・・・。」

「私はOKよ。」

スケジュールを確認する大吾とは対して、あかねはOKのサインを出す。

大吾が戻ってきてパートも大分減ったからである。

あかねは確定したところであかねが尋ねてきた。

「その映画ってラブストーリーなんでしょ?その相手の子って誰？」

そういえばその話は聞いていない。

聞いているとすれば今大人気のミソラと引けをとらない天才少年俳優だとか。

少し顔をゆがめたミソラが言おうとするとテレビからCMが流れてくる。

「あ！今CMに映っている人だよ！」

それはハンターV Gの宣伝だった。

そのハンターV Gを華麗に使いこなす、赤いジャケットに逆巻く金髪、なんとも癖の強そうな少年だった。

『この現代、無くてはならないハンターV G！君だけの『ヴェリー！クウル！！エキサイティングウ！！』なハンターV Gに仕立て上げよう！』

これはハンターV GのCMだがやたらと少年が重視されているようにも見える。

おまけにその少年は、『ヴェリー！クウル！エキサイティングウ！！』をやたらと強調している。

すると昼ドラ大好きなあかねとウォーロックがすぐさま反応した。

「あら、この子『かみはひとり神刃緋鳥』君でしょ！？」

「おお、間違いねえ！こないだのサスペンスドラマでも主演をやったよなあ！」

結構な有名人物らしい。それでも芸能界に余り（ミソラ関連以外）興味の無いスバルは混乱している。するとハープが説明してきた。

「ここ最近、売れっ子になっている天才少年よ。あの通り自尊心が

強くて『ヴェリー！クウール！！エキサイティングウ！！！！』
が口癖。」

「実は私、プロポーズを何回も迫られた事があるんだ。」

「え、ッッ！！？そ、そうなの！！？」

ミソラの言葉にスバルが立ち上がりそうな勢いで驚いた。
が、家族全員にニヤニヤされながら見詰められている。
ミソラはにっこりしながら付け加えた。

「もちろん断ったよ。『私には好きな人がいます。』ってね。」

そう言いながらミソラはスバルの腕を取る。

家族の前でそんなカップルみたいな、いや実際にカップルだがそんなことしていいものなのか。

すでにあかねと大吾に先ほどの数十倍ぐらい、ニヤニヤされている。

「そうか。本当にカップルだったんだな。」

「ええ。ミソラちゃんみたいなお嫁さんだったら、スバルも嬉しい
でしょう？」

言い寄られるスバルは観念してコクリと、赤面しながら頷いた。

ミソラはもう、所かまわずスバルに抱きついていた。

「……なあ……俺ら、忘れられてねえか？」

「ハア……昔からあなたはスクトゥム並に空気が読めないのね……」

ハープは呆れ返っていた。
だが、ウォーロックも赤面してはいるものの幸せそのものを表情を
しているスバルを見るとどうでも良くなってきたのだった。

「はぁー！星が今日も綺麗！」

「でしょ！僕ここに何度来ても飽きないんだ。」

スバルとミソラは恒例の如く展望台に来ていた。空気が澄んでいて、星達は相変わらず、しかし毎度違った星空を見せる。

二人は寝転がって夜空を見上げた。

「寒くない？」

「ううん、スバルくんがいるから全然平気！」

エヘへ、と可愛らしく笑いながらミソラは微笑んだ。

スバルも、いつもドギマギしてしまうものの、この笑顔が何より愛しい。

こんな笑顔を独り占めできるとは、自分は本当に幸せ者だとも思う。そんな楽しい時間はあっという間に過ぎていった。

「……そろそろ戻ろうか。」

「うん。さあて、帰ったら風呂は入ろうと。」

スバルが立ち上がり、ミソラも背伸びしながら立ち上がる。すると後ろの方から草を踏むが聞こえた。

「やあ、ミソラ。こんな田舎町にいたとは思わなかったから探すのに苦労したよ。」

その声はつい最近聞いたような声だった。まるで自尊心を高くするような物言い。

ミソラはその人物の顔を見るなり一瞬だけ顔をゆがめた。

「……緋鳥くん……。」

スバルはその顔を見てやつと気づいた。
先ほどのCMに出ていた少年、『神刃緋鳥』だ。
随分とキラキラしている。

「ミソラ！俺の気持ち、受け取ってくれないのかい!？」

「だーかーらー！私には好きな人がいるって言うてるでしょ!！」

どこからか手品のようにバラの花束を差し出す緋鳥。

それに対してミソラは一瞬身体をかがめるとそっぽを向いた。
緋鳥の持っていたバラの花束は、彼の心情を表すかのように一瞬で
腐り落ちていった。

「相変わらず何を言ってるんだ!？完璧な歌唱、完璧な演技、完璧
なスタイル！そんなパーフェクトオな君にはこの『ヴェリー！ク
ール!！エキサイティイニングウ!！』な僕が最も相応しいは
ずだ!！!！」

自己顕示するかのよう熱弁する緋鳥。
だがミソラは鬱陶しく感じているらしく全く見向きもしない。
すると緋鳥は視線をようやくスバルに変えた。

「そっいえば君、何故ミソラの隣にいるんだい！それもこんな真夜
中で!！」

(君こそ、こんな真夜中に何しに来てるの・・・?)

スバルは心の中で呟いている。

とはいえ初対面の相手に対して失礼だろうから顔にも口にも出さな

い。

だが、一方の緋鳥はそんな事お構いなく喋り続ける。

「もしや！ミソラが言っていた『好きな人』ってこんなチンケな男なのか！！？」

その言葉にさすがに顔をゆがめたスバルだが、ミソラの顔はそれ以上だった。

ミソラはスバルに抱きつきながら、緋鳥にはつきりと言った。

「そうよ！私はスバルくんのが大好きなの！すでに両親にも認めて貰ってるんだからね！」

その言葉に緋鳥は完全に切れた。

だが、その怒りの矛先はスバルに向けられた。

「何故だ！何故、何をやっても完璧なミソラを君に取られなくてはいけない！！？」

「……………」

スバルはなるべく聞き流そうと必死だ。

ミソラも食って掛かりそうになるがスバルが手で制する。

しかし、緋鳥の口は休まず、エスカレートしていく一方だ。

「幼い頃から天性の素質でアイドルとしてデビュー！それ以来、世代の人気を博している彼女はまさに天才だ！一人で何をやらしても、完璧なんだ！！」

その言葉にピクツと、スバルが反応した。

拳をみぎり、しかしじつと耐えている。
そんな事を知らない緋鳥はどんどん話し続ける。

「いいか！彼女を最大限に理解できるのは僕だけなんだ！彼女一人で、何でもこなしてしまうその凄さはまさに僕と共に・・・」

「うるさいっ！！！」

突然叫んだスバルの一声に近くにいたミソラは勿論だが、緋鳥も大きく一歩退いた。

抑えきっていた怒りを、スバルはしっかりと睨みつけながらぶちまけていく。

「『一人で』、『何をやらしても』、『完璧にこなす』？・・・ミソラちゃんは、そんなことなんで望んじやいなかった！！！」

緋鳥の顔は更にゆがんでいく。

今度はスバルが徹底的に追い詰めていった。

「ミソラちゃんのことを、彼女の孤独を理解しようともしないで何が『天才』だ！何が『完璧』だ！！君は、ミソラちゃんの悲しみを何も知らないだけだ！」

ミソラでさえ見たことない、スバルの激昂。
何とか持ち直した緋鳥は反発する。

「何だと！？君、誰に物言っているのが」

「確かに僕は君がどんな人生を歩んできたのか知らないし、僕もミソラちゃんに相応しくないのかもしれないけどこれだけは言え

る！

僕だってミソラちゃんが大好きだ！君なんかミソラちゃんを渡すつもりは無いッ！！！！！！」

すっかり畏怖しきつた緋鳥を放つておいてスバルはミソラの手を取り、いつもの彼らしくない大股で家に帰っていった。
一人残された緋鳥はハンターV.Gを見ながら呟いた。

「……僕は、どうすればいい？『相棒』？」

「簡単なこと。それは自分がミソラに相応しき人物だと知らしめればよい。」

「僕に……できるのか……？」

「何、この私がついているのだ。彼をこの力で倒し、無様な姿を見せ付ければミソラも君に乗り換えるはずさ。」

緋鳥のハンターV.Gの中にいる彼の『相棒』は怪しげな声色をしながら助言する。

しかし、今の緋鳥にはそれすら救いの言葉となつていった。

緋鳥は怪しく微笑むとハンターを閉じ、空を見上げる。

「……今度の船上パーティーが、君の命日だよ。星河スバル……！」

スバル邸

。

「スバルくん~~~~」

「ミ、ミノンちゃん……// // //」

先ほど帰ってきて、スバルとミソラはすぐに部屋に入った。
当然、スバルは少し不機嫌だったがミソラはかなり嬉しそうだ。
まあ、大好きな人からあんな言葉を言ってもらえれば嬉しくならな
い方がおかしいが。

「おやおや、スバルも言うようになったのか。カアツ惜しいシ
ーンを見逃したぜ！」

「そりゃアナタのせいでしょ。」

ウォーロックがからかう中、ハーブが咎める。

スバルも今やいらつきではなく、ストレートな告白をしたことに赤
面している。

とりあえず抱きついてきたミソラが少ししんみりとした顔をして言
って来た。

「でね、スバルくん。」

「何？」

「さっき、私のせいで怒らせちゃって・・・ゴメンね・・・。」

俯きならミソラは謝った。

確かにあれほど怒ったスバルは早々無い。

ミソラもわびたくなるというのも、痛いほど分かる。
しかしスバルは首を振りながらミソラの頭を撫でた。

「ううん。あれは僕がついカツとなっちゃっただけだよ。ただ・・・」

「ただ？」

スバルは先ほど以上に赤面しながらポツリと呟いた。

ミソラはスバルの顔を覗き込んだ。

そして、スバルは細く、だがはつきりと言葉を紡いだ。

「さっき言った事に……嘘なんてないから……。」

「スバルくん……！」

ミソラは嬉しさの余り泣き出そうとしていた。

スバルはミソラを軽く抱きしめる。

因みにウォーロックはハーブによっていつの間にか連行されていた。

「オイ！ハーブ、放しやがれ！」

「ガッツなアナタが行くなど、獣道も同然よ！それに……。」

「ああ。この町に来ていた『もう一体の電波体』だな……。」

ウォーロックとハーブはウェーブロード上から、虚空を見上げた。

第十話 スバルの激昂と確かな想い（後書き）

スバルくん!!?もはや別人じゃないですか!!

もうこうなりやスバミソ路線急特攻!!!

・・・暴走していたらすみません・・・。

感想お待ちしております!!!

第十一話 快晴の船出

さて、時はすつ飛んで連休となった。

夕日が水平線へと沈んでいく夕刻、スバル達は港へ直接集合となっている。

あかねは来てはいるものの、大吾はやはり仕事で泣く泣く来れなかった。

「あら、残念ね。大吾さん楽しみにしてたのに。」

「仕方ないよね。仕事なんだから……。」

スバルとあかねの小さな会話はすぐに回りに聞こえてしまうほど、今は人がそんなにいない。

本来ならたくさんさんのギャラリーが集まるはずなのだが、ミソラが仕入れたチケットは関係者用の特別券なので比較的楽に乗る事が出来る。

船上パーティーもあるという事なのでスバル達もおしゃれしてきている。

ルナにいたってはドレスである。

(い、委員長のドレス姿……。)

(似合ってるような……似合っていないような……。)

スバルとジャックはコソコソと、聞かれれば高速の拳が飛んできそうな会話を交わす。

しかし、聞かれていないのかルナは機嫌は良いほうだ。

ゴン太とキザマロ、そしてあかねもそれなりのお洒落はしてきてい

る。

そんなこんなをやっているとチケット拝見係がやってきた。

「はい！チケット確認するブク。」

「この声・・・キャンサーか。」

ウォーロックが勝手にウィザードオンして出てきた。

そこにいたのはコートに身を包んだ嘗てのFM星人、『キャンサー・バブル』である。

現在はミソラの付き人となっている。

「ミソラっちから丁重にもてなすよう言付かってるブク！」

「じゃあ、お願いねキャンバブちゃん」

以前、あかねの家事を手伝った事もあるためあかねから『キャンバブちゃん』という仇名で呼ばれたキャンサーのご機嫌は良く、いつもの彼とは思えない手際の手際よさでスバル達のチケットを拝見するとすぐに船へと案内してくれた。

キャンサーの案内の元、あたり一面の大海原を一望できる甲板を通り過ぎ、大きな赤いドアを潜り抜けると凄い広さのパーティー会場へとたどり着いた。

「うわぁ・・・！凄い・・・！」

「ホント！母さんの結婚式以来だわ。」

パーティー会場を目の当たりにしたスバルとあかねはかなり驚いている。

それはゴン太やキザマロ、ジャックも例に漏れず、名家出身のルナですら多少たじろいでいる。

下は赤い絨毯で敷き詰められており、その上に並べられたテーブルの更には色取り取りのサラダやローストビーフなどを始めとした人生一度ぐらいいは食べたいであろうメインディッシュの数々、コダマタウンのケーキ屋さんですらお目にかかれない豪華そうなケーキが惜しみなく所狭しと並べられている。

別にいやらしい意味ではないが口から涎が出てしまいそうだ。

その奥にはダンスでも出来るほどのスペースがあり、そして今までの撮影の経緯などをダイジェストで紹介するのであるう、スクリーンすら用意されている。

「・・・これが生きているってことなんだな！」

「ハイ！・・・今回は楽しんでいきますよ！」

「チエツ、これなら姉ちゃんも来ればよかったのにさ・・・。」

ゴン太、キザマロ、ジャックはそれぞれ言った。

すると後ろから今日の撮影で使用するのか、ドレス姿のミソラが出てきた。

「あ！みんなもう来てたんだ！」

「ええ。大吾さんは仕事で来られなかったけれど。」

あかねの一言を聞いて少し肩を落とすミソラだったがすぐに笑顔を取り戻す。

正直、スバル達の視線はパーティー会場からミソラへと変更されている。

さすが女優、とでも言うべきかドレス姿はより一段美しかった。

「え・・・っと、スバルくん、似合うかな？」

「うん！凄く綺麗だよ！！」

ミソラは少しもじもじしながら訊ねたがスバルの返答は数秒もかかっていなかった。

ミソラは大満足の笑顔を向けるが、あかね以外のその他は面白くなさそうな顔をしている。

まあ、スバル個人に尋ねてきた上目の前でノ口けられては当然だろうが。

だがさすがに空気を読み、ルナたちは食事の方にありついていった。

（ったく、出てくるまでにやたらと時間かかったじゃねえか。）

（ミソラはスバルくん喜んでもらうために気合入れてドレスを選んだのよ！時間がかって当然だわ！）

（良く分かんねえな・・・。）

（オックス、やっぱそう思うよなア・・・。）

相変わらず、話し込んでいる電波体約四名だった。

そうやっている、アナウンスが突如流れてきた。

『ご来場の皆様、本日の撮影は7：00に行われますのでそれまで立食パーティーをお楽しみください。』

アナウンスの声につられてもう普通の客やメディア関係の人達、映

画関連の人々などが集まり始めている。
その中で懐かしい顔が見えた。

「お、スバルくん達じゃないか！」

「元気してたかい？」

「あ、浦方さんにオクダマスタジオの監督！」

スバルが見つけたのは過去お世話になったことのある、『浦方マモロウ』、そしてオクダマスタジオの監督ウィザードだ。
どうやら昇進を果たしてここまで上り詰めたらしい。
この二人なら、確かに納得する。

「もしかしてお二人で今回の映画を決めたんですか？」

「そうなんだ。ヒロインの線はミソラで内定はしていたんだが……」

浦方が頭を掻きながら言葉を濁す。
その続きを監督が話してきた。

「相手役が納得いかないんだ。今回は誠実で、心優しい少年が適任なんだが。」

「さすがに、神刃じゃ役に合わないんだ。」

確かに、以前あったことはあるがあの雰囲気からして浦方達の理想には程遠い。

と、ここでスバルは疑問に思った。

「あれ、じゃあ何で神刃くんを選んだんですか？」

「上層部からの圧力がかかったんだよ。今ノリにノッてる神刃ができれば大ヒット間違いなしだとね。」

「けれどもなあ、今話題だとか、そんな事関係なしに私の理想に合う少年がいれば・・・ねえ・・・。」

急に話を止めてきた監督はジロジロとスバルを見る。

すると、それを察したミソラが声を上げてきた。

その一言は、ある意味爆弾発言だった。

「じゃ監督！スバルくんを私の相手役にしてくださいー!!」

・・・時は凍った。

さすがに周りの人には聞こえてなかったがスバルは別だ。しかし浦方は愚か、監督までもが納得している。

「監督！いいんじゃないスカ？スバルくん誠実ですし、心優しいですし。」

「そうだな！ミソラの推薦からしてひょっとしてミソラの彼氏なんだろう？」

どうやらミソラが言いふらしたらしい。

スバルは顔を赤くしながら身体を震わす。

嬉しくない、そんな事は微塵もない。むしろ嬉しい。天国だ、ヘヴンだ、ハッピーエンドだ。

だが、さすがに今になって相手役を変えられるかどうか、しかもスバルは嘗て地球を救ったヒーローとして名が知られている。これはいろんな意味で大スキャンダルになりそうだ。

「あのっ！ちよっ、それは・・・。」

「安心してくれ。もしダメそうだったら神刃にチェンジするし。」

「それに名前も伏せておくから。」

浦方と監督はこれ以上ないくらいに息があっている。

どうしようか迷っていると隣でミソラの握力を感じている。

『目は口ほどのものを言う』、といった時代からそう言われてきてはいるがミソラの視線は見なくても感じられる。

それに……正直演技とは言え、ミソヲを神刃に渡したくなかった。

「……分かりました。やってみます！」

スバルの顔は恐らく見なくても分かるくらい、顔が真っ赤だ。顔全体に熱を帯びているのが、完全に分かる。

監督と浦方も『そうかそうか』とでも言うように満足した顔で頷いた。

「じゃあ浦方！早速だが神刃にも伝えておいてくれ！」

「分かりました、とりあえず台本を……。」

浦方がスバルの台本を取りに行こうとする。

が、その前にとある人物が立ちはだかった。

今、この局面で最も会いたくない人物、神刃緋鳥その人だ。

「監督！納得がいきません！！！」

「お、神刃！丁度いいところに！」

「ええ、ええ！話は一部始終聞かせていただきましたよ！でも勿論納得がいかない！」

緋鳥から次々と抗議の声飛び交う。

今にも殴りかかりそうな勢いだから、心配と言えば心配だ。

怒りの化身そのものの緋鳥に監督は淡々と話していく。

「前にも話しただろう？もし、今回君以外に相応しそうな人物がいれば変わってもらう可能性がある」と、

「確かに言いましたけれども、相手役が今更、しかもコイツとは納得がいかないのにも程がある！！」

スバルは相も変わらない緋鳥の横暴さに顔を歪めるが浦方から台本を受け取るとミソラがスバルの手を引いて立食に行ってしまった。寂しそうにそれを見詰める緋鳥だったが監督がコホンと咳払い一つをして続けていった。

「確かにお前は演技も上手いし、それなりのアドリブもできる。」

「じゃなんで！！！」

「だがな、その才能に相応しい役どころには入れるかはどうかはまた別問題だ。」

「・・・・・・・・！！」

「お前は役を演じたいのでなくて『ミソラの側にいたいだけ』だろう？演技を見てりやよくわかる！本来なら実際の演技を見て比べるつもりだったが、既に結論が出たようだな。」

そう監督らしい厳しい一言をいい残すと浦方を連れて奥に言ってしまった。

緋鳥は楽しそうにスバルと食事しているミソラを見るとふらりふらりとパーティー会場を出て行ってしまった。緋鳥はもう、夕日が沈みかかっている水平線の先を眺めながら、船の先端に立つ。

予定では撮影で、この場所で永遠の愛を誓っている。
だが、今その現実が砕かれてしまった。

夕日は沈もうとしている。

だが、空はまだ夜になる気配を見せていない。

そんな中、緋鳥のハンターから声が聞こえてきた。

『・・・ほら、見ただろう緋鳥？今の人間達の感性は腐りきっている。』

「ああ！僕の才能を・・・ミソラの隣に在るべき人間を認めようとし
ないなんて・・・！」

『その意気だよ緋鳥。今こそ、君の本当の素晴らしさを世に知らし

めるときだ!!」

ハンターから何か飛び出し、緋鳥を包む。

包まれた後、そこから火球が更にそれを包んでいく。

それを破るかのようにして、大きな燃えるような翼を生やした人物がそこに立っていた。

「これが・・・僕の・・・真の力・・・」

『そうだよ。この力があれば、全人類は君に心酔する!強く、美しい、完璧な存在として!!』

漲る力を確信するかのように、鋭い爪を生やした手を握る。

その大きな翼を広げ、船を見下ろせる位置にまで飛んだ。

そして人差し指を船に差し向け、何かを放った。

ピンポンパンポーン・・・。

船のアナウンスが鳴った。

今まで食事を楽しんでいたスバル達もその手を止め、天井を見る。すると、少し雑音が混じってからアナウンスが流れ出す。

『ご来場の皆さん・・・この後撮影を行う予定でしたが急遽変更いたします。』

それを聞いて困惑するミソラだったが、ウォーロック達がハンターから飛び出た。

電波星人はそれぞれのパートナーへのところへと飛ぶ。

「ミソラ！スバルくん！FM星人の気配よ！」

「え、こんな時に!?!」

「ああ！それにこの気配、この喋り方・・・『フェニックス』の野郎だ！」

「今からお見せしましょう！・・・この僕、
『フェニックス・サンライズ』の優雅さを！」

第十一話 快晴の船出（後書き）

遅れてしまって申し訳ありません！

高校二年生になってからは何かと忙しくなってしまうけど……。ですが、最低でもこの物語を完結させるまで止める気は一切ありませんのでご安心ください。

今回はフェニックス戦！感想お待ちしております！！

第十二話 灼熱の鳳凰

スバル、ミソラ、ゴン太そしてジャックはフェニックスのアナウンスを聞き、浦方達に人々の安全を確保するように言付けパーティー会場の出口のドアを開ける。

船の甲板に立つと沈みかかっている夕日を背にしたフェニックス・サンライズがスバル達をまるで見下すような高さで腕を生んで羽ばたいている。

「やっぱテメエだったか！フェニックス！」

ウォーロック達もウイザードオンし、顔を見せる。

その中のある顔を見るとフェニックス・サンライズの顔は一瞬、驚いたようになった。

「ほほう、ウォーロックならともかくお前までもがいるとはねえ・・・
・コーヴァス。」

「ケツ、いちいち嫌味な兄貴だぜ！」

コーヴァスは忌々しそうに睨みつける。

が、スバル達はコーヴァスの発言をしっかりと聞いていた。その内容に勿論驚きを隠せない。

「な、コーヴァス！お前アイツの弟なのか・・・！？」

パートナーであるジャックの問いにコーヴァスは黙って頷いて見せた。

その一方のウォーロック達も否定する素振りを見せない。

ゆっくりと甲板に降り立ちながらフェニックス・サンライズは続けた。

「おやおや、兄である私への対抗心からヴァルゴと共に勝手に我が組織を離れて、一度は名声を手にしてきたのに今更地球人のペットに成り下がってるとは……。」

「黙りやがれ！今日こそ、その減らず口利かせなくしてやる！！ジャック、電波変換だ！！！」

コーヴァスはいきり立つようにしてジャックに電波変換を要請する。スバルたちも電波変換しようとしたがジャックに止められた。すると、フェニックス・サンライズは急に声色を変えて喋りだした。

「何だミソラ、君もいたのか。」

「！……その声、緋鳥くん！！？」

ミソラのみならず、スバル達はその声の正体に気が付いた。この高貴そうな声に間違いはない。すると元のフェニックスらしいの声色に戻った。

「そう、彼はその魅力を全世界に知らしめるため私のパートナーとなったのだ！」

「この力があれば、ミソラは……僕のものだ！！！」

フェニックスと緋鳥、両方の声色を使いながら喋っていく。すると痺れを切らしたようにしてコーヴァスが声を上げた。

「お喋りはそこまでだ！いくぞジャック！」

「ああ！電波変換！ジャック、オン・エア！！」

コーヴァスが飛び上がり、ジャックを包み込む。

その光が晴れると黒炎を纏った漆黒の翼を持つ戦士『ジャック・コーヴァス』となっていた。

フェニックス・サンライズも徐々に声の調子を上げていく。

「ふふん、ようやく面白くなってきたな。」

「いくぞ！！」

フェニックス・サンライズとジャック・コーヴァス。

それぞれ色の違う翼をもつ戦士は大空に舞った。

ジャック・コーヴァスは少し距離を置いて、多くの黒炎の爪を放った。

「食らえ、グレイブクロー！！」

「それが成長した結果かね？マグナムフェザー。」

フェニックス・サンライズも翼を震わせ、無数の炎を纏った羽を飛ばす。

ジャック・コーヴァスとフェニックス・サンライズの放った技が激しく爆発しながら相殺されていく。

だがフェニックスの羽は例えるならマシンガンのように繰り返され続けており、ジャックの『グレイブクロー』では打ち落とせる数に限度があった。

そして遂に、フェニックスの放った羽の一枚がジャック・コーヴァ

スの左翼に突き刺さる。

「！ヤベエ、ジャック！今すぐその羽を引き抜けえ！！」

「残念、手遅れだ。」

フェニックスは一瞬、人を馬鹿にしたみたいな笑いを浮かべると指を鳴らす。

するとジャック・コーヴァスの左翼に突き刺さっていた羽が突如、爆発した。

翼は爆発で砕け、ジャック・コーヴァスは落ちていつてしまう。

「ジャック！僕達も・・・」

「手を出すなスバル！！」

スバルの申し出を、ジャックは跳ね除けた。

別にジャックと緋鳥に因縁があるわけではない。

因縁があるのはコーヴァスの方だ。

パートナーの頼みだからこそ、ジャックは承諾したのだ。

「俺達は・・・負けねえ！！エアロダイブ！！！！」

ジャックとコーヴァスは、全力を掛けて飛び上がり、渾身の突撃を繰り出す。

一方のフェニックスの顔色顔色は焦っておらず、むしろ冷め切っているようだった。

向かってくるジャック・コーヴァスに対し、フェニックス・サンライズはこう言い放った。

「・・・愚かだな。この神聖なる鳳凰に勝てると思ったのか！ファイナル・フェニックス！！！」

フェニックス・サンライズも、自身に太陽のような火球を纏わせ、一気に急降下した。

その軌道はまるで炎の鳳凰そのものだった。

だがジャックの方も負けじとスピードが徐々に上がってきている。

そして、二人の体が激しく激突し、凄まじい衝撃と閃光がスバル達を襲った。

「うわああっ！」

「きゃああっ！」

「のあっ！」

スバルとミソラ、ゴン太は激しい衝撃に備えるため身体を低くし、

そして目を瞑る。

そして急に襲い掛かってくる激しい揺れにスバルはミソラを守ろうと抱きかかえた。

空中での衝突にもかかわらず、その衝撃で波が発生し船を激しく揺らしたためだ。

やがて衝撃と閃光が収まりスバル達はゆっくりと目を開く。

すると技の衝突に負けたのであろう誰かがゆっくりと甲板に落ちていつている。

落ちてきたのは……

ジャックだった。

「ジャック!!」

落ちてくるジャック・コーヴァスをスバルは一気に電波変換し、ジャックを甲板に衝突する寸前で抱きとめ、事なきを得た。

しかし受けたダメージは大きく、気絶してしまったようでスバルに抱きとめられた後電波変換を解除してジャックとコーヴァスに分離してしまう。

すると上からフェニックスの声が降りてきた。

「これぞ文字通り『堕ちた』というものだな。愚か者めが。」

フェニックスの方は傷一つすらついておらず、むしろ悠然としていた。

睨みつけるスバルだったが意にも解さずフェニックスはミソラの近

くまで飛んできた。

そして緋鳥の声色になってゆっくりと手を差し伸べた。

「分かつただろミソラ。僕の強さが！この強ささえあれば、君の望む全てを手に入れる事が出来る！」

しかし、ミソラの目は揺らいでいなかった。

そして凜とした目つきで手を跳ね除けた。

「お断りよ！こんな力なんて望んじやないし、それに大切なものはもうあるから！！」

「・・・何だよ、それ？僕で用意できるのなら、何だって・・・。」

その言葉にミソラは頷き、ゆっくりとスバルに近づいた。

そしてその腕を自分の腕の中に収め、言った。

「私の大好きな人、星河スバルくんよ！」

フェニックス・サンライズの、いや緋鳥の顔は引きつっていく。

そしてオーバーな動きをしながら、声を荒げた。

しかし、目は真剣そのもので問うてくる。

「・・・何故だ！これだけの力を手にしながら、何が不満なんだ！何が足りないんだ！！？」

すの返事に一秒もかからなかった。

ミソラは、ジャックを解放するスバルに視線を移しながら話す。

「スバルくんは、私の寂しさを分かってくれた。いつも辛かったと

き、彼が側にいてくれた……。私が彼を裏切っても、いつも助けてくれた……。そして、やっと分かったの。」

「……何、を……。!!!?!」

「……私は、スバルくんの事が好きなんだって。……。だから、断る！そして、」

ミソラはハープと合体し、光に包まれる。

フェニックス・サンライズも一歩下がり、顔を更に引きつらせた。光が晴れたそこには、ハープ・ノートが美しい音色のギターを弾いて立っていた。

「友達であるジャックを傷つけたあなたを……。許しはしない！」

はつきりと敵意を見せるハープ・ノート。

ギターを差し向け、決別の意を表した。

フェニックス・サンライズは顔を抑え、声を低くして静かに笑い出す。

だがだんだん哄笑となり、泣いているとも見せる表情を見せた。

「……そうか、まだ君は僕の力を……。信用してくれないみたいだな……。」

「緋鳥よ、君の力を彼女に認めさせたくば君のその力をそこにいるロックマン、いや星河スバル、そしてミソラ自身に刻み付けてやるのだ！」

騙りかけてくるフェニックスの言葉を鵜呑みにし、フェニックス・サンライズは翼を大きく広げた。

そして凄まじい速さで爪をハーブ・ノートに差し向ける。
しかし、間にロックマンが割り込み、ソードで防いだ。

「・・・許さないぞ、フェニックス・サンライズ!!」

爪と剣を境ににらみ合っていた。

だがそこへフェニックスに向かって何者かが突進してくる。
フェニックスは大きく動かず、バックステップするかのようにして
その一撃をかわした。

「おいスバル、ミソラちゃん！俺を忘れてるんじゃないぞ！」

それはゴン太とオックスが電波変換した姿、オックス・ファイアだ
った。

ゆっくりと腕組しながら船の先端に舞い降りるフェニックス・サン
ライズとロックマン達は改めて対峙した。

「とつとと元に戻りやがれ緋鳥！」

「悪い夢から、覚ましてあげるわ!!」

「いくぞ、フェニックス・サンライズ!!!!」

ロックマン達はフェニックス・サンライズに立ち向かっていった。

「僕に・・・私に逆らった事を後悔させてやるっ!」

第十二話 灼熱の鳳凰（後書き）

がああ ……！！！！

全くヒマがねえ！！！！といいながら何とか更新します。

それにしても相変わらず戦闘描写難しい・・・。

コメントに『フェニックスを秒殺してください』というような意見が多数寄せられました。

ですがフェニックスはこの物語の中でもかなりの実力者ですのでご期待に応えられません！

ですが、緋鳥には緋鳥個人に決着をつけますのでどうかそれでご勘弁を（泣）

では感想お待ちしております！！！！！！

第十三話 鳳凰は夕陽を舞う

「僕に・・・私に逆らった事を後悔するがいい！」

燃えるような大きな翼を持つ電波変換体、フェニックス・サンライズは自身の大きな翼を一気に広げ、空に飛び立ち羽を撒き散らす。撒き散らされた羽は一旦空中で静止した、かと思うと狙いをロックマン達に定め、一斉に降りかかった。

「バトルカード、マッドバルカン！」

「ショックノート！」

「ファイアブレス！」

ロックマン、ハーブ・ノート、オックス・ファイアはそれぞれの技で猛スピードで飛んでくる羽を数々を辛うじて撃ち落した。しかし、フェニックス・サンライズは今の一瞬でロックマン達の上に飛び上がっている。

「バーニングボム！」

掌を向けてきたかと思うと、そこから巨大な火球が襲い掛かってくる。

オックス・ファイアはロックマンとハーブ・ノートを後ろに下からせると自慢の拳を振り上げながら立ち向かっていった。

「こんな程度打ち返してやる！アングーパーチ！」

そのまま、拳を火球に打ち込んだ。
が、火球は風船のように破裂したかと思うと大爆発を起こしオックス・ファイアを吹き飛ばした。

「があああっ！」

「ゴン太、下がって！バトルカード、シルバーメテオ！」

ロックマンが手を高く掲げた。

すると幾多もの隕石がフェニックス目掛けて落ちてくる。

だが、大空を舞う鳳凰からすれば避ける事など造作もなかった。それどころか空中を旋回しながら羽を飛ばしてくる。

「うわあっ！！！」

「ぬるい！そんな程度で、よく地球を救えたな！？」

「いい加減にしないで！マシンガンストリング！」

爆風から立ち上がったハーブ・ノートがギターから鋭い糸を飛ばす。糸はフェニックスの左腕に見事巻きついていく。

しかし、そう簡単には運ばなかった。

フェニックス・サンライズは焦る事もなく糸ごとハーブ・ノートを引っ張った。

「ふんっ！」

「え、きやあっ！？」

華奢な体つきをしているハーブ・ノートはまるで釣竿のように簡単

にしゃくられた。

向かう先には爪を煌かせているフェニックスが待ち構えている。

「ミソラ・・・これが僕の強さだ!!!」

声色を緋鳥に変えたかと思うと、一気にハーブ・ノート目掛けて突っ込んでくる。

どうやら爪で刻み付けるつもりらしい。

ロックマンも立ち上がるとロックバスターを構える。

「ミソラちゃん、逃げて!」

ロックマンはバスターをフェニックスではなくハーブ・ノートと繋がっている糸目掛けて撃った。バスターは見事糸を切り裂き、ハーブ・ノートを一瞬自由にした。

フェニックスの爪が放たれる瞬間、空中を駆け回って爪を回避した。

「てめえ!ミソラちゃんに手を上げるとはそれでも男かあああ!!!」

オックス・ファイアが吼えながら、ウェーブロードから飛び掛ってくる。

全体重を乗せ、フェニックス目掛けてまた突っ込んでいく。

「オックスタツクル!」

「チイッ!」

危うく、オックス・ファイアの突進をかわす。

しかし、横切ったその瞬間わずかだがタツクルが羽に掠った。

一瞬顔を歪めたかと思うと、フェニックス・サンライズは緋鳥のときとは違う怒りを露にしている。

「ロック！アイツ、怒ってない!？」

「ああ、アイツは潔癖症かつ完璧にこだわる男だからな！相当怒ってらっしゃるぜ！」

「貴様ら・・・まとめて焼き尽くしてくれる！ライジングヒート！」

フェニックス・サンライズは両手を合わせ、それをロックマン達に向ける。

するとその両手から無数の火炎弾が襲い掛かってきた。

ロックマン達は左右前後それぞれに散るが追尾性能まであるようでした。しつこく追ってくる。

「くっ！これじゃ避けるのに精一杯だ！」

ロックマンとハープ・ノートは元から持ち合わせているフットワークで何とか火炎弾を次々とやり過ごしていく。

だが、元から動きの遅いオックス・ファイアは追尾火炎弾の格好的となってしまうた。

「うがあああああ!!!!」

「ゴン太！これを！」

見かねたロックマンはカードをオックス・ファイアに向かって投げつける。

するとオックス・ファイアの周りに光の障壁が張られていく。

「バリアーか！助かったぜスバル！」

オックス・ファイアが親指をロックマンに立てる。

だが、オックス・ファイアに障壁が張られた分、その残りはロックマンとハーブ・ノートに降りかかってくる。

必死に避け続ける二人だったが、足に限界が来てしまったのかハーブ・ノートの足が突如、もつれてしまった。

「あつ！」

「そこだあつ！」

フェニックス・サンライズが両手を合わせながら小指を少し曲げる。すると背中から迫っていたはずの火炎弾がカーブしながらハーブ・ノートの目の前にまで迫ってきた。突然の不意打ちに彼女は避けるすべなく攻撃を受けてしまう。

「きゃあああ！！！！！」

「終わりだ、ミソラ ……！！！！！」

残る火炎弾全てをハーブ・ノートに差し向けてきた。あれから大分捌いてきたとは言え20発くらいはある。それを受ければただで、いや大怪我などではすまない。

「ミソラちゃん！！！！！」

すぐさまロックマンが間に割り込んだ。

だが、フェニックス・サンライズはまたも不適に笑った。

「ハッハッハ、予想通りだ！ミソラを狙えば、君は必ずミソラを庇う！」

「そして君は爆風に飲み込まれジ・エンド。ミソラも傷つけることなく回収できる。」

緋鳥とフェニックスがそれぞれの声色を使いながら喋ってくる。

だが、その間にも火炎弾は目の前にまで迫ってくる。

『バリアー』のバトルカードも、先程オックス・ファイアに渡してしまったため、火炎弾を防ぐ手段は残されていなかった。

「終わりだ　　！！！」

「スバル、ミソラちゃ　　ん！！！」

オックス・ファイアがそう叫んだのもつかの間。

ロックマンは無数の火炎弾に消えていった　　。

「悪いけど、そう簡単にはやられはしないよ！」

「!!!？」

スバルの音が確かに聞こえた。

そう思うと爆風を突っ切って何かが空を舞っている。

それはハーブ・ノートを抱えたロックマン、いや

。

「ロックマン、キグナスノイズ!!!」

であった。

空色のような体色、背中に翼を生やしたその姿。まさしくキグナスノイズであった。

「おや、私の後輩の姿に似せられるとは……。相当厄介だな。」

どうやら、キグナスは彼の後輩であるらしい。

しかし余裕そのものはあくまでも崩さなかった。

ロックマンはハープ・ノートをオックス・ファイアに預けるとバスターを構えた。

「フェザーシユート！」

「マグナムフェザー！」

それぞれが放った羽がお互いを相殺していく。

しかしジャックのときは違い、連射力で劣る事はなかった。

「……。ライジングヒートオ!!!」

またも、火炎弾をばら撒いていく。

だがスピードを増した今のロックマンにその火炎弾が当たる事はなかった。

猛スピードで飛び回り、火炎弾を船になるべく当てないように撃ち落としていく。

結果、火炎弾を全て捌き切った。

「……。やはり、遠距離戦では埒が明かん。なら、接近戦と行こう！」

フェニックスはそう言い放ったかと思うところもさすがと言つス
ピードでロックマンに追いついてくる。
このスピードはさすがに予想外でロックマンは一気に間合いを詰め
られていく。

「はあああああっ!!」

「でやああああ!!」

お互いの格闘技が次々と繰り出されていく。
ロックマンの拳とフェニックスの鋭い爪。
更には蹴りや翼による斬撃などありとあらゆる技が出されていく。
やがてお互いの腕がぶつかり合う。

「キサマ如きに・・・ミソラは渡さんッ!!」

「・・・君はどうしてそこまでミソラちゃんに執着するんだ!？」

確かに、緋鳥のミソラに対する執着心はここまで来れば異常だ。
フェニックスは鼻を鳴らした後、ロックマンの腹に蹴りを打ち込み、
吹き飛ばした。
その隙に、無数の羽を叩き込む。

「うぐうっ!!」

「お前なんかに分かってたまるか!・・・天才ゆえの孤独をッ!!」

「・・・何だつて・・・!??」

「もう知っていると思うが僕は名家に生まれてきた、いわゆるお坊ちゃんさ。それ故、始めは親しく接したくれた者も、身分の差で次々と身を引いていった！」

フェニックス・サンライズはまた、バーニングボムを繰り出す。

ロックマンはそれを『レーダーミサイル』で何とか潰す。

しかし、またも鳳凰は一気に迫ってくる。

「僕は孤独になることが嫌だった！だからこそ家族の反対を押し切り、俳優になった！けれども、誰もが一人の俳優としてではなく、単に『お坊ちゃん』としてしか扱ってくれなかった！！！」

フェニックスの爪が幾重にも閃く。

始めはガードに徹していたロックマンもガードを崩されていく。

「うわあああっ！！！」

「けれど、ミソラだけは別だった！僕を始めて一人の人間として扱ってくれる彼女の笑顔に、僕は何度、救われた事か！！！」

爪の乱舞の後、蹴りの猛攻、更にはマグナムフェザーへの連携。

ロックマンも、体勢を立て直そうとするもののそれを許さずフェニックス・サンライズが次々に攻め立ててくる。

「そんな彼女が、僕には必要だった！だからこそ、彼女の隣にいるキサマを認めはしない！！認めてえ、たまるものかあああ！！！」

またも拳を振り上げてくる。

しかし、ロックマンが僅かに競り勝ちフェニックスを蹴り飛ばした。

「じぶっ！……お、のれっ！」

「……君にも、事情があるのは分かった。……でも、僕だって退けない！」

「何だと！！？」

ロックマンは手をソードに変化させ、フェニックスに斬りかかる。今度は、フェニックスが追い詰められていく。

「ぬぐぐぐっ！！」

「僕だって、ミソラちゃんが好きだ！……だからこそ、そのミソラちゃんを傷つけようとした君を許さない！！」

両手を弾き挙げ、無防備に姿勢をさらす。

その正しく隙だらけの腹に、ロックマンは容赦なく斬撃を与えた。

「じぶっ！？」

「今だ！メテオライトバレッジ！！」

ロックマンがバスターを構え、無数のエネルギー弾を撃ちだす。しかも、湾曲しながら向かってくるため避けづらい。ただし。

「……まだまだあつ！！」

相手がフェニックスでなければ、の話だが。

「そ、そんな!?!」

フェニックスは迫り来るエネルギー弾を紙一重の差で避けている。呆気にとられているとその全てを回避されてしまった。しかも、NFBを発動した事による激痛が腕を走る。

(ぐっつ!こんな時に……!)

「隙あり!ファイナル・フェニックス!?!」

「う、うわあああああああああつ!!!!!!!!!!」

激痛に気をとられているうちに背後をとられてしまった。

炎の鳳凰と化したフェニックスは一気に背後から突っ込んでいく。そして、ロックマンはジャック同様甲板に叩きつけられてしまった。

「スバル!」

「スバルくん!?!」

オックス・ファイアとハーブ・ノートが駆け寄る。

だが、辛うじてまだ電波変換は解けておらずロックマンは立ち上がった。

しかし体中はボロボロで、足もガクガクと震えている。

フェニックス・サンライズはまたも緋鳥の声で話しかけてくる。

「……見たかいミソラ、こんな無様な奴に君は恋をしているのだというんだよ!?!どちらがより相応しいか、今決着がついたと思うよ!?!」

「いいえ！スバルくんは、こんな事で負けない！」

ハープ・ノートはロックマンの前に、庇うように立つ。

その隣にオックス・ファイアもたった。

「ああ！コイツは俺達のためにここまでボロボロになれる、最高にかっこいい俺の友達だ！お前なんかに負けたりしない！！！」

「現に負けてるじゃないか！・・・そうか、まだ足りないのか・・・
。。なら！！！」

再び炎に包まれていく。

そして、振り切ったかのような目でハープ・ノートたちを見る。

「この最大最強の技で・・・思い知らせてやるっつうっつうッッ
！！！！」

今一度天高く飛び上がり、狙いを定める。

迎え撃とうとするハープ・ノート達だったが、再びロックマンが二人の前に立った。

「二人とも・・・下がってて。」

「スバルくん！？でも・・・。」

「下がって！」

スバルの目は決して怖いわけではないが、二人の足を一步下からせるには十分すぎる迫力を持っていた。

「僕の……勝ちだ!!!メテオライトバレッジ!!!!!!」

フェニックス・サンライズの必殺技があたるその直前の瞬間。
ロックマンのバスターが完全にフェニックスを捕らえた。

ほぼ0距離に近いため、避ける事など不可能だった。

無数のエネルギー弾を直に受け、自慢の翼は大きく抉られ、自身は大きく吹っ飛ばされる。

「ぐ、わ、があああああああああああああつ!!!!!!
!!!!」

そして、フェニックス・サンライズは甲板へと沈んでいった。
。

第十三話 鳳凰は夕陽を舞う（後書き）

ぐばっはあ！！中々更新できない！

おまけに戦闘描写はメチャクチャ激ムズ！！

・・・そして長くなっちゃった・・・。

今回も読んでいただきありがとうございます！！

感想もらえると嬉しいです！！！！

第十四話 これが想い

ロックマンのメテオライトバレッジを至近距離で受け、フェニックス・サンライズは吹き飛ばされた。その威力から仕方ないのだろうが、あの凜々しい燃えるような鳳凰の翼は抉られ、ボロボロになっている。

しかし、体中から煙を上げながらも、足を震わせながら立ち上がる。

「……いや、だ……。こんなところで……。諦めた、くない……！」

彼の目からは、涙があふれ出ていた。

息を荒くしながら、しかし全く諦める様子はない。

オックス・ファイアが拳を唸らせながら殴りかかろうとする。

「テメエ！まだそんな事を……！」

しかし、その拳も前に出たロックマンに止められる。

そして顎で『僕がやる』と伝えてきた。

ハープ・ノートは心配そうな目でフェニックス・サンライズの元へと歩いていくロックマンを見送る。

「……それが、君のミソラちゃんに対する想いだというのなら……！」

「……！！！」

ロックマンは右拳を振り上げる。

一瞬、顔を歪めながらフェニックスは一步下がる。

が、間に合わない。

「これが……僕の思いだあああつ!!!!!!!!!!」

痛快な、鈍い音がフェニックスの、緋鳥の顔を殴る。

その衝撃は予想以上で、一気に船の先端へと殴り飛ばされた。床を激しく転がり、最後には仰向けになる。

だがどうした事か、フェニックスの、否、緋鳥の顔は自嘲気味の笑みを浮かべているのだった。

「……これじゃあ……勝てないわけだ……。」

「!?何をいうか緋鳥！体制を立て直すのだ、そうすれば……」

突然、緋鳥が言い放った一言にフェニックスは猛反発する。
だが、先程の悔し涙ではなく自然に垂れ流れてくる涙の温かさを感じながら、緋鳥は続けていく。

「なんて事はない……。僕自身が、変わらなければいけなかったんだ……。」

『それこそんでもない！君は正しいのだ！！』

「でも、僕がミソラに差し向けた攻撃の手は、八つ当たり以外の何者でもない。」

『キ、キサマ……。ッ！！！！』

フェニックスは、自身が拒絶されていくのが分かった。
すると緋鳥とフェニックスが分離しかかっていく。
宿主から離れまいと、フェニックスは最期の悪あがきを始めた。

「こ、この役立たずがあ……。っ！！こうなれば、無理やりにも電波変換して……。」

「往生際が悪いぜ、兄貴。」

そのフェニックスの目の前にいた、再度電波変換したジャック・コーヴァス。

フェニックスは顔をこの上なく恐怖で引きつらせる。

ジャック・コーヴァスは何の感情も持つことなく翼を刃に変えていく。

鎌のように変形したその翼を、容赦なく振るった。

「とつとと失せな！フェザーシックル！！」

「ががああああ！！！！」

胸に鋭い一太刀を受け、完全に緋鳥と分離してしまった。

逃げようと試みるもロックマン達との戦闘の影響で体が中々いこうとを聞いてくれない。

そして、ロックマンは静かにバスターを構えた。

「惨めだなフェニックス。トドメだ、スバル！！！！」

「終わりだ！ロックバスター！！」

ロックマンは、左手のウォーロックを構える。

完全に逃げられないと悟った鳳凰は目を瞑った。

そして、ロックマンから鋭い光弾が放たれる。

が、その光弾は突如地面から伸びた黒い手によって阻まれてしまった。

フェニックスはその手を見るなり、顔を再び希望に満ち溢れさす。

「この黒い手……まさか!!?」

「ソフフフ……そう、そのまさかだよ……。」

フェニックスの後ろの、電波空間がゆがむ。

そして捻じ曲げられたかのように黒い穴が出現する。

そこからは、スバル達も良く知っているあの男が現れた。

「ファ、ファントム・ブラック……!」

「やっぱり生きてたのね!」

ロックマンは、やはりと感じつつもさすがに驚きを隠せないでいる。ハープ・ノートも、ギターを構えた。

「エクセレントな演出、感謝するよ。これで台本もより一層盛り上がるというもの!」

まるで物を食ったかのような微笑を浮かべながら、その右手を頭にかぶせてあるシルクハットのつばにかける。

マントは吹いてくる潮風にはためかされているがそれが不気味さを醸し出している。

しかし、痺れを切らしたハーブ・ノートが問うてくる。

「一体何が目的なの!？」

「安心したまえ。今回はフェニックスを救出しに来ただけさ。」

「……今度はブラックホールの奴とつるんでやがったか……!」

ウォーロックが放った一声を、しかし気にすることなくフェニックスを自らのマントを翻し、その中に収める。

再び、気味の悪い微笑を零すと再び電波空間を歪ませ、穴を開ける。

「これも、素晴らしき脚本（脚本）の一環なのだよ!……また、会おう!」

それだけを言うと、ファントム・ブラックは穴へと消えていった。スバル達もこの戦闘の影響か、周りに誰もいないので一旦電波変換を解く事にした。

すると気絶していた緋鳥がここでようやく目覚める。

「……ん……ん……。」

『ポロン、気が付いたみたいよ。』

ハーブが言うまでもなく、全員の視線が一人に注目していた。

目覚めた緋鳥はどうやら電波変換時の記憶も鮮明に残っているらし

く、スバルたちの怖い視線の正体に気が付いた。
だが、臆することなく立ち上がりそして腰を折り頭を下げる。

「ごめんなさい!!!」

それは紛れもない、演技などではない、誠意を持った謝罪
だった。

その悲痛な謝罪は船を一瞬揺らしたかのような。
彼は全てに謝った。被害を与えた人、襲いかかった船、そして、ミ
ソラに。

『さて、どうするよスバル?』

『彼がここまで真剣に謝る姿は正直見たことないわ。』

『俺様は個人的にや、もう2、3発はシメときてえんだがよお。』

『今回はお前らの意見を尊重しておいてやるぜ。』

ウオーロック、ハープ、オックス、コーヴアスが言う。

スバルは後ろにいるゴン太とジャック、ミソラに目配せをする。

ゴン太とジャックはオックスの意見に賛成しているようだが肩をす
くめている。

一方のミソラは笑顔でスバルの腕に抱きつきながら、振り返った。

「じゃ、代表してミソラちゃんから。」

スバルの一言でミソラが前に出る。

真っ直ぐ、一人の目の前に立った。

そして、

バツチ ン!!!

小気味いい音が、甲板に響き渡った。

「あーっ、スッキリした これでチャラだよ。」

「え・・・？」

「言うておくけど、私はお別れしたんだからね。 我侂な緋鳥くんと。」

その言葉に黙り込む緋鳥。

しかし、ミソラは笑顔で答える。

「そして、初めまして！新しい緋鳥くん！」

その言葉で、再び涙が流れた。

彼はたった一つ頷くと後ろを向いて歩き出した。

船内へと入るドアに手をかけた瞬間、立ち止まり後姿のままスバルに言う。

「……僕の負けだ。もう、ミソラには『男』として手を出さない。」

「……うん。」

「映画の件も、手を引くよ。君こそが、やはり相応しいからね。」

それだけを言うと、緋鳥は船の中へと戻っていった。

「……オイ、スバル。気持ちよく終わらそうとすんなよ。」

「 ……?!? 」

後ろから殺気を帯びた、低いゴン太の声を聞き取った。
否、彼だけでない。あと二名、それも片方は完全に凄まじきオーラを放出している。

「 ……映画って、どういう事ですか、スバルくん? 」

「 後でゆうつつくりと、お話ししようねえ …… 」

ガチガチのまま、スバルは動けなかった。

ジャックに助けを求めても『ワリ、無理。』と返されるだけの事は
明々白々。

もはや、この状況で助けになるのはやはりミソラだけだった。

(ミ、ミソラちゃん助けて ……!!)

(うん、いいよ)

ミソラのウインクで一息をつく。

だが、これこそ最大のタブー【?】だったりするのだ。

「 スバルくんは緋鳥くんの代役で私の相手役になるだけだよ 」

「 なんですってええええええええっ!!!! 」

終わった。

この後、スバルは尋問という名の拷問を受けた事は言つまでもなかった。

「 テイクシーン、48！アクション！」

辺りはすっかり日が沈んで夜。

星空が、海面を美しく照らし出す時間となった。
フェニックスとの戦闘で撮影時間に大幅な遅れが出たものの、撮影は開始された。

もちろん、緋鳥は手を引いたため相手はスバル。

因みに余談だがスバルの突然加入のため、設定を『とある事情で別れてしまった彼氏とこの船上パーティーで再会しよう』というストーリーに変更されたという。

「・・・あえるの、かな・・・。」

ミソラの優しき涙が、夜の潮風に溶けていく。
誰にも普段見せない涙が、誰もいない場所ではあっさりと流れてく
る。

彼の存在が、その涙腺のストッパーとなっていたのだ。

「・・・会いたいよ・・・。」

彼の笑顔を、星空に浮かべていく。

しかし、星空も寂しく瞬き時折吹く風がそれを煽る。
もう、耐えられなくなった。

「好・・・き・・・っ・・・!!」

後ろから、温かさが広がってきた。
感じている。抱きしめられているのだと。
それも、支えてくれるかのように。

「……………あ……………」

「遅くなって。ごめんね。」

そして、彼女が振り返ると同時に口付けを一つ、落とした。

「好きだよ。」

「カァーットオオツ!!! OK、OK! パーフェクトオ!!!」

監督の、大絶賛の声が上がった。

いや、監督だけにとどまらず始めはスバルを怪訝そうな目で見詰めていたギャラリーも、もう涙なしでは拍手できなくなっている。隣で抱きついてくるミソラの感覚を感じながら、スバルは顔の温度を上げたのだった。

「いやあゝ。それにしても演技初挑戦にしてあんな『アドリブ』をいれてくるとは! うちのプロダクションにも欲しいところだよ!」

監督が言い放った、余計な一言。

その言葉に拍手をしていたルナの手が止まった。

「…………どおおおゆうううこおおおとおおおおかしらああああ
!?!?」

さあ、どういう事だろうか?

スバルは苦笑いしか出来なかったという

第十四話　これが想い（後書き）

更新遅くなってすみません!!

おまけに短い上の恥ずかしいこの駄文の数々をお許してください!!

（土下座）

あゝ・・・連休も予定入ってるし・・・休みが欲しいです・・・。

では、感想お待ちしております!!!!

第十五話 新結成

フェニックスはロックマンに敗れ逃げ帰り、ボロボロの姿で舞い戻ってきた。

その姿にあの優雅な面影はもう見当たらない。

一方、帰ってみればUFOと老人のような電波体がスクリーンを何かの映像が流されている見ている。

「イヤア、『デイトニック』面白イビガネ。」

「うむ。ミソラちゃんも可愛いしこの。この映画、もうこの一週間だけで観客総員数が2000万人を突破とも聞いておる。」

「・・・お前達は何をしている？」

やけに低い声でフェニックスが訊ねる。

UFOと老人が振り返ればボロボロになった怖い顔のフェニックスが。

サボっていたとばれてはいるのだが敢えて言い訳に出る。

「コ、コレモ調査ノ一環ビガ！コノ地球人ノ文化ガドンナモノカラ・・・！」

「じゃっかましいわあ！！UFOのみならずオリオンまでもが付き合いおって！！！」

荒れ狂うフェニックスがUFOの隣にいる老人の電波体『オリオン』を睨む。

が、当のオリオンはどっしりと構えて座りこんだままだ。

「フェニックスよ。ロックマンに負けたお主がどうこう言えるセリフではなかるう。」

「グッ！（コイツ・・・夜道で背後から襲って消してやるづつうう！！）」

悔しそうに地団太を踏むフェニックス。

その隙に退散しようとするUFOだがその前に水がめのような電波体に呼び止められた。

「お待ちください、UFO。」

「・・・何ダ、『アクエリアス』デビガガ。」

UFOは水瓶のような女性の電波体、『アクエリアス』の名前を咳く。

「私わたくしにいい考えがございますの。」

「ホウ・・・。」

「もしかしたら、この地球上の全人類を全滅させられるかもしれないのですわ。」

それを聞いたUFOは愚か、とっつきかかっていたフェニックスにオリオンの動きも壊れたおもちゃのようにピタリと止まる。

冷静沈着な物腰のアクエリアスは更に続けた。

「その作戦のために、UFOとスコープイオンにとってきて欲しいも

のがあります。」

「・・・サスガハ『ヴァルゴノ姉』ビガ。分カッタ、任セルビガヨ
」!

フェニックスの襲来から一ヶ月、ここはWAXA。

前回のディーラー事件でスバル達が拠点として動いた場所である。その時にはスバル、ミソラ、ゴン太そして形式的にはロックマン最大のライバルである『ブライ』こと『ソロ』の四人で構成された『サテラポリス遊撃隊』というのが組織されたが今は事実上解散している。

しかし今回はサテラポリスのエースにして彼らの上司こと暁シドウから連絡が入り、急遽ソロを除く3人+今回はジャックも集結した。

「よ、ソロ以外全員集まったな。」

「暁さん、ソロに連絡は？」

「入れたんだが・・・『ザコと関われるほど、俺は暇人じゃない』って断られた」

お茶目な失敗を許して、とでも言うように舌を出す暁。

その横で待機していたジャックの姉こと『クインティア（通称ティア）』が暁の後頭部に鋭いチョップをかます。

この夫婦漫才ともいえる光景にミソラは目を輝かせ、スバルたち男性陣は啞然としていた。因みにミソラが目を輝かせているのはこの二人に恋する少女の一人として憧れているからだろう。

「・・・それはさておき、今回の召集のことを説明した方がいいんじゃない？」

『そよシドウ！さっさとやっちゃいなさいよ！』

「あ、ああ。そうだった。これを見てくれ。」

暁はゲホツと咳き込みながら何とか立ち上がる。因みにクインティアのウィザードは勿論、ジャックのコーヴァス同様復活したヴァルゴである。

そして傍らに置かれていたりモコンを手に取り、スクリーンに映像を映し出す。

映像に出てきたのは……。

『好きだよ……。』

「うわあああああああああ！！！！！！！」

先月公開されたミソラとスバル主演の映画、『デイタニック』の感動のキスシーンである。この一瞬の出来事にスバルは顔を赤くして喚きながら椅子の下に隠れこんだ。

「な・ん・で、こんなものが入っているのかしらシドウ？」

「い、いや、さっきまでこれを見て……ウボアアアアアアア
！！！！」

怖い顔をしたクインティアに畏怖するシドウ。

逃げおおせようとするがそれも敵わず素早く背後に回りこまれ、コブラツイストを決められる。奇妙な叫び声を上げながらシドウは崩れ落ちていく。

「……何故か」シドウは倒れちゃったから私が説明するわ。」

『何故か』の三文字をやたらと強調するクインティア。

それが故意であったとしても誰も突っ込めなかった。

「貴方達からの報告では新たな電波生命体の組織『ブラックホール』が犯罪行為に出たということらしいわね。サテラポリス、そしてWAXAでもそれを事実関係として認めたわ。」

「しかし、大きく報道してしまつては大混乱を起こしかねないし、奴らも躍起になりかねない。」

ここぞとばかりにシドウがよつこらせと起き上がる。どうやら慣れているらしい。

「あ、分かった！それで私たち『サテラポリス遊撃隊』の出番なんですね!？」

「そう！正解だミソラ。性格には俺とティア、そしてジャックを加えた『新・サテラポリス遊撃隊』だけだな。」

シドウが腕を組みながら椅子に座る。

まるですれ違つかのようにしてアシッドも出てきて説明する。

「この新メンバーで従来通りコスモウェーブから各国へと飛び回り、奴らの企みを阻止していきます。」

前回のディーラー事件でも、このような措置をとつた。

スバルの周りを見てみるとミソラはもちろん、ゴン太やジャックもやる気だ。

シドウは言うまでもないがクインティアもやる気がある・・・かのように見える。

「で、お前はどうなんだスバル？」

「もちろん参加します!」

「よっし! 決まりだな!」『新・サテラポリス遊撃隊』新結成!」

『おお ……!』

シドウが拳を高々と挙げ、クインティア以外がそれに乗ると、ここでシドウがコホンと咳払いを一つした。

「 ……でだ。」

『?』

「新結成の祝いとして全員でシーサーアイランドに旅行する事も決定した!」

ズダアア ……! ! ! ! ! ! ! !

全員が一斉にしてこけた。あのクインティアですらずっとこけている顔を痛そうに抑えながらジャックは尋ねた。

「な、何でまた急に・・・?」

「長官だって『新結成したのなら言っ来て』ってお許しもらえたぞ?」

「そついうことじゃなくて!」

珍しく、ゴン太も突っ込む。

するとスバルの脳内であるひとつの式が浮かび上がった。

「・・・まさか暁さん、僕たちをダシにして元から『さあいざ行かん！シーサーアイランドへ！！』」

スバルの一言は遮られた。

が、それは逆に肯定していると同じようなものである。

だが誰一人として反対意見を出すものはいなかった。

結局、皆は海に行きたかったのである。

と、その時だった。

「暁、大変だ！！」

「どうした？」

サテラポリスの構成員が暁に慌しく駆け寄ってきた。

「今、空港管制センターの電腦に何者かが侵入したらしい！それと同じタイミングで細菌研究所の方にも侵入者がと報せが入った！！」

全員に戦慄が走る。

そしてシドウは全員に向き合い、そして言った。

「我ら新・サテラポリス遊撃隊最初の指令だ！これより二組に別れ侵入者を阻止する！」

『了解！』

そして結果、スバルとミソラ、ゴン太は空港完成センターに、シドウ、クインティア、そしてジャックは細菌研究所へそれぞれ向かうこととなった。

空港管制センターの電脳

「だ、第一班止める　　！！！」

指揮官ウィザードの指令にあわせ、戦闘用ウィザードがショットを放つ。

しかし高速で動く『それ』には掠りさえもしない。

あくびしながらその電波体は攻撃を繰り返してきた。

「温イビガヨ。アステロイドミサイル！！」

『う、うわあああ・・・ッ！！！！』

次々と放たれる高威力のミサイルに次々と戦闘員がやられていく。指揮官ウィザードはソードを手に取り、UFOと対峙した。

「おのれ・・・！部下達の仇だ！」

「ホホウ・・・ソレナリノ戦闘力ハアルミタイビガネ・・・。気に入ッタビガ！！」

UFOは一旦空高く舞い上がる。

次の瞬間には青い光となって指揮官ウィザードに取り付いていた。

「う、うわあああ……」

光が晴れると、そこにはUFOの上に顔は電光掲示板のようにして表示された表情に人型ロボットを装着させたかのような、しかし凄まじい殺気をもつ電波変換体になっていた。

「ハツハツハ！『UFO・インベーター』ノ誕生ビガ！！」

自らを『UFO・インベーター』と名乗ったそれはUFOの下の部分から、トラクタービームらしきものを出す。

するとそこらなにやら情報データーらしいものがUFOの中に入り込んでくる。

「フッフッフ……ヤッパ電波変換スルト情報吸収力ガ上ガツテクルビガネ……」

「ロックバスター！！」

「又オツ、トオー！！」

後ろから放たれた閃光を、UFO・インベーターは空中を自在に駆け回りかわす。

ロックバスターを放った張本人であるロックマンの後ろからハープ・ノートとオックス・ファイアもそれぞれ駆けつけてきた。

ウォーロックは目の前にいる人物に齒軋りをしながら睨みつけた。

「・・・テメエが来るとはな・・・UFO!!」

「オヤ、ウォーロック。元気シテタビガ？」

ウォーロックがそういうのを聞いてスバル達は慌てだす。

以前クラウンたちから聞いた話ではUFOが『ブラックホール』を支配しているとのことだった。

「ロック！アイツが・・・！」

「ああ。ブラックホールのリーダー、UFOだ！」

「違ウビガヨ。今トナツテハ『UFO・インベーター』ト呼ンデホシイビガ。」

宙にふわふわ浮かびながら機械的に話す。

一見、ふざけているようにも見えるがその背から飛び出す殺気がな
んとも禍々しい。

黒一色に塗りつぶされていて、見るものに威圧感を与える。

「と、とにかく、お前をここから逃がすわけには行かない！」

「そつよ！ここらで覚悟しなさい！」

「往生際も大事なんだよ!!」

ロックマン達はそれぞれ身構える。

だが、UFOの方は全く危機感を感じていないかのようだった。
むしろ、優越に浸っているようにも見える。

「言ッテオクケド、我ヲスクトウムヤフェニツクスト同類ニスルナ。ソレニ今日ハ才前達ヲ相手ニシテイル暇ハナイビガ〜!!!」

UFOはそれだけを言つと宙に少し浮かび上がり、両手を上に掲げる。

すると遙かに巨大な、緑のエネルギー球が形成されていく。そして、それを容赦なく落とした。

「キルリアンバスター!!!!」

「うわああああ!!!!!!」

「きゃああああ!!!!!!」

「ぐわああああ!!!!!!」

その壮絶な威力に三人はいともたやすく吹き飛ばされてしまう。まだ地面にうずくまって立ち上がれない三人を特に気にすることなくUFOは立ち去っていった。

「サラバビガ〜!!!!!!」

細菌研究所

「おい！待ちやがれスコープオン！！」

「逃がさないんだから！！！」

ジャック・コーヴァスとクインティアとヴァルゴが電波変換した姿、『クイン・ヴァルゴ』はサソリを姿をした電波体を追い掛け回していた。

しかし、壁や地面にもぐったりと中々捉え切れなかった。

「そこだっ！」

地面から出たその瞬間を狙ってアシッド・エースが飛ぶ。

彼はあれ以来訓練を積み重ね自由自在に電波変換が出来るようになった。

だがそれでも、『スコープオン』と呼ぶ電波体を捉えきれない。

「……どうした？『これ』をそんなに持つていかれたいのか？」

地面から顔をのぞかせるスコープオンの手と思われる鉄には何かのピンらしきものがその手の中に納まっていた。

暁が聞いた話、それは研究のために作られた『水性ウィルス』とのことだった。

「それを返しなさい！ゴッドレイン！」

「おっと、あのアクエリアスの妹にしては鈍い動きだな。」

クイーン・ヴァルゴが上空から凄まじい雨を降らせる。

だが地上を高速で動き回るスコープィオンにあたりはしなかった。空中を駆け回るフェニックスとは違う動きに翻弄される三人。

「さて、もうちょっと遊んでやりたいところだが時間も惜しい。この辺で失礼。」

「！待てっ、ウィングブレード！！！」

地面に潜ろうとするスコープィオンに向かって鋭い一撃を向ける。だがそれも敵わずスコープィオンは不適な笑い声とともに地面に溶けていった。

「クソッ！逃がしたか……。」

「けれど、焦る事はないわ。まだ時間はある。」

「ああ。とりあえず、スバルたちとも連絡を取って一旦戻ろう。」

某国某所

「皆さん、ご苦労ですわ。」

アクエリアスの目の前にはUFOとスコピオン、それぞれが奪ってきた『制御コントロールプログラム』と『水性ウイルス』が並べられていた。

自分の狙っていたものが手にはいり、すっかりご満悦のアクエリアス。

「ほほう、して、これらをどのように使う気じゃ？」

オリオンが訊ねる。

振り返った彼女の顔はヴァルゴの姉らしく背筋を冷たくさせる笑みを見せた。

「それは……。」

「……そうか、あいつらは逃げてしまったのか……。」

『「めんざい……。」』

シドウの一言に合わせて誤るスバルとミソラとゴン太。
だがシドウは気にするな、と明るいい声で呼びかける。

「俺達だって失敗しちまったし、それにこれでくよくよしている場合ではない。」

「そうね。彼らの野望をこれから阻止していけばいいのだし。」

クインティアも、シドウの意見に賛成している。

彼らの言うとおり、くよくよすべきでないと感じたスバルたちの顔は自然に上がる。

シドウもそれをみてにやっと笑う。

「ようし！そうと決まったら！」

『「決まったら？」』

「シーサーアイランドへレッツゴー!!」

ズダダアア

!!!!!!

先程以上にスバル達はつつこけた。

第十五話 新結成（後書き）

毎回毎回遅くなって申し訳ありません！

しかもこの駄文の数々・・・。

今後も精進していきたいと思えますのでよろしくお願いします！
次回はシドウに負けてシーサーアイランドへ！お楽しみに！！！！

第十六話 常夏南国旅行

『新・サテラポリス遊撃隊』新結成から一週間。

ここ、常夏のリゾート地として非常に有名なシーザーアイランドに一台のウェーブライナーが風を切り抜けてやってきた。

そのウェーブライナーから4名の男子と2名の女子が降り立つ。

「うおーっ！ やっぱり来てよかったシーサーアイランド！」

海に向かってダッシュし、空から照りつける太陽のまぶしさを思わず手で遮るシドウ。

その後から荷物持ちをやらされたスバル達こと哀れな男子達がゼーゼーと荒い呼吸をしながら追いかけてきた。ミソラとクインティアはホテルのチェックインに向かっており、シドウは久々の海を見てなにやら叫んでいる。

(・・・いい加減持ってくれないかなあ暁さん・・・)

(俺達もう限界だよ・・・)

(姉ちゃん達も荷物持ちを任せやがって・・・)

この観光客にとっては清々しい真夏の太陽も、今では彼らの体力を奪い去っていく厄介な要素の一つとなってしまうている。

本来なら堂々と講義すべきところのだが前述の通りの酷暑が、彼らの口を塞いだ。

顔中から流れ出た汗が頬を伝って顎に集まり、雫となって落ちていく。

だがそのペースが尋常じゃない辺り既に危険信号のサインを送って

いた。

「みんなおまたせー！」

「ホテルから鍵を貰ったわ。先にホテルに向かいましょ。」

元気にはしゃぐミソラと涼しい顔をするクインティア。

この二人の美女の顔は本来なら何時見ても可愛いものなのだがこの炎天下の中ではそれすら薄れてしまう。

早いとこホテルに向かいたいと思うスバル達であった。

「なあ、それより先に泳がないかー!？」

「ホテルに向かうのが先よ。彼らに荷物持ちをさせている以上そうした方がいいわ。」

(そう思うんだったら荷物の一つや二つくらい持ってくれよ姉ちゃん!！)

泣きそうな目で姉を見るジャック。

もう誰も持ってくれないと悟るとさっさとホテルに向かうスバル達であった。

「何だとおおお

！！？」

ホテルに着くなりなの、ジャックの第一声。

余りにもうるさいといえばそれまでなのだがスバルはその気持ちがよく分かっていた。

別の意味で、だが。

「仕方ないでしょ。この時期取れる部屋が二人用の部屋三つしかなかったんだから。」

「だからって何で姉ちゃんとシドウが相部屋！？それにスバルとミソラならまだ分かるけれどもおおおお！！！！」

クインティアが顔を赤くしながら説明する。

これ異常ないくらい激レアなシーンだがそれ以上にジャックが哀れだ。

しかし、クインティアもお年頃の女性。シドウとの相部屋についてはむしろ嬉しそうだ。

否、彼女たちが部屋割りを決めた事からそれが偶然である事すら疑わしい。

「スバルちゃんと相部屋だー きゃー楽しみー」

(絶対何らかの意図を感じる……。)

それは突っ込まないのがお約束である。

だが突っ込まずに入られなかったため敢えて心の中で閉まっておく事にした。

ハハハツとシドウが笑いながら号令を下した。

「それじゃ各自部屋に入ったら着替えを済ませてビーチに来るように！」

「俺の意見は全面無視かあああああ

!!!!!!」

崩れ落ちるジャックの肩にそっと手を置くゴン太だった。

「よし、全員揃ったな！」

現在、ビーチに来ているスバル達。
各自それぞれの水着を着ている。

スバルは前回の修学旅行で来ていたのと同じ海パン。シンプルなイズベストというべきか。

ミソラは花柄の水着を着ており、彼女の可愛らしいイメージをよりいっそう引き立たせる。

ゴン太は前回と同じふんどしだがそれより手にしているモリの方がグレードアップしている。

ジャックは黒いビキニを装着。実に華が無い。

シドウは青い海パン一丁。『海の男』という称号が最も相応しい。

クインティアは白い水着でその可憐なイメージを崩さない。

「では言っておくが俺達はサテラポリス遊撃隊だ！事件があったときに備え、切り替えは怠るなよ！」

実にリーダーらしい一言である。

装備しているシュノーケルやら、ビニールボートやらといった遊ぶ気満々の雰囲気が無ければの話だが。

という訳で各自、海を楽しむことにした。

ウォーロック達ウィザードはウィザードオンしてビーチバレー大会を行っている。

意外にも、ハーブが殺人級スマッシュを撃っているのが気になるところではあるが。

ミソラとクインティアも、それぞれ泳ぎを楽しんでいる。

一方の残された男子達はなにやら火花を散らせていた。

「オイ、ここは水泳対決といかねえか？あの龍の像を折り返し地点として砂浜に戻り奥にあるフラッグを先にとった奴が勝者ってのは。」

ジャックが突如、話を持ちかけてきた。

水泳とビーチフラッグを掛け合わせた過酷な勝負。

もちろん、スバルに対してだ。

「うん、いいよ。勝負だジャック！」

「言うておくが、泳ぎだったら負ける気ゼロだぜ……！」

凄まじい闘気が、リゾートの砂浜を揺らす。

しかし、喧嘩は夏の華。それに食って掛かるものもまた然り。

「俺達も混ぜてくれよ。」

「俺抜きで進めよう何ぞ、ただのお遊びにも満たないぜ？」

ゴン太とシドゥもなにやらやる気だ。

「うおっしやあああ！！俺の勝ちいい！！！！」

競り勝ったのは シドウだった。

「はあ……はあ……負けた……。」

「シドウ……大人げないぜえ……ぜえ……ぜえ……ぜえ……。」

「ああ……牛井……げふうつ（海水たくさん飲み込んだため）」

スバル達は疲れ果てていた。

ミソラは『お疲れ様』とドリンクをスバルに渡す。
だがシドウは次なる指令を下してきた。

「じゃあ約束だ！一人ずつ俺に何か奢れ！」

それを言うや否やスバル達は売店に向かう。
数分後、片手にそれぞれが何かを買ってきたのだった。

「僕はハバネロ。(メチャ辛い)」

「俺はレモン(メチャすっぱい)」

「俺から辛子100%牛丼(メチャ嫌がらせ)」

「お前ら負けたからってそりゃねーだろおお！！！！！！！」

吼えるシドウを見て笑う一同だった。

と、その時側から大きな影がスバル達に近づいてきた。

それは現在このシーサーアイランドの守り神として崇められている
ストロングである。

「おお、お前達か。」

「あ、ストロング！」

因みにストロングは前回のディーラー事件の際、一回デリートされ
ている。

その後長い時間をかけ、記憶までも完全に修復したのだという。

「こんにちはストロング！元気そうね！」

「ああ。おかげさまでこのシーサーアイランドは今日も平和だ。」

ミソラの笑顔に答えるかのようにしてストロングも笑う。

そんな楽しそうなスバル達を木陰からあるウィザードが覗いていた。

ストロングに視線を移してはため息ばかりを繰り返している。

「……ストロングさん……。」

それはこのシーサーアイランドで大人気の踊り子ウィザード『シュトローム』だった。

シュトロームは実はストロングに恋焦がれている。

しかし、多忙なストロングとすれ違いになることが多く、ストロングの守り神として崇められている立場もあり中々思いを伝えられないでいる。

「……どうしたら……いいんでしょう……。」

また深いため息をつくシュトロームであった。

「私がお手伝いして差し上げますわ。」

「！！？」

どこからともなく響く声。

水のように透き通っているが、底は濁っているかのような声。
振り返ると水瓶の電波体 アクエリアス がいた。

「貴方の恋はもはや重症です。」

「……そう……かもしれませぬ……。」

「しかも、告白する勇気が無い。」

「……はい……。」

シュトロームの心理をズバズバ読み解き、巧みに誘導する。
更に、彼女を導く会話を続けていく。

「貴方は、このままでよいのですか？振られてしまう恐怖に負けてしまっている人生でいいのですか？」

「……それは……。」

「勝負を賭けもせずただ見詰めているだけであれば何も進展しませ
ん。」

いつの間にか、シュトロームはアクエリアスに引き込まれていった。

徐々に彼女には救いの女神のように見えてしまう。
目を見て、それを理解したアクエリアスはとうとう追い討ちの一言を放つ。

「ですが、そんなもどかしい貴方の恋をこのアクエリアスが後押ししてあげますわ。」

「 本当ですか!?!? 」

「 ええ。同じ女性として、助けたいのです。 」

優しく微笑むアクエリアスの瞳に、完全に吸い込まれてしまうシュトローム。

虜になってしまい、もはや何者ですら目に入らない。
それを確信したアクエリアスは彼女に近づく。

「 さあ、私を受け入れなさい。ストロングに貴方の力を見せ付けるのです! 」

そう言うと、まるで母を求める赤ん坊のようにふらりと近づくシュトローム。

そして 。

「ふふふ。これで完全に下準備が整いましたわ。」

.....

楽しく談笑していた一同。
だがシドウのハンターに緊急通信が入った。

「こちらシドウ。どうした？」

『大変だ！コスモウェーブで桁違いの電波ウイルスが確認された！』

「現状は？」

『街ではウェーブロードが切れたり、あるべきではない所に繋がったりと大騒ぎだ！』

「分かった。すぐに急行する。」

その一言でハンターを切るシドウ。

さっきまでの楽しそうな顔とは撃って違い、完全に本気だった。

「これより、我らサテラポリス遊撃隊は各自コスモウェーブでウイルス駆除を行う。」

『了解！』

全員が、確かに了解した。

ただ一人を除いて

『電波変換！』

各々、電波変換するとコスモウェーブへと飛び去った

シーサー城……。

「スバル達も大変だな……。む？」

見回りを終えたストロングが城に戻ると何者かが環境システムに触れていた。

当然、それを守る役割も担っているストロングの目が光る。

「何者だ！それは触れてはならない環境システム……。な！！？」

それはストロングも良く知っている顔だった。

このシーサーアイランドで大人気の踊り子ウィザードこと……。

「シュトローム……。！？」

だった。

しかし、その瞳に輝きは完全に失われている。
否、別人のようだ。

「あら、ストロングさん。少しの間この環境システムをお借りしますわよ。」

「お前は……シュトロームではない！何者だ！！？」

するとシュトロームの姿をしたウィザードは光に包まれる。

その光が晴れると全くの別人が立っていた。

右手には、大事そうに水瓶を抱えておりその水瓶から水が止め止めなくあふれ出している、幻想的な女性だった。

「私は『アクエリアス・シュトローム』……。」

「……何が目的なのだ！？」

武器である杖を構え、じつと睨む。

しかし並大抵のウィルスであればすぐに逃げ散るこの視線に全く動じないアクエリアス・シュトロームは答えた。

「これが何かご存知ですか？」

アクエリアスは左手から小瓶を出した。

端から見れば単なる小瓶かもしれない。

しかし、その小瓶は前回世間を一時期騒がせた小瓶である事をストロングは良く知っていた。

「そ、それは……この間盗まれたとかという『水性ウィルス』！

？」

「そう、水に良く溶け反応する事で猛毒と化すウィルスです。これを先程、雨雲に使うプラントの方に溶かしておきました。更にもう一つ……。」

アクエリアスは微笑を絶やさず続けた。
しかし、その微笑が実に冷ややかである。

「この環境システムの方に『制御コントロールプログラム』もインストールしておきました。これさえあれば、猛毒を降らす雨雲を自在に制御できる……。」

「……悪魔め……!!！」

それを聞くとストロングの顔は険しいものとなる。
杖を構え、完全に戦闘体制に入った。

「それを聞いて、誰が見過ごすものか！ストロングストーム！」

「アクアカーテン。」

激しい竜巻がアクエリアスの方に向かっていく。
だが水瓶からあふれ出る水が巨大な障壁を作り出しストロングの攻撃を完全に遮断してしまう。

「なっ……!!！」

「散りなさい、メールシュトーム。」

「うわああああああ！！！！」

ストロングの足元から激しく水脈が湧き上がり、飲み込ませる。その一撃で突っ伏してしまい、立ち上がれなくなってしまったストロングを特に気にする事もなくアクエリアスは環境システムに触れる。

「貴方は私の宿主の想い人ですからね。特別に死のシヨールを特等席でご覧ください。」

「勝手なこと言わないで欲しいわね。」

そこを遮ったのはクインティアだった。

第十六話 常夏南国旅行（後書き）

何とか更新できたー！

でも、GWやっぱり休みが取れません（泣）

もしかしたらGW中は一回も交信できない可能性がありますのでご了承ください。

次回はクインティアVSアクエリアス!?

こっご期待!!!!

第十七話 水嶺の激流

「勝手な事を言わないで欲しいわね。」

嘗ては天候を操れる制御装置も、今やアクエリアス・シュートロムが仕掛けた、一度操作すればそれだけで大量の屍を生み出せる兵器と化していた。

そこを遮ったのは悠然とした態度のクインティアである。

彼女の傍らに、ウィザードのヴァルゴも飛び出す。

「・・・やっぱり、アンタとはね〜。・・・いけ好かない姉貴！ど〜せこんなことだろ〜とティアと一緒に見張って置いてよかった！」

「あら、ヴァルゴではありませんか。どうやらフェニックスの報告どおり、愚かな地球人の下等な飼い犬と化してしまっているようですわね。」

互いににらみ合う、昔の姉妹。

サドステイックそんな視線を常に当ててくるヴァルゴに対し、アクエリアスは興味もなさそうな目で見下している。

が、優雅に、静かに階段を下りながら倒れていたストロングを蹴飛ばし、互いに面向かい合う。

「はつきり言って邪魔ですわ。・・・せめて、私の手で葬って差し上げましょう。」

「なあ〜にいきがっちゃってんのよ！やられるのはアンタの方だからね！」

いがみ合う、水の姉妹はそれぞれ殺気を出しつつ更に睨んだ。そしてヴァルゴは痺れを切らしたかのようにクインティアに寄り添った。

「ティア！さつさとやつちやお！」

「ええ。・・・電波変換！クインティア、オンエア！」

ヴァルゴが清らかな水に変化し、クインティアを包み込む。

彼女の腕や足に光が纏わりついて変化させていく。

球状となった水の塊が泡のようにはじけるとそこには水を操る女王、『クイン・ヴァルゴ』の姿があった。

「おやおや、元犯罪組織『ディーラー』の一員が、今更人々を救う正義の使者気取りですか？」

「・・・そんなところかしらね。ゴッドレイン！..！」

クイン・ヴァルゴが天に杖を掲げ、その技名の通り神の如く雨を降らす。

だが女性的な体つきとは言え、否、実際女性なのだがアクエリアス・シユトロームは地面の上を滑るに移動してやり過ごす。

更に抱えている水瓶から水を溢れさせ、大波を起こした。

「消えてください。アクアウォール。」

「ハイドロドラゴン！」

押し寄せる、壁のような大波に対しクイン・ヴァルゴは杖を地面に叩きつけ水の龍を作り出した。

ハイドロドラゴンは砕くようにして大波にぶつかり、突破口を切り開く。

「はあああつ!!」

突破口を切り開いたクイーン・ヴァルゴはそのまま突っ込んでいく。クインティアラしからぬ行動かも知れないが何せ相手はあの『ブラツクホール』の構成員、勝負を長くさせると不利な状況である事は愚問。

なら、勝負を掛けてみようと思ったのだ。

「愚かですわ。メイルシュトローム!!」

クイーン・ヴァルゴの足元から、まるで地雷を踏んだかのようにしてストロングを一蹴させた水脈を繰り出す。

いくら同じ水属性であろうと強力な攻撃を受けてはひとたまりもない。

ただし

「
甘いわね！」

「な、何っ!!?」

クイーン・ヴァルゴが『ヘンゲノジュツ』を使ってなければの話だが。

「この勝負、貰ったわ!ライトオブセイント!!!」

アクエリアス・シュトロームの近くまで一気に舞い降りたクイーン・ヴァルゴは周りに浮かせていた光の玉を柱に変え、そして回転させ

る。

この技も近くでまともに喰らえば致命傷確実の技だ。だが、突如として攻撃していたアクエリアス・シユトロームは水のようになり、まるで崩れ落ちるかのようにして零れ落ちていった。

「な、これはまさか水の分身・・・!?」

「その通りですわ。そして貴方の敗北も同時に決定。」

そう言われ、クイーン・ヴァルゴはようやく気づく。

自分の足が水で捕らえられていることに。

水位は彼女のくるぶしを完全に沈めており、それが当たり一面に満たされている。

「さあ、踊りなさい・・・! アクアデスワルツ!!!」

「きゃああああああつ!!!」

小波すら立つ、水面から鋭い水柱が連続して吹き上げる。

元々素早い動きが苦手ばクイーン・ヴァルゴは成す術なく水柱に錐もみ状態にされる。

それこそ、まさに踊っているかのように。

「あ・・・あ・・・。」

余りにも攻撃を受けすぎたクイーン・ヴァルゴは両手を水中に沈めてしまう。

そして最悪な事にダメージが大きすぎたのか電波変換すら解けてしまった。

抵抗する気はないと受け取ったのか、アクエリアスは高笑いする。

「分かりきった事だということにこつも呆気ないとは！・・・しかし折角です。」

アクエリアスは余裕然とした態度で指を鳴らす。

すると床を沈めていた水が一斉に引いていく。

そしてその水はクインティアの頭上に集まっていく。

やがて巨大な水の槍を形成した。

「あ・・・！！」

「私の最大奥義で散りなさい！ポセイドンランス！！！！」

鋭きまさに海神の大槍がクインティアに向かう。

裁きを与えるかのように。

(いじめんなさい・・・シドウ・・・。。) (

「おっと！そうは行かない！」

「「！！？」」

一瞬の閃光、それはクインティアの命を救った。
閃光となった『彼』はクインティアをかかえ、そして下ろす。
やがてその正体がわかるとアクエリアスは一步後退してしまう。

「貴方は・・・アシッド・エース!!!? バカな、あれだけの大量のウィルスを配置したのに・・・!?!?」

やはり、自分達の計画の障害となる者の情報は把握済みらしい。

だからこそ足止めとしてコスモウェーブ上に大量の電波ウィルスを放ったつもりだったのだがそれは彼らにしては余り効果がなかったことということである。

「真のヒーローはピンチのときに颯爽と現れるものさ!」

「・・・遅いのよ・・・バカ・・・。」

顔を赤くしながらクインティアは微笑んだ。

今はマスクで見えないがその下では眩しすぎるくらいに輝いているであろう、シドウの笑顔に答えるかのように。

「言っておくけど、この俺だけじゃないぜ!」

「なっ
『ロックバスター!!』」

アクエリアス・シュトロームの足元に光弾が打ち込まれる。

そして二人の前に立つようにして、ロックマンはバスターを構えた。

「クインティア先生!遅れました!!」

「・・・だから、先生は要らないのよ・・・。」

呆れつつも、内心は微笑んでいた。

だが、これで終わるわけがない。

紅蓮の猛牛こと、駆けつけたオックス・ファイアが渾身の突撃をします。

「喰らえええっ！！オックスタツクル！！！」

「ちっ！！！」

舌打ちしながらアクエリアスは何とか避ける。

だがそこへ音符状のエネルギー弾が先回りするかのようにつけてきた。

咄嗟にアクアカーテンをだし、防御する。

「……ハーブ・ノート！！貴女まで……！」

水の障壁越しでも確認できる、戦うアーティストの姿を目にし齒軋りをする。

「遅れちゃった分はキッチリ返すからね！ね、ジャック！！！」

「オオオッ！！エアロダイブ！！！」

「あああああっ！！！」

作られた水の障壁を、ジャック・コーヴァスが突き抜けてきた。

水属性が苦手な彼も、姉を傷つけられた怒りでそんな事も忘れさせる。

そしてそのままようやくアクエリアス・シュトロームに一撃を与え、ことに成功した。

完全に流れがロックマン達に傾いている中、アシッド・エースは言った。

「さてスバル、反撃開始と行くか!!」

「はい!!」

「戯言を……!!!!!!!!」

怒りを燃やす、アクエリアス・シュトロームであった。

第十七話 水嶺の激流（後書き）

どうも、もはや過去の人扱いのテンペストです。

ここまで遅れて申し訳ありません!!!

しかもしばらくテスト期間に突入するので更新不可能という最悪の展開!!!

ですが待っていただけたら幸いです。

絶対、続けますので感想お待ちしております!!!

第十八話 荒れ狂う戦場

「そこまでだ！アクエリアス！」

「戯言を　　！！！」

バスターを構えてロックマンはアクエリアス・シュトロームに言い放つ。

アシッド・エースもクインティアを倒れていたストロングの近くに寝かせた。

「ゴン太！悪いがクインティアとストロングを見てくれ！相手は水属性だから、火属性のお前は悪いがはぶらせる！」

「分かった！」

アシッド・エースの言葉を受け、オックス・ファイアはクインティアの側による。

一方のアクエリアスが憤慨していた。

何故なら後一步でクインティアにトドメをさせる。

そんなまさにその時、ロックマン達が駆けつけてきたのだ。

いらつきを隠せず、奥歯をギリツと噛み締め、恨めしそうに睨みつけてくる。

「おいおい、ヴァルゴの姉らしく『焦ると口調が荒々しくなる』ってクセ、出てんぜ？」

「お黙りなさい！アクアウォール！！！」

ウォーロックにからかわれたいつものアクエリアスらしからぬ、怒声交じりの口調で両手を広げ、大波を放った。

迫りくる大波の前にロックマンがバスターを青い拳に変え、出張る。

「そうはいかない！フリーズナツクル！！」

「なっ・・・！？」

氷の拳、スリーズナツクルを地面に打ち込み、冷気を走らせる。

絶対零度ともいえる温度に触れた瞬間、大波は凍り付いていく。

しかも先程まで全てを洗い流すはずの大波が、今ではアクエリアスの視界を遮る邪魔な障壁となっていることをいい事にアシッド・エース、ハーブ・ノート、ジャック・コーヴアスが一齐に飛び出した。

「アシッドバスター！！」

「パルスソング！！」

「ペインヘルフレーム！！！！」

放たれる高速の弾丸、華麗なハート状の音波、湾曲しながら迫り来る数々の黒炎。

忌々しそくに舌打ちをしたアクエリアスは手を振った。

「くっ、アクアカーテン！！」

間一髪のところでもアシッド・エース達が放った攻撃が全て遮断される。

バイザーの下からでも分かる彼らの顔を歪みを確認するとアクエリアスは技を解いた。

が、それを狙って氷の壁を突き破りロックマンが飛び出てくる。

「!!!しまっ

」

「行けえっ！ドリルアーム！！」

「きゃあああああ！！！」

高速回転するドリルが、アクエリアスを吹き飛ばす。

辛うじて空中で体制を保とうとするが更にハープ・ノートからの追撃を貰う事になる。

「ミソラ、畳み掛けて！！！」

「もちろん逃がさないんだから！グラビティステージ！！」

「くっ！じゅ、重力波ですって！？」

グラビティステージによる、重力波による緩慢。

その隙にジャック・コーヴァスとアシッド・エースがそれぞれの側面に一気に回りこみ、彼女の苦手とする電機属性の技を一気に撃ってきた。

「そーゆーこった！プラズマガン！」

「更にステルスレーザー！！」

「甘いっ！！！」

だがその攻撃は高く吹き上げられた二つの水柱によって吸収されて

しまつ。
完全に決まったかと思われた連携を防がれ、ハープ・ノートは呆気にとられた。

「え！？そんな！！？」

「確かに私は電気が苦手ですわ。ですが・・・。

電気を吸収しやすい水は私の盾となり、そして剣ともなる！

・・・このようにね！！！」

するとアクエリアスは強烈な電流をたつぷりと含んだ水の柱を鞭を操るかのように撓らせ、ハープ・ノートに差し向けた。

「ぎゃ・・・！！」

「ミソラちゃん！！！！」

慌てて、条件反射の如くロックマンはハープ・ノートを庇う。だが変幻自在に形を変える水は二人同時に襲いかかって行く。おまけに強烈な電流までもが襲い掛かり、ロックマンとハープ・ノートを苦しめていく。

「うわあああああ！！！！」

「ぎゃあああああ！！！！」

「テメエツ！！グレイブクローー！！！」

スバル達を傷つけられた事に激昂したジャックは鋭き、炎の爪を放つ。

だがどれもいとも簡単にあしらわれてしまう上、アクアオールで押し戻されてしまう。

「なら・・・これでどうだっ！ウイングブレードッ！！！」

「ポセイドンランス！！！」

翼の光を大きくし、アクエリアスに突っ込んで行く。

だがアクエリアスは対して大きな海神の槍を作り出し、衝突させる。結果、アシッド・エースは槍を突き破ったもののそのせいで攻撃を外してしまう。

「一気になぎ払って差し上げましょう！アクアシード！！！」

アクエリアスの足元から水が一気に溢れ出し、床を浸す。

その時、クインティアが立ち上がり叫んだ。

「気をつけて！一気に水柱を吹き上げてくる攻撃よ！」

「気をつけてといたってどう逃げれば・・・！！？」

「だったら・・・これでどう！！？」

スバルは辺りを見回すがどこもかしこも水に浸されており、逃げ場はない。

と、ここでハーブ・ノートが立ち上がり矢みたいなものを放った。

だが、ロックマンのノイズ率はすでに達していた。

『ノイズ率、50%・・・75%・・・100%!!!!!!』

「させませんっ!!ポセイドンランスッ!!!!」

床を沈めていた水を一瞬にしてかき集め、巨大な槍をまた作り出した。

ノイズを取り込んでいる間は無防備であると思い、一気に決着をつけようと槍を向かわす。

だがそれも時遅く、ノイズチェンジの衝撃で槍は弾かれました。そしてロックマンの姿は王冠を被ったかのような、緑のボディをしていた。

「ロックマン・・・クラウンノイズ!!」

「なっ・・・!!!?!?」

呆気にとらわれているヒマもなく、ロックマンは巨大な雷の剣を取り出す。

その剣に、凄まじいエネルギーが流れ込んでいく。

そして剣を掲げた後、一気に接近していく!

「うおおおおおおおっ!!」

「ですがっ!こんな避けてしえまば・・・ッ!!!!?!?」

避けようとジャンプしたその時、ガクンとアクエリアスの視界が揺れる。

足元を見てみると重力場を形成している、一本の矢が突き刺さって

いた。

それは先程、ハープ・ノートが放ったものだ。

「バトルカード・・・スカルアロー・・・あの時ですか!!!!!!」

「そういう事

今だよ!スバルくん!!!!!!」

ハープ・ノートが言うまでもなく、ロックマンは大剣を振り回していく。

左右に一回ずつ切り裂き、そしてまた上に剣を掲げる。

「終わりだ!サンダーボルト・・・ブレイドオツ!!!!!!」

「きゃあああああああああああああああツ!!!!!!!!」

シーサー城に、激しき雷鳴とともにアクエリアスの絶叫が響き渡った。

NFBの威力もあいまってアクエリアスがただ逃げる事だけしか思えず、環境システムをもちや目にもくれずにシュトロームと分離して逃げていった。

スバルはNFBを発動したダメージで電波変換がとけ、ガクリとその場に座り込んでしまう。

「スバルくん！！大丈夫！！？」

「う、うん……何とか大丈夫！」

明らかに苦笑いである。そのためミソラはスバルの側を離れなかった。

そこでいい雰囲気になっている彼らとうといウォーロックを除いて『ご馳走様。』と呟いたのはここだけの話である。

ややあつて、しばらくするとシュトロームは目覚める。

「う……ん……。」

「シュトローム！気が付いたか！！」

既に立ち上がっていたストロングがシュトロームの顔を覗き込む。スバル達は壊れたり、水浸しになった床を掃除したり、シドウとクインティア、そしてプログラミング専門のアシッドで環境プログラムを修復していた。

幸い、大事には至らず目立った被害者もゼロということでのこの事件は静かに幕を閉じたのだった。

「何でっ！何で私があんな下賤な者どもに負けなければならない
ですかっ！！！」

その頃、ブラックホールの基地でアクエリアスが荒れ狂っていた。
床や壁、いたるところが水浸しである。

「・・・ハア・・・。イツニタツタラ気ガスムノヤラ・・・。」

「私たちの事も考えてくれえ・・・。」

UFOとフェニックスが鳴きそうな声で呟いたという・・・。

第十八話 荒れ狂う戦場（後書き）

いやあ~~~~!!!!お久しぶりです!!え、誰かって?テンペスト
ですよ!!!

はい、お久しぶりです。

テスト期間も終わって久々の更新・・・ってかなり短っ!

おまけにクオリティーが徐々に薄れてきてますね・・・。もっと精
進していきます。

では次回もお楽しみに!!!

第十九話 文化祭

ここは秘密結社『ブラックホール』のアジト。

未だにいらつきを隠せないFM星人で満たされつつあるこの現状にUFOは頭を悩ませていた。

これが原因かは定かではないがスクトゥムが負けた日から後頭部に偏頭痛が起こっているのは確かだ。

右向けば腹いせにやけにロックマンに似た等身大の人形が立てられており、スクトゥムはそれを狂気の笑い声を上げながら切り刻んでいる。

あまり気にする事はないがとりあえず他人の振りをしておく。

左方面には自分の自慢の爪でガラスを引っかいているフェニックスが。止めてくれ、脳神経に異常をきたす。と、心の中で愚痴っても無意味だと気づいたUFOはもはや彼らの存在は彼の脳内では抹消完了である。

だが一番困るのは後ろでピアノ構想曲、『魔王』をけたたましい声で引いているアクエリアスで明日の悪夢でのメインになりそうだ。

「・・・全ク、ドイツモコイツモ・・・!」

「まあ、そう言ってやるものではない。」

そんないらつきを見過ごしてか、地面から一体のFM星人が湧き上がった。

サソリのような姿をした電波体、『スコープピオン』である。

「アレハ最早呪イデビガヨ！コノママデハ呪イ殺サレテシマウビガ
！！」

「・・・落ち着け。」

「コレガ落ち着イテイラレルデビガ！？ロツクマンモ、NFBノカ
ヲ少シズツ制御シツツアルビガ！」

さすがに三人が負けて帰れば多少の危機感は沸くものであろう。
珍しい、ブラックホールの指導者は焦りはその危険度を示している。
だがブラックホール内最も冷静な暗殺者は諭すように話しかけてき
た。

「安心しろ。次は俺が出よう。」

「・・・スコープオン。勝算ハアルデビガカ？」

「ふっ・・・でなければ、こんな発言はしない。」

キザっぽく、チツチツとハサミを向けてくる。

だが、UFOは知っていた。こいつは『完璧』以外が大嫌いの『暗
殺者』であることを。

このブラックホールのNo.2の実力の持ち主であるオリオンが別
任務で不在、そして自身はある計画を進めるためスバル達の相手に
してられない今、頼れるのはこいつだけであろう。

「・・・ワカタ、ソノカワリ、失敗ノニ文字ハイライナイビガヨ！

「！」

「ふっ……任せておきたまえ。」

所変わって、ここはスバル達の通う中学校。

「さあ、みんな！この時期がやってきたわよ！！」

クラスの中で叫ぶは知る人ぞ知る、学級委員長白金ルナ。普段はおしとやか（？）で有名なはずだがそんな彼女が可憐な少女に相応しくない、仁王立ちでいる。

だがこの仁王立ちは怒りによるものではない。やる気のものである。

そう、学校を通ってきた人ならば誰しも経験するであろう、『文化祭』である。

「誰か、このクラスを、文化祭を激しく盛り上げようと試みのある者ー!!」

だが、そう簡単にアイデアは出るものではない。

全く手が上がらない現状を見てルナは声を少し低くした。

「……だ・れ・か？」

するとその声を境に一斉に手が上がった。

「委員長！僕は『目指せ！計算王』というクイズ企画を……！」

「他の人ー。」

「牛丼大喰らい選手権！」

「次の方ー。」

「……トランプ大会？」

「ゴー、ネクスト！」

キザマロ、ゴン太、ジャックの意見が次々と潰されていく。涙をすすする三人を、ルナは気にする事はなかった。

「ハイ！お化け屋敷がいいと思います！」

「……在り来たりね。まあ、候補にとっておくわ。」

「委員長とミソラちゃんをメインにしたメイド喫茶を……！」

「……その意見を言った奴、死にたい？」

「このクラスにはミソラちゃんがいるんだし、皆で歌でも……。」

「……一人のための文化祭じゃないのよ。もっとマシな意見を出
なさい。」

「はい！！×××××！」

「放送禁止用語じゃない！！却下！破棄！！デリート！！！！」

「……と、それからルナは来る意見を千切っては受け止め、千切っ
ては投げ、千切っては燃やし（？）続けた。
はっきり言ってグダグダ感が否めない。」

「……ねえ、スバルくん。どうしよう？」

「うーん……。どうしようって言われてもな……。」

コソコソと、スバルとミソラが相談する。

彼らは現在、全く意見を出していないのだ。

そのため、イライラが最高潮に到達しつつあるルナの標的にいつ選ばれるか知ったものではない。

「……そのコソコソしている二人！！意見はあるんでしょうね！！？」

……噂をすれば影が差す。

全く、古来の人類が残した教えというのは聊か正確すぎる。

「スバルくん！文化祭の事よりミソラちゃんとおしゃべりする方が楽しいのかしら！？」

「い、いやそんな事ないよ！！」

「じゃあ意見出しなさいよ！！」

うぐっ、と言葉に詰まってしまふスバル。

確かに文化祭を楽しみにしていないわけではない。

文化祭の色んなところを回ってミソラと一緒に屋台の料理を食べ、ミソラと一緒に遊び、ミソラと一緒に出し物……と、桃色のかかった妄想はここまでにしておこづ。

「さあ、意見はないの！？」

……これは簡単な、そして難題な二択問題だ。

『YES』か、『NO』か。

考えられるだけの脳細胞を全てフル稼働させ、考え込む。

そしてルナの強張った顔が間近に迫りかけたその時、閃いた。

古来より言い伝えられてきた『火事場のばか力』、この日を境に刻

み付けておこうとスバルは思った。

「映画だよ！僕らのクラスで映画を撮影するってのはどう!?!」

『おおっ!』

クラスの反応はミソラはもちろん、不機嫌だったルナですら表情を変えるほどだった。

これぞ人間が逆境に追い詰められたときに発揮する力だというのはか。

「もちろん監督も、脚本も、キャストも、費用も僕らのクラスで出すんだ!」

「費用の事なら心配ないわ。私が負担します。」

さすがお嬢様、言ってる事のスケールが段違いである。

とまあ、映画をやる事自体、何ら問題は内容なのでこの段階まではよしとしておく。

そう、この段階までは……。

「映画の製作は決定して、監督は誰にしましょうか?」

「……ここは普通に考えて委員長がいいと思つぜ。」

ゴン太がルナのご機嫌を取るように推薦する。
が、それは時として仇となる。

「何を言つとるか　　!」

『ヒッ!?!』

「折角だから、・・・私が・・・ヒロイン・・・」

・・・最後の辺りが聞こえませんかよ、委員長。

「ルナちゃん！無理しなくていいよ！私がやるから！！」

そこへ颯爽と現るスバルの女神、ルナの天敵、響ミソラ。

確かに超トップアイドルかつ、女優であるならばこれほどの適役は
いない。

キャリアも豊富で問題はない・・・のだが。

「わ、私だって！た、たまにはヒロインをしてみたいわよ！」

「でも、そんなチグハグでできるのかな〜？」

・・・ここに勃発、女の戦争。

ちなみの彼女らの『ヒロイン』という枠を超えた先にある真の目的
を知らないスバルは欠伸をかいていた。ある意味、図々しい。

「・・・じゃあ、こういうのはどうですか!？」

そこへキザマロが走りこんできた。

その手に持っているは恐らく大まかなストーリーを書いたのである
う、プロットのようなものである。

彼女たちはそれを一心に読みふけていたが最後の行を見て黒く微
笑む。

「・・・いいわ。これにしましょう。」

「そうね。・・・最終決戦よ!!」

一体何の話かとスバルは呆れる。

だが後に渡されたこの紙 俗に言うラブストーリー

の最

後の行を見てスバルは絶句する。

その最後の行とは 。

『最後の最後に主役のスバルが委員長かミソラちゃんかを、どちらかをアドリブで選ぶ。』

その三秒後、少年の雄たけびがコダマタウン中に広がった。

第十九話 文化祭（後書き）

はい、お久しぶりです！

え、アンタ誰って？テンペストです。

更新が遅くなって本当にすみません！！ですがちよこちよこ書き上げていくので応援していただけたら嬉しいです！

図々しいですが感想お待ちしております！！！！

第二十話 灼熱の国へ

夏、それは人々が最も汗を流す季節。

人はそんな時期にどこに行きたいだろうか？海か？近所のプールか？それともいつその事寒い北国のシャーロカ？

好みは人それぞれあるだろうがそれでも絶対にいきたくない国はある。

そう、例えばそれは……。

「……委員長……」

「あら、何かしら星河くん？」

「……どうしてこんな時期にアフリク地方の最も熱い『ナビ砂漠』なのさ!？」

そう、スバル達は前回の学園祭の映画撮影のためにここ、アフリクの中でも最も灼熱で、過酷とされる『ナビ砂漠』を訪れていた。暑い、暑い、暑い。クラスの皆が口々に言う。

だが恋に燃える乙女二人はそんな暑さなど大して気にもしていないらしい。

「大丈夫だよスバルくん！私が水を飲ませてあげるから」

「あ……ありがと……」

『スバル、顔がミイラになりかけだぜ?』

抱きついてくるミソラのせいで（顔には一切出さないのだが）体温

の上昇を感じる。

そんなスバルをウォーロックが心配するがスバルはただ文字通り乾いた笑いしか出来なかった。

「……それにしてもよ委員長、……」

「並み居る童話の中から……。」

「……『アラビアンナイト』だなんてチョイスしたんです……？」

ジャック、ゴン太、キザマロも意識が吹っ飛んでいきそうだ。

そう、全員の話し合い（事実上決めたのはミソラとルナだが）で決まったのは『アラビアンナイト』である。

確かに、ここでもラヴストーリーは珍しくないし、それなりのロマンもあるがよりによってこんな時期にはして欲しくないものだ。

「はいはい！そんな事言わずにとつとついてくる！もうすぐ宿よー！」

『……はー……い……。』

逆らう事＝死。この方程式が成り立ってしまった以上、服従は余儀なくされた。

宿『オアシス』……。

まさしく彼らの救いとなる宿には到着するなり様々な食事が出迎えてくれていた。

まあ、最も彼らが欲していたのは水だったが。

たらふくの水（と食事）を平らげたスバルは個室に戻る。

「はあー……疲れたな……。」

「クツクツク。これからもっと疲れることが待ってるのにつてか？」

ワイザードオンするなり皮肉を言うてくる相棒にますますスバルの顔は暗くなる。

ベッドにごろんと寝転がり、天井を見上げる。

別に天井に興味があるわけではないが他に見るものもないし、事実見たくないのだ。

「そうなんだよなー……。暁さんもあんな事しか言ってくれないし……。」

実はスバルは今回の撮影に当たってシドウに長期の国外旅行とついでに必要な機材を借り受けるついでに撮影されるに当たっての『あの問題点』を相談した。

するとシドウは今年一番の爽やかな、しかしどこか鬱陶しい笑顔でこう答えた。

『・・・スバル、『男のケジメ』を付ける。』

『・・・・・・・・・・・・は？』

ただ、それだけだった。

改行すらせず、立った一文で終わってしまったアドバイスとは呼びがたいもの。

その呆気なさにスバルはポカンと口をあけての一言だった。

「でもよお、暁の言うとおりでせ。お前も二股かけるワケにはいかねえよな？」

「ふ、二股って・・・!!!!」

「んじゃ、お前はどっちをとりたいんだ？」

いつも疎いはずのウォーロックからまさかの指摘。

それを言われスバルは『あー』だの『うー』だの声を濁らせる。

「・・・ホントなら、ミソラちゃんをとりたいよ・・・。」

「じゃあ迷う必要なんてねえじゃねえの？」

「でもさ、そうになると委員長が悲しむワケ、だよな。もしかしたら大事な友達が一人減っちゃうかもしれない。」

と、スバルは悲しげな顔をして言う。

しかし、こういう優柔不断な人は結局二股をかけてしまいやすい事も多々ある。

だからこそはつきりと決めなければならぬのだ。

「・・・まあ、俺から言えることはこれくらいだ。後は頑張んな。」

「うん・・・。」

スバルはただ、ベッドで考え込むことしか出来なかった。

「ソフソフ。これは面白い脚本が出来そうだな。」

「フ・・・お前もそう思うだろう?..」

その頃、有名な『バグの三大ピラミッド』の天辺でファントム・ブラックとスコープオンがスバル達のいる『オアシス』を見下ろしていた。

「どうする？今すぐいくかね？」

ファントム・ブラックがマントを翻して飛ぼうとする。

だがスコープピオンはご自慢のハサミで黒衣の脚本家を止めた。

その目は非常に鋭く、冷たく、冷静だ。

「いや、もう少し奴らの行動を探った方がいい。俺は今まで暗殺するに当たってあらゆる逆転劇を目撃してきた。特に世界を何度も救った英雄様なら起こしかねん。」

「・・・さすがはプロだ。よく暗殺の方法を心得ている。」

「それにだ。厄介な事に偶然か、はたまた狙ってかは分からんが『ヤツ』もいるとの事だ。」

「ソフフフ。確かにロックマン並に警戒せねばならん人物だな。」

覚えがあるのかファントムは笑いを浮かべながら、しかし冷や汗を一筋垂らす。

一方のスコープピオンは警戒、もあるが興味も持っているようだった。

「折角だ。我らにたてつく可能性があるものを纏めて始末しようじやないか。」

その為にはもう少し、探りを入れる必要があるな・・・。」

ブラックホール内、最も冷徹で完璧な暗殺者はかすかに微笑んだ。

更に時同じくしてミソラの部屋。

「はあゝあ。スバルくんと同じ部屋じゃないなんてショック。」

「いいじゃないの。いつも一緒に寝ているわけなんだし。」

ミソラとハープが語らっていた。

すでに日は沈み、夜の砂漠を美しく染める満月が辺りを照らし出す。それは美しく、だが寂しく輝いている。

寂しげな月光に照らされてか、すでに電気を消したミソラの部屋も寂しさに包まれた。

「・・・ねえ、ハープ。」

そんな寂しさにあおられてかミソラが何時に無く寂しげな声を漏らす。
こみ上げる何かを抑えようと、ベッドにおいてあった枕を抱えている。

「何かしら？」

「……もし、もしもだけども。」

少し、目線を下げてミソラが呟いた。

「スバルくんが……ルナちゃんを選んじやったら……どうしようかなって……。」

「……。」

まさしく返答に困る質問だ。

確かにスバルからは以前『好き』と言ってもらえたが事実どうかはまだ確信がもてていなかった。

万が一、ルナを選んでしまったらどうなるか……。

全てを失ったかのような喪失感に襲われるのは間違いないだろう。

「……ミソラ。」

「……ハープラ……。」

「いい？そんな事考えるもんじゃないの！女だったら『あー』だ『こー』だ言っていないで純粹に想い続けなさい！でないと、ホントにとられちゃっわよ！？」

これはシンプルイズベスト。だがハープから送れる言葉はこれだけしかなかった。

「・・・そう、だよ。 うん！私、頑張る！」

少し、調子を取り戻してきたかのようにしてミソラが言った。安心して胸をなでおろすハープは更に一言入れた。

「だったらもう寝なさい。明日は朝早いんでしょ？」

「ふっふん 職業柄早起きに離れてるもん！」

さっきまでの寂しげな顔が嘘のように、ミソラは明るく微笑み返した。

「・・・さて、と。明日の朝食の用意も終わったし私もそろそろ

休まないとな。」

ここは宿の厨房。

そこではこの宿の主が明日スバル達のクラスの皆に出す朝食の下ごしらえを終えて背伸びをしていた。

「ふんふんふん」

久々のお客であるためか主のご機嫌は非常にいい。

ミソラのファンなのか『ハートウェーブ』の鼻歌を歌っているほどだ。

その鼻歌が微妙に違ってたのは気にしてはいけなところである。しかし、そんな彼の背中に突如悪寒が走った。

「・・・？なんだ？」

『ホオ・・・いい勘をしているな。』

「だ、誰だ？」

辺りを見回す。しかし誰もいない。

だが気配はするのだ。後ろから？前から？床からか、天井からか？謎の声は不気味にささやく。

『周波数もピッタリだ。・・・これを利用しない手は無い・・・。』

「だ、だから誰なんだ!？」

『お探しの俺なら・・・ここだ。』

突如、彼のハンターから声がしたかと思うとまぶしい光が襲った。その光と音を感じてゴン太とキザマロがやってきた。

「あ、おじさん！どうしたんだ？」

「だ、大丈夫ですか！？」

「・・・ああ、すまないね。ハンターが誤作動を起こしちゃってね・・・。」

店主はそんな事を言い出し、服にかかった誇りを取り払うかのようにしてパンパンと服を叩く。そして急に話題を変えてきた。

「そうそう、君たちは明日どこへ行く予定なんだい？」

「あ、僕達はこの砂漠を越えた先にある『カルジーン宮殿』に行くんです！」

「そこで映画の撮影をするんだ。メインはスバルが二人のヒロインのどちらかをとるかのアドリブだぜ！」

楽しそうにキザマロとゴン太は言う。

しかしそれを聴いた瞬間、店主の顔は一瞬鋭くなった。それに気づいていないキザマロとゴン太を見て店主はまた笑顔を作ると、

「そうか、しっかり頑張っただけだね。」

「はい！我らの手で最高の映画に、学園祭に見せます！」

「試作品が完成したらおじさんにも見せてあげるからな！」

そこまで言った二人は『明日の用意がある』と言い残し、そのまま店主に別れを告げて去っていった。

後に残された店主、いや取り付いた『それ』は怪しく微笑む。

「……そうか。なら、それを利用しない手は無いな……。」

ククク、と静かな笑みがまるで這い蹲るかのように一瞬廊下に響き渡った。

第二十話 灼熱の国へ（後書き）

はい、皆さんお久しぶりです！テンペストです！

え、アンタ知らないって？ですよー。

すみません！今までテストの嵐やいろんなことに巻き込まれて……。

ですがもう夏休み！更新ペースも上がってくると思いますのであつかましいでしょうがどうか応援よろしくお願いします！

最後になりましたが応援してくださいさる方々、ありがとうございます！！！！

第二十一話 砂漠の暗殺者

砂漠。

日照はこの世のものとは思えないほどの灼熱を人に与え、日没の間夜は常任には耐え難い極寒の地となる。

素人はこの砂漠の気温差についていけなくなるのだ。

そう、それは今まで一切砂漠にきたことのないスバル達にも当てはまる。

「どうしたのスバルくん？目の下にクマが出来てるよ？」

ガタンゴトンと揺れる、スバル達のクラス全員を乗せるバスの中。間近でミソラに顔を覗き込まれ、顔を少し赤くするスバル。

本当だったらミソラとルナ、どちらを選べばいいのか葛藤して眠れなかった。 といいたいところだが実際の原因は夜と朝との気温差である。

夜は寒く温かくして寝ようとしたら今度はお日様が出てギンギンの暑さに。

そんな状況で寝られる人は強者である。

「うん……ちょっとね……。」

「全然大丈夫じゃないよ！今日はキャンセルする？」

「いや……皆だつて暑い思いして撮影に来ているんだから僕一人の都合でやめるなんてできないよ……。」

さすがはスバルくん。優しい性格である。

と、言っても結構重症な寝不足なのである意味危険だ。

その証拠にスバルには遙か彼方の景色に奇妙なミイラ達が何故か秋刀魚を持つてのサンバをしている姿が映ってしまっている。

「あ……見てミソラちゃん……ミイラ達がサンバ踊ってるよ……秋刀魚持って……アハハ……」

「スバルくんしっかりして……!!」

こればかりはミソラも涙目である。

時は無常に過ぎていき、スバルがこの世のものとは思えない幻覚からようやく解放された頃にバスは目的地にたどり着いた。

「さあ、皆カルジーン宮殿に着いたわよ!」

バスを降りたスバル達を出迎えたのは、まさにアラビアンナイトの物語に相応しい宮殿である。物凄く昔に作られたはずなのに屋根や壁に描かれた絵や装飾品は一切の美しさを損ねずに凛としている。恐らく夢見がちなお姫様が住みたい住居ベスト3には入るであろう。それが今スバル達の目の前にそびえる『カルジーン宮殿』なのだ。

「カルジーン宮殿は昔の頃は技術の粋を集めて作ったカラクリ宮殿とも言われています!」

「カラクリ?」

キザマロが自身の『マロ辞典』とやらを自慢する。

が、対して聞いていたミソラが何か嫌な予感を察したのか、苦笑いを浮かべた。

「はい！例えば……」

キザマロが眼鏡をくりつと上げ、大広間に差し掛かったときだった。

バコンー！！

『え？』

全員が、嫌な音を耳にする。

そして足元を確かめると……床の感覚がない。

急に大広間に差し掛かったかと思うとそこで床が一斉にまるで落とし穴だったかのように開かれた。

「ミソラちゃん、委員長、危ない！」

「きゃあつ！」

「うおっと！危ねえッ！」

辛うじてスバルが先頭を切って歩いていたミソラとルナを押し倒し、落とし穴から回避させる。戦闘慣れしてしまっているからこそその賜物だ。

一方ジャックも華麗にバックステップをして見事に避けてみせる。だが他のクラスの間仲間は仲良く落ちていつてしまった。

「し、しまった！皆が……！」

「キザマロくん達大丈夫かな・・・。」

スバルは慌てて跳ね起き、穴の方を振り返る。

ヒュウウと不気味な風鳴りを唸らせてはいるが耳を澄ますとクラスの間達が出来ているのが聞こえる。

見たところ深いといえば深い薄っすらと落ちていった全員の様子を確かめる。

すると、

「スバル・・・委員長う・・・助けてくれ・・・」

「

「ってあら？ゴン太は何で落ちてるのよ？」

「どーやら、あのデブは落ちちまったみてえだぜ。」

落とし穴を覗き込んでルナが言い、それにジャックが悪態を付きながら答える。

いくらサテラポリス遊撃隊の一員といえどゴン太の体格では機敏な動きは出来ない。

と、言う事でキザマロたちと仲良く下まで落とされました、と言う事です。

「た、大変だ！早く助けなきゃ・・・。」

「とにかく電波変換しなきゃね！」

「ああ！！！」

そういうなりスバルとミソラ、ジャックはハンターを掲げ、叫ぶ。

「『電波変換！！』」

それぞれのハンターから輝きが漏れ出し、自分の相棒たちが、包み込む。

と、思えばあつという間にロックマン達がその場に立っていた。意を決し、仲間達を救い出そうとその穴に飛び込む。が、

「うわあああああつ！！」

「きゃあああああ！！！！」

「ぐわあああああ！！！！」

バチツ、と電気のはじけるような鋭い音が響き、スバル達は弾き飛ばされた。

どうやら電波障壁　　ブライが使っていたものによく似ている
のような物が張られているらしい。

「ケツ、こりや相当な強度だな。」

「多分、私達の総攻撃を当ててもビクともしないわ。」

呆れたようにしてウォーロックとハープが言った。

コーヴァスも真剣に眺めていたがやはり無理、との事らしい。
と、その時スバル達の目の前にディスプレイが飛び込んできた。

『やあ、久しぶりだな。死のカラクリ、カルジーン宮殿へようこそ。』

「テメエは・・・スコープオン！」

ディスプレイに映った、サソリのような電波体。

その姿の通り『スコープピオン』と呼ばれた電波生命体は微笑を浮かべ、スバル達を見比べる。

「・・・お前は・・・！」

ディスプレイに映るスコープピオンを氷点下を上回る、いや下回る冷たい目で見詰めるのはジャックだ。

だがその冷たい瞳の奥にしっかりと憎悪の炎を燃やしている。

「ん？そこにいるのはコーヴァスではないか。この間私一人を捕らえられなかったキサマもいるのか。仕事熱心でご苦労な事だ。」

「・・・待つてろよオ・・・ズタズタに引き裂いてやる・・・！」

指をパキポキ鳴らせてジャックは言う。

黒いカラスの怒りようにスバル達も仲間とは言え汗を流す。だが当のスコープピオンは未だに微笑を浮かべているだけだ。

『ああ、俺はこの宮殿の最深部にいる。下にいる連中を救いたくば俺を倒す事だ。』

「ど、どついう事だ!？」

すると、スバルの問いに答えるが如くフツツ、とあからさまに不気味な笑みを浮かべた。

そして自身の映る画面を右端に小さくよせ、新たな画面を映し出す。ディスプレイに映っていたのは落とし穴に閉じ込められたクラスの皆だ。

『じつじつとき……!!』

スコープピオンの目が妖しく光る。

まるで呼応するかのように宮殿がガゴンと一瞬だけ揺れる。

突如、落とし穴に移っているクラスメイトの上から大量の砂が注ぎ込まれて来ているではないか!

「な!?!す、すぐに止める!!!」

『ムダだ。私を倒さぬ限り彼らが生き埋めになるのは後約10分と行ったところだな。』

「ちよつと!人質をとるなんてサイテーよ!!!」

スバルと共にミソラも怒りを露にした。

だが一方のスコープピオンは微笑を浮かべてスバル達を見比べているだけだ。

「それこそムダだ。アイツはブラックホールの殺し屋だ。」

「目的のためなら手段は選ばない……そういう男よ。」

「俺が言うのもなんだが、極悪人だぜ。」

電波体三名はハアと悪態を付くばかり。

いずれにしろ、このままではクラスの皆は生き埋め確定だ。

そうなる前にスコープピオンを倒さねばならない。

『理解してくれたかな?ま、精々足掻いてくれたまえ。では御機嫌

『よう。』

「待てッ！……ダメだったか……」

スバルが静止をかけようとしたがその前にスコープイオンは回線を切ってしまう。

こうなれば後は突き進むのみだ。

「スバルくん！急いだ方がいいよ！」

「そうよ！早く何か知らないけれどあのムカつく奴を倒してきなさい……！」

ミソラに続いてルナが猛る。

まあ、ルナは戦えるわけがないので安全な宮殿外に待機してもらう事にする。

そのままスバル達は宮殿内のウェーブロードに乗り、スコープイオンの待つ最深部へと急ぐのだった。

「フム、中々の速度だな。」

宮殿内にアチコチ仕掛けた、電波ウィルスから送られる映像を眺めるスコープオン。

暗殺の心得は何より相手をしつかり観察する事。

戦うクセ、息継ぎする独特の瞬間、ステップの踏み方まで、その全てを知る。

それこそが確実に相手を葬り去る事が出来る的確な方法なのだ。

ウェーブロードの各地に配置したウィルスと戦うスバル達を見ながら、スコープオンは真剣に睨み、脳内で分析している。

「まあ何より気をつけなければならないのはNFB、そしてファイナライズだな。」

「ソフソフ。さがに甘く見ることは出来ない相手だよ。」

その時、後ろから不気味な独特の笑い声が聞こえる。

マントを翻す音は、聞きなれてしまった。

「ん、遅かったなフロント・・・ってうおおお！！？ボロボロでなはいか！！」

振り返ったスコープオンは心臓が飛び出るくらい、といったら月並みな表現だが本当にそんなくらい驚いてしまったのだ。だって目に飛び込んできたのはマントは引き裂かれ、自慢のシルクハットはグチャと曲がりきってしまい、足がガクガクと笑っているフロントムブラックなのだ。

光景が曖昧かも知れませんがこれはよい子には見せられない光景なのです。

「ン、フッフ……相変わらず鬼だった……ぞ……グフ……」

「……『奴』のおびき寄せには成功したのか？」

肩をすくめながら情けない目でファントム・ブラックを見る。

すでに床に這い蹲り、芋虫のように動く。

スコーピオン視点からすればぶっちゃけ、キモい。

「当た、り前……だ……ハハハ……それはいいからリカバリ
ーを……」

「スマン、本部に忘れてきた。」

「オ……ノレEEEEEEEEEEEEEEEE!!!!!!!!……
ガクツ」

「あ、死んだ。」

いえいえ、生きています。

まだ魚のように、ピクピク、微かにですが動いています。

ですが冷徹な暗殺者はそんな事も気にしません。冷酷ですね。

「まあいずれにしろ今日は戦えないのならさっさとUFOの所に戻
れ。」

「……」

(返事がない。ただの屍のようだ……)

それでも振り向かない恩殺者はどこかに清々しさすら感じられる。と、その時ウィルスの一体から連絡が入った。

すぐさま回線を繋ぎ、報告を受ける。

その内容からスコープピオンはさぞ満足しきった顔で笑った。

「……そうか、奴が来たか。ククク……。」

暗殺者の異名に相応しい、低い笑い声と笑みはいつまでも続いた。

「ねえ！あそこが最深部じゃない!?!」

ウィルスをようやくなぎ倒したミソラが指差したのは大広間の前の扉。

なるほど、確かに怪しい。

とは言え畏の可能性も無くはないのだが今は躊躇している時間すら残されていなかった。

「よし、突き進もう！」

スバルが先陣を切ってその扉に突っ込もうとした。だがその矢先スバルの目の前に一つの光が落ちる。

「うわあっ!!!?!」

「きゃああ!?!」

「くっ……!!」

その衝撃は凄まじく、スバル達の動きは止まらざるを得なかった。だが眩い光は晴れ、落ちてきた者の輪郭が次第に見えてくる。しかしそれとは同時に凄まじい殺気が感じられた。

オルム。

白い髪に、青いバイザー、そして黒を貴重としたフ

忘れる事はない。

強の戦士。

スバル達が最も大切にする『絆』を忌み嫌う、最

「……久しぶりだな。ロックマン。」

「………ブライ！」

つづく

第二十一話 砂漠の暗殺者（後書き）

お久しぶり！テンペストです！！

いや×更新速度上がるかな？とっておきながら遅くなってしま
いすみません！

もう一ヶ月に一回か二回くらいの更新になるかも？

でもできれば応援してください！！！！

では次回もお楽しみに！！！！！！

第二十二話 孤高の戦士と暗殺者

スコープオンへと続く大広間。そこに立ちはだかる、黒い影。絆を忌み嫌う戦士、ブライ。

「ブライ、君は一体どうしてここに・・・」

「どうもこうもない。ファントム・ブラックを追ってきただけだ・・・」

「ファントム・ブラックですって!?!」

それを聞いてハーブ・ノートが驚く。

スコープオンだけでなく、奴までもがここに来ているというのか。少なくとも、両方を相手にしているのは皆を助け出すタイムリミットがなくなってしまう。

と、ここでブライがため息を一つ吐いた。

「フン、数発拳と蹴りいれて命辛々ここに逃げた奴を追ってきたと言ふことだ。」

「・・・あゝ・・・納得。」

ロックマンだけでなく、ジャック、更にはハーブ・ノートまでもが口をそろえて頷いた。

いくらかのとは言え随分失礼な話である。

「だが丁度いい。ここにブラックホールの奴らも来ているなら、叩きのめすまでだ。」

「君も・・・ブラックホールを追っているの!？」

「ケツ、どーせまたムーの技術がどうたらこうたらだろうが!」

ウォーロックの一言にブライは何も言わない。

だが否定をしない限りは肯定だ。

以前、「ディーラー」にも同じようにムーの技術を利用された事があつたがそれと同様らしい、現代に生きるムーの末裔にとって、ムーの技術は守るべき物。

それをあろう事が私利私欲のために使うなど、許されてはならない。

「だったら僕達と一緒に『ふざけるな』」

協力を求めようとするスバルにブライが鋭い一言を入れた。

やはり、元から協力する気はないらしい。

後ろに控えさせた彼の相棒 ラプラス の存在が、それを

意味している。

「お前達のような甘つたるい絆が俺は心底嫌いだといったはずだ。」

「だけど、今は躊躇している場合じゃないでしょ!」

「そうだ!それに俺達だって、皆の命がかかってるんだ!」

ミソラもジャックも、同じように声を上げる。

だが、ブライの視線は緩むどころかますます鋭くなる一方だ。

「ロックマン・・・お前は言った、『絆は力だ』と。なら、見せてみる。」

「たあっ！」

「くっ！」

不意打ち気味の回し蹴りを繰り返し、ロックマンを後退させる。後ろへ瞬時にバックした事で事なきを得たがブライは息づく余裕すら許さず、連携を否応なく畳み掛けてくる。

「ハアアアアッ！！！」

拳を振り上げ、猛烈な衝撃波を繰り返していく。その突き進んでいくスピードは以前のそれを遙かに上回っていた。もう、普通に防御に徹していたのでは間に合わない。そう判断し咄嗟に横に逃げ込む。が、それもブライの想定範囲内だった。

「ふんっ、せいっ、だあっ！！！」

「ぐっ、うっ！！！」

ロックマンの真正面にまで持ち前のスピードで接近を仕掛け、殴打の連撃を繰り返す。フックから繋げてストレート、そしてアップー。猛烈な攻撃の前にロックマンの体制は崩されていく。

「オオオオオッ！！！」

「うわああああああああ！！！！！」

そして締めは強烈なサマーソルトでロックマンを吹き飛ばし、壁に

叩きつける。

ガラガラ、と壁の砕け散った破片が落ちていく音が響き渡った。と、そこで何とブライはガクリ、と膝を突き、腹を押さえる。

「……キサマ、いつの間にこんなマネを……」

壁からようやく這い出たスバルはやはり、と確信していた。

ブライの腹には無数の蹴りの後が残されていた。

そう、バトルカード「サウザンドキック」による、蹴りの猛攻だ。

「これなら効くかなって思ったんだ。電波障害も関係ないし。」

「てめえだけが無駄に強くなったわけじゃねえってこった！」

スバルが舞い降り、ウォーロックが言い放つ。

そしてブライもまた、ゆらりと立ち上がった。

今度はまたラプラスを剣に変え、その柄を握り締める。

互いの戦慄はまだ、動き始めたばかりだった。

「……………ここ、だよね！」

「ああ！ここがカルジーン宮殿の最深部……………」

その頃、ミソラとジャックはとうとう最深部にたどり着いた。

最深部は何と豪華に黄金一色で染められている部屋だ。

金でできている物は小さな置物から絨毯、果ては風呂やベッドまで。人間、しかも女の子であれば一度に一生は夢見るであろう豪華な部屋である。

「ようこそ、強欲と裁きの部屋へ。」

その最も置くにある玉座では一人の男が座っていた。それは先程スバル達が泊まっていた宿の主人である。

「あれ、おじさん！？なんでここに……………」

「気をつけてミソラ！彼は今、スコープオンに操られているのよ！」

ハープの一言で歩みかけた足をピタッ、と寸止めする。

するとまるで幽霊が取り巻くかのように電波体が一つ、現れた。

サソリの姿をした暗殺者、紛れもないコーヴァスの元同僚、スコープオンである。

「ご名答、彼は実に役に立つよ。私と周波数が一致するだけでなく君達の情報も引き出せた。」

「ホオ・・・それで相も変わらずこんな回りくどい、地味な動きしかやってないのな。」

それを切り捨てたのはコーヴァスである。

しかもその言い草には少々棘が感じられた。

どうやら挑発のつもりらしい、しかしブラックホール内最も冷徹な暗殺者の瞳は決して揺らぐ事がないどころか、

「お生憎様、お前のように無鉄砲でバカみたいに失敗するほど初心ではないのでな。」

「・・・いい度胸だア！その喉笛かつ裂いて二度と減らず口を叩けないようにしてやる！」

「お前が逆に挑発されてどうするんだよ・・・。」

たきつけられたコーヴァスをジャックが諫めた。

それを見てスコープイオンはただ、静かに笑っただけである。

「やれやれ・・・それでこの俺を倒すつもりでいたのか？異なことを。」

「とにかく時間がないの！・・・やるなら、さっさと始めましょう？」

ハーブ・ノートがギターを鳴らし、構える。

それに合せてジャック・コーヴァスも翼を広げ、辺りに禍々しい暗い炎を従えた。

一方のスコープイオンも、宿屋の主人の周りに纏わり着く。

「いいだろう。なら、我が華麗なる暗殺術をその身をもって知るがいい。最も、気づいたらあの世逝きというオチがつくがな……！」

スコープイオンの周りに砂嵐が巻き起こる。

電波変換しているにも拘らず、その風圧で二人は吹き飛ばされそうになるがそれでも何とか踏ん張り、堪えた。

やがて砂嵐は晴れ、一人の男が姿を晒す。

顔はサソリを模した仮面、肩からかけている鱗のようなマントの間から強靱な肉體、そして鋭い光を煌かせるハサミが覗く。

背中には毒の針がついた尾をゆらゆら揺らし、禍々しさを強調させた。

「さあ、このスコープイオン・デザートという暗殺術という恐怖にいつまで絶えられるか？」

「へっ！いい気になってんじゃねえよ！グレイブクロー！」

ジャックが背中を広げ、炎を召喚する。

やがて炎は爪となり、高速で狙いを定めて、襲い掛かる。

「……ソニックカット。」

しかし、それはスコープイオンの呟きで一瞬で消えうせた。

否、彼はマントの下から両手のハサミを高速で振り回し、炎を掻き消したのだ。

だがそれはあくまで囷、壁を蹴りあがってハープ・ノートがチャンスを得る。

「隙ありっ！パルスソング！」

「甘い。」

ハーブ・ノートはギターをかき鳴らし、ハート型の音波を飛ばす。威力にも、弾速にも優れた技であったが、それは何とスコープオンが壁に溶け込む事で回避されてしまったのだ。

「え!?!う、嘘……」

「俺は壁、床、天井至る所に潜り込める。出来る暗殺者は場所など選ばない……!」

驚き呆れるハーブ・ノート。

するとどこからか声が響き渡った。

「ちいつ、この陰気臭い能力は相変わらずか……」

「これじゃどころ攻撃……があつ!」

コーヴァスに問おうとしたとき、ジャックの背中に鋭い痛みが走った。

ミソラは一瞬しか見えなかったが、壁からスコープオンのハサミが出現し、瞬く間にジャックの背中を攻撃したのである。

「ミソラ!空中に!」

「うん!」

ジャックの二の舞になってはまずい、と感じたハーブはミソラを空中に移動させた。

ここならば壁や床、天井からの襲撃にも備えられる。
そう確信していたのだが自称「出来る暗殺者」は甘くなかった。

「貫け、サンドランス。」

「きゃあああああつ!!?」

何と床、天井、壁の至る所から砂で出来た槍が伸びてきたのだ。

砂で出来ているとは言え、近くにあった黄金の柱が悠々と貫かれて
いる辺り殺傷能力が半端な物ではない事ぐらい分かる。

ハープ・ノートは機動力と体の柔らかさを活かし、何とか回避には
成功した。

が、彼女はいつの間にか壁を背にしてしまっている。

「　　!しまっ・・・あうっ!!」

だが、時既に遅し鋭い斬撃を受けてしまっていた。

それでも傷はまだ浅い方で何とか堪えようとする。

「スナアラシ。」

「く・・・・・・うっ!!」

また何処からともなく声が聞こえ、辺りに砂嵐が巻き起こる。

渦巻く砂は辺りを完全に砂一色に染め、ミソラの視界を奪う。

「なんて砂嵐・・・ハープ、あいつの気配分かる!？」

「ダメ、元々アイツは気配を消すのが得意だから分からないわ!」

「まだやるのか。フツ、呆れた物だ。なら……」

するとスコープピオンは尾を高速回転させる。

周りには砂が集まり、まるで巨大なドリルになってしまっている。時間をかければかけるほど、それは大きくなっていく。

「これでいい加減沈みたまえ！ジエネレイドスティングー！！！」

尾が伸び、確実にミソラ達を狙う。

今までのダメージで、もう避け切れそうにない。

ならばとハープ・ノートは渾身の力で前に立ち、手を掲げた。

「お願い……バリアー！！！」

目の前に障壁が張られる。

そしてスコープピオンの尾を弾く

ハズだった。

「えっ……!!?!?きゃあああああああああああああああああああああああッ!!!!!!」

「うわあああああああああああああああああああッ!!!!!!」

何とドリルが触れた瞬間、障壁はまるで砂のように化していった。咄嗟にミソラは後ろにとび、直撃を避ける。

だが、ドリルを地面に突き刺した衝撃波は余りに大きく、ジャックとミソラの二人を吹き飛ばし、床に転がしてしまう。

「あ……く……う……」

ミソラは電波変換が解けてしまい、もはや呻くことしか叶わない。同じく吹き飛ばされたジャックはもう気を失ってしまったているようだ。

だが、ここで負けてしまつてはクラスの皆が危ない。

再び電波変換しようと転がってしまった自分のハンターに力の限り手を伸ばす。

後、10センチ、

後、5センチ、

後1センチ。

「そうはイカの何とやらだ。」

ミソラのハンターはスコープオンによって蹴飛ばされてしまった。

「……あ……」

「これが現実だ。まあ俺の暗殺記録をここまで塗り替えてくれたのだ。それ相応の功績をたたえないとなア……。アリジゴク。」

スコープオンの一言でミソラの足元にアリジゴクが起ころ。

彼女だけでない、ジャックの足元にもだ。

必死にもがくも、蓄積したダメージでの身体はもう、言う事を聞いてくれなかった。

「折角だ。呻き苦しみながらじつくりと感じるのだな。地獄の砂の冷たさを……」

ミソラは薄れ行く意識でスコープオンの声を利いたような気がした。もう、足は完全に埋まり、唯一動く片手も、もう上がらない。

ズズズと不気味な音で沈んでいくのを、ミソラは感じ取ることも出来ない。

(……スバル、くん……もう、ダメ……)

・
)

ミソラの意識が、そこで途切れた。

第二十二話 孤高の戦士と暗殺者（後書き）

どうも、初めまして？それともお久しぶり？テンペストです。

いやあ、毎度遅れて申し訳ありません！！！！

このまま失踪してしまうのかと思われた方々にご心配とご迷惑をおかけしました事を深くお詫びいたします。

もう僕も高2何でそろそろ受験対策に取り掛からないとヤバイ、というのがリアルな事情。

ですがこのまま投げっぱなしと言うのは嫌なので、続けます。

こんなダメダメ作者ですが、今後ともよろしく願います！

次回の更新は年内にはしますので。

第二十三話 怒り

ハーブ・ノートとジャック・コーヴァス。

双方が去つてから、大広間の前の廊下で激闘が繰り広げられていた。あらゆる所で火花のように電波が飛び散る。

絆を信じる青き戦士と、それを不要とする孤高の戦士の衝突だった。

「たあああああつ!!！」

「オオオオツ!!！」

ロックマンとブライ。

お互いの視線に掛けられたバイザーには、戦うべき相手が常に映されていた。

視界から消えるのは一瞬だけ、次の瞬間には攻撃位置を予測し、刃で受け止めている。

「ふん、平和続きで鈍っているのかと思つたぞ。」

「君こそ・・・ねっ!!！」

ブライは自らの相棒である『ラプラス』を刃状にして振るっている。一方のロックマンは、パワー不足を補うため重みのある剣『ブレイクサーベル』で打ち合っている。

だが、戦況としてはブライの方が有利だ。

何故なら、元々の戦闘力としても向こうが上回っているからである。おまけに例え刃を避けて、一太刀を浴びせても。

「!!電波障壁・・・うわあつ!!!!！」

おまけに脇腹を狙って、ブーメランのように旋回を続ける刃。

「バトルカード、グラビティステージ!!」

「!! 重力波だと……」

そこでロックマンがとった対策は、重力だった。

強力な重力波で、刃も向かって来る拳も全て地面に叩き付けた。

一見勝負は互角のようにも見える。

だが、このまま泥仕合を続けていけば、確実にダメージを負っている分ロックマンが負けるだろう。

それに、ミソラ達が先に行っている以上何時までも燻っているわけには行かない。

「これ以上……君の相手をしているわけにはいかない!!」

「ぐッ!?!」

一気に決着を付けたい、ロックマンは周囲のノイズを集め寄せた。

ノイズはまるで殻になるかのように、ロックマンを包む。

余りに赤黒く、凄まじい威圧感が大地を揺らす。

その中から、赤黒い鎧に身を包んだ破壊の戦士が現れた。

「ファイナライズ! レッドジョーカー!!」

「それが……キサマの、切り札か。」

ファイナライズ

究極のノイズチェンジ。

しかしこれはブラックエースのようなスマートなフォームではない。

赤黒さは、力強さをかもし出し、重圧は装甲は不動を窺わせた。

「見たところ、パワー型のようだが・・・俺を捕らえられるか？」

「やってみるよ。・・・たああああっ！！！！」

そのままロックマンは縦走ごうな右腕を、地面に叩き付けた。

すると辺りに凄まじい衝撃が走ると共に、拳が打ち込まれて地点から罅がくもの巣のように広がっていく。

カルジーン宮殿の、老朽化の所為もあるのだろうが何れにせよつかまるわけには行かない。

ブライの逃げ場は、上空にしか残されていなかった。

「ロックバスター！！」

「ちいッ・・・ぐおおおおおッ！！！！」

飛び上がった一瞬の隙を見逃さず、ロックマンが左手の銃口を向ける。

そこから発射された、凄まじい閃光は無数に襲い掛かっていく。

これならば、電波障壁など無いにも等しい。

ブライは手にしている刃で、防御に手一杯だった。

「ヘビードーンー！！」

「何度も・・・喰らうか！」

着地したところを見逃さず、手を掲げた。

するとブライの体を、すっぽりと影が包んだ。

ブライは上を見上げるまでも無く判断し、押し潰そうとする石像からバックステップで避けた。

しかしロックマンの追撃はこれでは終わらない。

「まだ……まだあつ!!」

落ちてきた石像を、地面に落とすことなくバトルカードで武器化させた拳で殴りつけた。

石像はその拳の威力に従わされ、吹き飛ばされる。

そう、避けるために後方へ飛んで隙だらけなブライの元へ。

「な……ぐあッ!!!!!!!!!!!!!!」

これだけ文字通り重い一撃なれば、電波障壁や剣での防御など皆無に等しい。

壁と石像とにサンドイッチにされたブライは、短い悲鳴を上げる。

そのまま力なく、膝から崩れ落ちた。

「ぐ……キサマ……ッ」

「ブライ、悪いけど僕は先に行く!」

今まで何度も苦杯を舐めさせられてきた孤高の戦士に、ロックマンはそれだけを告げた。

本当はまだ、絆の素晴らしさを説きたかったこともある。

だが今何より心配なのはジャックと、ミソラの安否。ただそれだけだ。

仲間を求め、ファイナライズしたまま奥に進む戦士を、ブライは止める事が出来なかった。

「 ツ!!!!!!!!!!!!!!」

スバルは ロックマンは、我を忘れかねない勢いで暗殺者に飛び掛っていった。

第二十三話 怒り（後書き）

皆様、約一年ぶりのテンペストでございます。

はい、分かってます。「アンタ誰？」ですよ？申し訳ありません、ですから石を投げないで・・・。

大学受験が忙しくなってしまったために、泣く泣く投稿できずに早一年。

しかしこのたび、受験に合格しました！ので、連載再開です！

以前のようなペースに戻るかどうかは分かりませんが、改めてこのテンペストをよろしく願います。

最後になります約一年間、作品投稿できなかった事をお詫び申し上げます！！！！

第二十四話 流星と暗殺者

ブライを力技で下し、スコープオンの待つ最奥部を訪れたロックマン。

だがそこにミソラ達の姿はなかった。

何故なら、スコープオン・デザートが沈めたからだという。

いつも優しく、積極性にかける少年が今、激しい怒りの炎を心に灯し暗殺者に立ち向かう。

「ブレイクサーベル!!」

「甘い。」

急所を狙って、重剣の突きが繰り出される。

しかし接近戦などお手の物である暗殺者にとって、首をかしげて回避するなど造作も無い。

そのままマントの下から両手の鋏を表し、ロックマンの腹部を斬りつけた。

「ソニックカット!!」

「ッ!!」

「スバルツ!!」

鋏による高速の斬撃は、ウォーロックがよく知っている。

その鋭さに早さが加わる事で、切断力は更に上がるのだ。

強烈な斬撃を、ロックマンは腹部に受けてしまう。

だがファイナライズ・レッドジョーカーによる重装甲のおかげでダ

メージ軽減には成功していた。

「効かないよ！フレイム……アッパー！！！」

「な……ぐおあッ！！！」

彼の怒りを表すように、燃える拳が襲い掛かった。

まともに受けるわけにも行かず、両手の袂に巨大且つ長い尾を回して防御に徹する。

しかしレッドジョーカーは攻撃力に長けたスタイル。

そんな防御など無いにも等しい威力で、スコープオン・デザートを吹っ飛ばした。

吹っ飛ばされた暗殺者は、しかし意識を失わずにそのまま壁に溶け込んだ。

「！！ 壁の中に！？」

「奴は地面、壁、天井なんか潜り込めるんだ！気をつける、スバル！！！」

その機動力に、ハープ・ノートもジャック・コーヴァスもやられたのだ。

四方八方から攻撃を加えられるのは、確かに脅威だ。

オマケにこちらから攻撃を当てる術という者は、かなり限定されてくる。

即ちそれは、スコープオン・デザートが先程の一撃から回復すると共に作戦を練る時間を作り出したということでもある。

（油断した……まさかの防御力に攻撃力……！攻撃は避ければ問題はないが、あの防御力はかなり厄介だな……）

冷静に相手を分析し、様子を伺っていた。

スコープオン・デザートは機動力には自身があった。だが今のロツクマンのように、自らの攻撃すら通じない固さを誇っているとなると、話は別だ。

いや、一つだけ防御力など関係ない必殺技がある。しかしいずれにせよ、接近を仕掛けなければならない。

(しかし、重装甲故の隙はある。顔や脇、延髄辺りにこの毒針を刺せば俺の勝ちだ……)

暗殺者は準備を怠ってはならない。

機動力や奥義だけが、必殺の極意ではない。サソリから分かるように、巨大なその尻尾は当然猛毒を含んだ針になっていた。

向こうはF M星出身のウォーロツクがいるから知ってはいるだろうが、スコープオンの毒は強い神経性の猛毒だった。

(……サンドランスで急所を狙い、防御が甘くなっている部分を狙って、毒を打つ！)

作戦は決まった。

後はロツクマンの集中力が途切れるのを待つだけ。

しかし、対するロツクマンの方は躊躇していられない。そう、今にも砂に生き埋めにされそうな仲間達がいるのだ。

何よりここに来たジャツク、そしてミソラが助けを求めている。ロツクマンは、珍しく痺れを切らした。

「うおおおおおおおおおッ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

「おわア!!!?」

腹の底から声を出し、ロックマンは地面を叩きつけた。
凄まじい振動が、このカルジーン宮殿を揺らす。
その振動に耐え切れなくなったスコープピオンは、引きずり出される
かのように天井から落ちてきた。

「見つけたぞスバル！天井だ！！」

「だあああああ！！」

「チイイイイイイツ！！」

空中に居る相手は、隙だらけだ。

相棒の声にしたがってロックマンは左手を差し向ける。

受けるわけには行かないと判断したスコープピオン・デザートは何か足を壁につけて、走り回って回避する。

「逃がさない！！」

「く・・・ッ、スナアラシ！！」

着地したところを狙って、かなり射程の長い火炎放射が放たれた。

バトルカード・マシンフレイルムによるものだ。

だがファイナライズの影響で、今や熱砂を焦がすほどの火力となっている。

丸焼けになりたくない、何とか砂嵐を発生させて炎を掻き消した。
だがこれすらも、ロックマンの狙いの一つだった。

「ダイナミックウエーブ！！」

「む？・・・お、あああああああ！！？」

その場で激しく回転し、大津波を三つ起こす。

大津波は見事、砂嵐すら飲み込んで暗殺者を押し流した。

「ぐ・・・オ・・・」

「今だ！！バトルカード、ジェットアタック！！」

予想外の重い攻撃を喰らってしまった暗殺者の腰は重たい。

当然、それをロックマンが見逃すはずも無かった。

短期決戦に持ち込もうと間合いも詰めつつトドメをさせるバトルカード、ジェットアタックを選択する。

左腕が、鋭い嘴を持った鴉に変形し、激しいを速度を伴った突進を行う。

既にスコピオンは、5m程の間合いに居る。

これならば、回避など間に合わない。

にも拘らず、暗殺者は微笑をたたえていた。

鉄を鳴らすと、地面から人の形を成した砂が盛り上がった。

「……ミソラ……ちゃん……!?」

咄嗟に攻撃を取りやめた。

それは砂ではない、電波変換を解かれた状態にある、スバルの最も大切な人響ミソラだった。

ぐったりしているのか、当分はその重たい眉を開けてくれそうに無い。

そんな彼女が、半分は砂に取り込まれたままスコープオンの前に迫り出されたのだ。

「スバルッ！！ボーツとしてんじゃ……」

「もう遅い。ジェネレイドスティングァー!!!」

「え……わあっ!!」

スバルが、まさかの人質に呆気に取られている隙にスコープオンは回り込んでいた。

そして高速回転させたドリルのような尾を向ける。

何とかして回避するロククマンだったが、油断していた事とレッドジョーカーの機動性の低さから方部分のユニットにその攻撃を受けてしまった。

するとその肩についていた円盤状のユニットが、一瞬にして砂と化

した。

「な!？」

「う、ウソだろ!？」

「この技は、高速回転している尾をドリルにすることで万物を砂塵へと還す技だ。」

それは即ち防御力など無意味という事を現していた。だが大技を放ってくれたおかげで向こうが密着している。ピンチは最大のチャンス、今こそ攻撃に転じる時。

「バトルカード、シンクロフツ……」

「おっと、ミソラと違って彼はどうでもいいのかな？」

今度は地面からジャックが現れた。危うく、必殺の左フックがジャックの首をへし折ってしまうところだった。

「それでいいのだよ。……サンドランス!！」

「うわあっ!！」

強烈な砂の槍が、床と壁から伸びてくる。勿論眉間や首を狙つての鋭い一矢だ。ロックマンは何とか防御して堪えようとする。

だが、ここで突如激痛が体を襲い始めた。

「ぐ、あ……あ……あ……!!!!」

「スバル!!!!?」

そう、ファイナライズした事による反動だ。

おまけにNFBまでも繰り出し、激痛は最高潮。

反動も計り知れず、ロックマンは激痛に悶えて崩れてしまった。

そこに、砂の槍が容赦なく襲い掛かる。

「うわああああ!!あ……あ……あ……」

「貰った!」

最低限の防御はしたつもりだ。

だが小技の連続といえども、やはり連続で受け続けてはダメージは溜まってくる。

一瞬だけ、ロックマンの意識は途切れてしまった。

暗殺者として何度も遭遇した、絶対的なチャンス。過去の経験からそれを見逃さなかったスコージは、一気に速度を上げて間合いを詰めた。

「くうつ、バリ……」

「余計な事はするな。」

スコージが一睨みする。

すると何かが締まるような鈍い音に、二人の苦しげな声が締め上がって来た。

「ぐ、あああ……!!」

「う、あ………!!」

「!! ジャック、ミソラちゃんッ!!」

「スコープオン!! テメエッ!!!!!!」

そう、二人に纏わり付いている砂が拘束具となっているのだ。

その拘束具が、二人を締め上げている。

特にミソラの悲鳴が最も苦痛に聞こえ、スバルの反撃意識は刈り取られてしまう。

この汚い手段の応酬にウォーロックは激昂するが、暗殺者は意にも介さない。

「ウォーロック、キサマなら知っているはずだ。……俺が完璧主義だという事がな!!」

傲慢の毒針が、今ロックマンの急所に突き刺さる

「人質か。……絆以上に、下らん。」

そんな鋭く冷徹な声と共に、スコーピオンの尻尾の先は斬り飛ばされていった。

「な!？」

「え!？」

「ンだと!？」

痛みを感じる前に、真っ先に疑問の声が上がった。そして慌てて、直感で上を見上げる。すると、その邪魔をしたものの正体があったのだ。

「か・・・ああ・・・ごあ、ごわあ・・・くおあ！！！！！」

遂に防御は崩れ去った。

まだ繰り出される無数の蹴りを、その身に受けた。

壁に打たれ、それでもロックマンの攻撃は止まらない。

やがて、スコープオンが押しやられている壁に亀裂が入っていった。

「・・・みんなを、ジャックを、そしてミソラちゃんを！！」

・・・自分勝手な策のためだけに、傷つけたお前は・・・許さない！！

だからこれは・・・僕の怒りだああああああああああ
ツ！！！！！！！！！！」

遂に、渾身の一撃が下され、その衝撃がスコープオン・デザートを貫いた。

衝撃波は壁に伝わり、遂に爆発するかのように破壊された。

それに伴って、暗殺者も力なく吹き飛ばされていく。

とうとうスコープオンは、取り付いていた人間である宿屋「オアシス」の主人と分離した。

「ぐオア・・・アア！！この・・・次は・・・必ずう・・・っ！！！！！！」

そのまま光の矢となつて、スコピオンは撤退した。スバルとブンリしたウォーロックは、清々しそうな目で虚空へ消え去つた暗殺者の方向を眺める。

「かーっ、何が完璧主義の暗殺者だ！俺達にかかりゃこんなもん・
・つてスバル!?」

「う・・・ごほっ!!」

共に敵を撃退した喜びを味わおうとした時だった。

スバルは、激痛の余りに咳き込んでいる。

口から何か、少量の、しかし赤黒いものが飛び出し思わずウォーロックは駆け寄る。

「僕は・・・いい！それより、ロックはジャックとコーヴァスを・
」

「あ、ああ・・・分かつた！」

心配はしてはいるものの、しかしスバルのいう事も最もだ。

仕方なくウォーロックはスバルの指示に従う。

一方のスバルは、部屋の隅に落ちていたミソラのハンターV Gを拾い上げ、彼女の元に向かう。

ウォーロックには悪いが、この役だけは譲りたくなかつた事も少々ある。

「ミソラ・・ちゃん！大、丈夫・・・?」

「・・・う、ん・・・」

愛しい人の、優しい呼びかけ。

それに応えて、ミソラは目を覚ました。

始めは掠れて見えていた視界だが、徐々に安定していく。そして、一気に焦点は定まった。

目の前にいる、大好きな人の傷だらけの姿によって。

「スバルくん！？そ、その傷……！！」

「大した事……ないよ……」

「そんなの嘘に決まってるでしょ！？は、早く手当てしなきゃ……」

「いいから……これ……」

自分の安否よりも、まずはミソラの事だ。

彼女に、先程拾っておいたパープガ気絶しているままのハンターV Gを握らせる。

と、同時にスバルはそのまま地面に吸い込まれそうになった。

「スバルくん！？スバルく

んツツツ！！！！

！！」

スバルは、どうみても重症だ。

腕や体中に傷の跡があるし、何より口の回りがちで少し汚れていた。するとそこへ、ようやく罫を脱出できたらしい、ゴン太が電波変換した姿であるオックス・ファイアとルナがやってきた。

「お前ら！待たせて悪……スバル！？」

「ど、どうしたの！スバル君！？」

「ゴン太君、ルナちゃん！！スバルくんが・・・スバルくんがあああああ！！！」

見れば誰もが無残、としか言いようがない状況。

とにかく、アツフリク地方は典型的な発展途上国であるため医療設備は万全ではない。

そのためウェーブロードを通じて、医療が発達した国の病院に駆け込まなければならなかった。

ウォーロックはジャックをたたき起こした後、スバルに付き添う。

そのまま万全な状態であるオックス・ファイアがスバルを抱きかかえて病院に連れ込んだ。その後を追ってミソラも電波変換していく。

「どうなるんでしょうか・・・スバルくん・・・。」

「アイツ・・・これ以上、体が悪くならなけりゃいいんだけどな・・・。」

後から駆けつけたキザマロも、目覚めたジャックも心配そうに虚空を見詰めていた。

幸い、犠牲者という犠牲者は居ない。宿屋の主人も、大した怪我はない。

ただ折角の撮影が台無しになってしまったのだけは少々悲しいかと思いきや、コーヴァスは何かを探していた。

「？何してんだコーヴァス。」

「いや、スコープイオンの野郎の事だからこの辺に・・・あった！」

コーヴァスは壁に埋まっていた何かを取り出した。
それは、どうやらカメラのようだった。

某国某所

「何！？失敗シタビガト!?!」

「すまん、UFO……。」

「又ウ……、マ、生キテ帰ツタノナラソレデイイビガ。」

UFO・インベーターは仕方なさそうな目線で失敗したスコープピオンを見た。

これまで彼が失敗知らずと言うのは、既知の事だ。

その彼が失敗したのだから、これは責める事などで気はしない。

が、問題はこの後の対策だった。

「ぬう、中々困った事になったのお。」

「ソウビガネ。」

傍にいたオリオンも、顎鬚を撫でながらはあとため息をついてしま
う。

「・・・ココハーツ、後手二回ルトスルビガヨ。」

「後手・・・とな？」

「用ハ一旦様子見スルビガヨ。」

UFOは、的確な一手を打った。

この指示は、後に重要な駆け引きとなるのである

第二十四話 流星と暗殺者（後書き）

また更新しましたテンペストです。

今まで投稿できなかった分、頑張るつもりです。また失踪するんじゃない、何て思っている方も居て当然ですが、頑張ります！

さて、今回でスコピオン編は終了です。実はコイツ、私がボスキヤラコンテストに送ったものがモデルとなっております（笑）

今回は新たなブラックホール構成員との対決編！・・・ではなく、とある騒動を片付けてからの学園生活編になります。

え？どうせスバミソ路線にするんだろって？・・・何故、バレた・・・！！？

で、では次回もお楽しみに！！！！！！

・・・って、もうじきテスト期間だったりする・・・（

汗）

第二十五話 新たな仲間

目が覚めると、飾り気の無い天井が視界に飛び込んできた。何とというか、清潔感に溢れているようにも感じる。

見たことのある部屋。ここはWAXA内にある医務室だった。スバルは、痛みを堪えながらも何とか肘を杖にして寝かされていたベッドから上半身を起こした。

「よっ、お目覚めはどうだい。」

「あっ、暁さん！」

そばの椅子にはシドウが腰掛けていた。

「どうやら、スコープオンとの戦いの後病院に担ぎ込まれたらしい。すると彼のウィザードでもあるアシッドが実体化し、まるで説教するかなのような口調で言葉を紡いだ。」

「星河スバル。貴方はファイナライズの影響で体に支障をきたしています。」

「だな、あの時はビビッたぜ。」

「あっ、ロック！ロックは平気なの？」

「ダメージの全ては貴方に移転しているのです。つまり、ウォーロックは無傷です。」

スバルは、アシッドの一言に胸を撫で下ろした。

「が、心配をかけさせたとして後にウォーロックからもキツイ一言を

貰ったのはこの後の話。

話も大体理解してくると、病室のドアがやや乱暴に開けられた。

「スバル君！もう大丈夫！？」

「み、ミソラちゃん！もう平気だよ。」

開け放たれた扉から飛び込んできた、ソプラノボイス。間違いはない、ミソラだった。

相当血相を変えて、オマケに汗だくでもあった。目がさめたとの報せを聞いて急いで駆けつけてくれたのだらう。

本当はまだ体は痛んでいるが、心配を掛けたくないのだからここは嘘でも笑顔で返す。

「そんなワケないだろ、まだ体は痛んでいるはずだ。」

「……………スバル君、嘘ついちゃダメでしょ……………？」

「え！？わ、ちょ、曉さ……………ん！？」

だがそれは、シドウの一言でバレてしまった。

瞬時にミソラの目元が陰り、声も非常に低いアルトになってしまっている。

恨めしい気分であったが、当の本人は「テヘッ」と舌を出している。

非常に腹立たしい事この上ない。

「じゃ、俺はお邪魔みたいなんで退散するよ。」

「良い判断です、シドウ。」

何と、彼女から謝ってきたのだ。

それも彼の胸に顔を埋めて、嗚咽までして。

徐々に胸板に広がる、涙の濡れた跡。しかしスバルからすれば、彼女がどうして謝り、そして泣いているのかがよく分からなかった。

「ど、どうして泣いて謝るのさ!? ミソラちゃん、何も悪くないじゃない!」

「……ううん。だって、私足引つ張っちゃったじゃない。」

どうやらそれは、あのスコープオンとの戦いの事らしい。

あの時、ミソラはスコープオンに手も足も出さず倒されてしまったのだ。

それだけならまだしも、今度はスバルを苦しめる人質となってしまうた。

その事に、責任を感じてしまっているらしい。

「ゴメンなさい、ゴメンなさい……!」

「……」

もし、あの時人質になっていなかったら彼を苦しめていなかっただろう。

いやそもそも負けてさえいなければ、ブライとの戦いにも加勢にいられたかもしれない。

自分の無力さをかみ締め、ミソラは泣きじゃくっている。

責めているのだろう、自らの無力さで傷つけてしまったと思っ込んで。

スバルはそんな心を察し、優しく彼女の肩に手を置き、優しく距離を置いた。

「何だそんな事。全然問題なんかじゃないよ。」

「そ、そんな事って……!!!!」

彼女の顔は涙の所為で、腫れていた。

だが目は、驚きの余り見開かれている。それでもスバルは、優しい微笑みを崩さない。

「だって、結果としてミソラちゃん達を守れたんだしさ。」

「そ、それは……でも、でもっ」

「だからさ、普通は『ゴメンなさい』じゃなくて『ありがとう』でしょ?」

そういつて、スバルははにかんだ。

彼はずるい人、ミソラはそう思わざるを得なかった。

彼女の心には、消しがたい罪悪感が広がっている。けれども彼は、それを彼女が思っているものとは全く違う方法で消してくれたのだ。また力なく彼の胸に寄り添って、ミソラは呟いた。

「……あり……が、と……」

「どづいたしまして。」

スバルは優しくミソラの頭を撫でた。

彼女にとっていいのか悪いのか、不思議と先程の罪悪感は消し飛ん

でいた。

彼の優しさに、何時までも甘えてしまっていてはいけないとは分かっている。

けれども、許されるのならこのまま一緒にいたい。

ミソラはただ、彼の胸板に、自らの重さの全てを預けていた。

ビーンツ！！ビーンツ！！！！

『緊急連絡！スピカモールにて電波ウィルスの大量発生！原因はノイズと推測！』

「！！！！」

その時、警報がなった。

あのメテオG事件以来余りノイズ事件の被害は聞いては居なかったがそれでもやはり根強く残っているようだ。

このままではスピカモールに来ているお客の人達が危ない。

スバルは痛みを堪えて、ベッドから降り立った。

「その体で行く気！？無茶よ！！」

「無茶でも何でも・・・行かなきゃ！！」

それが僕らの仕事だ、とスバルは言う。

確かにサテラポリス遊撃隊の一員である彼にはその義務は伴う。

けれども、体を壊しているとなれば話は別だ。

これ以上無茶させたくないミソラは、スバルの腕を掴んで離さない。

「ダメ！！私が行くから！！」

「僕も言ったほうが確実にだよ！だから……」

「いや、二人とも待機してよし。」

するとそこへ、タイミングを見計らってかシドウが現れた。両手にはお見舞いなのか、大量のうまい棒が抱えられている。

「ちょ、何言ってるんですか！」

「スピカモールが危ないんですよ!?!」

「分からないのか？手は足りてる、って事だ。」

するとその一言で、スバル達は納得してしまった。

手は足りてる、という事は即ち対処に当たってくれている『仲間』が居るとい事だ。

だがジャックやクインティア、ゴン太だけで事足りるのだろうか？聞けば規模はかなりのものだとも聞く。しかし、シドウは焦らずにモニターを映した。

「何なら見てみるかい？新しい仲間を。」

「えっ!?!」

新しい仲間が出来たというのか。

二人はシドウが出てくれたスクリーンを食い入るように見詰めた。そこには、大型のショッピングモールであるスピカモールという名の施設破壊に勤しんでいるウィルス達の姿があった。

「アングー・・・ラツシユ!!!」

迫り来る、メットリオを初めとした電波ウィルスの数々。
オックス・ファイアは燃え盛る拳を連続で地面に叩きつけ、ウィルスを激しい殴打と火柱に巻き込ませた。

「へへッ、どんなもんだ・・・」

「!!! ゴン太、油断するな!!!」

目の前の敵を消し去ったことに一安心するゴン太。
しかしオックスの警告は、既に時遅しというものだった。
背後から現れたプルミンらが、一斉に波状の水を放つ。

「があ!!!」

「ゴン太!!!」

元々火属性であるが故に水属性の技は大の苦手。

それが束となって降りかかってきたために、頑丈さがウリのオックス・ファイアも崩れ落ちてしまう。

いや、連戦である事も膝を突く要因になっていたのだろうが。

対象が弱まっていると判断し、今度は電波ウイルスの群れの中からペンギラーが突っ込んでくる。

「ゴン太、逃げろおおおおおおおッ!!!!!!!!!!」

オックスが叫んだ、まさにその時だった。

「ウオオオオオオオオン!!!!」

聞き覚えのある、咆哮が響き渡った。

そして咆哮の持ち主は歯向かってきたペンギラーをあっさりと切り裂いてしまう。

切り裂いた張本人は、華麗にオックス・ファイアの後ろに降り立った。

「グルルル……この俺達が来てやってんのにへこたれてんじゃねえぞ!」

「わ、悪いな・・・ウルフ・フォレスト!」

そう、見覚えのある狼のようなフォルム。森林を思わせる色合いに、鋭い爪と牙。

間違いない、今でもコダマ小学校で庭師をやっているはずの「尾上十郎」とFM星人の「ウルフ」が電波変換した姿だった。

「さあつ、ウイルス共!俺の、俺の血を静めてくれええええええッ
!!!」

「・・・こんな調子でクビになんねえかな・・・。」

相棒の、相変わらずの好戦的な性格にウルフは思わずため息を漏らす。

しかしいざ動けば、彼の素早さに並大抵の電波ウイルスは付いて来れない。

素早さに目が行き、ガードが甘くなり、そこを狙って爪での一閃が繰り出される。

「ウオオオオン!!どうした、この程度じゃ・・・ってうお!？」

「ホレ見る!調子に乗るから、今度は火属性ウイルス大群のお出ま
しだ!」

今度はアカシーサーやフレイマー達が現れる。

いずれも、火属性ウイルスを代表する者たちだ。

こうなると木属性であるウルフ・フォレストの動きも止めざるを得ない。

「オイラに任せるブクー!!タイダルウェーブ!!」

更にそこへ、また聞き覚えのある声とともに大津波が押し寄せた。どこか間の抜けた声の割りに繰り出された大津波の規模は、凄まじい。

当然水属性が弱点である電波ウィルス達は、その押し寄せる水の壁にただ洗い流されていった。

「無敵のキャンサー・バブル、ただ今参上ブク！」

「ケツ、たまには役に立つじゃねえかキャンサー！」

「たまにはとか何ブクか！！！」

今やミソラの付き人兼雑務担当のキャンサーだった。

なるほど、彼ならミソラを守りたいと志願してくるのも無理もないだろう。

「余もいるぞい！！フォールサンダー！！！」

老人でありながら、偉そうな口調。

それとともに雷が幾多にも降り注いできた。

雷は電波ウィルスの大群に飛び込み、弾けて消滅させていく。

それは王冠を被った、骸骨のような王の姿。クラウン・サンダーだった。

「何だ、クラウンもいたのか！」

「ウルフもか。どうやら、今日から同志という事かの？」

「そーみたいブクね。」

同志、彼らはどうやら仲間らしい。
いや、元は同じFM星人であるのだがそれだけではこの組み合わせは分からない。

「皆さん！さつさと電波ウィルスの対処に当たってください！キグナスフェザー！！」

今度もまた聞いた事のある声だ。

どこか陰りを帯びた、現在WAXAで電波変換について研究しているはずの科学者。

そう、宇多海深介うたがいしんすけと彼のハンターV.Gで再構築されたキグナスとの電波変換による姿、『キグナス・ウィング』だった。

「だな。さあつ、ウィルス共！もう一暴れさせてもらうぜえええええつー！」

キグナス・ウィングから注意が下された。

本職を思い出したウルフ・フォレストはそう言って、またウィルスの軍勢に突っ込んでいく。
動きが非常にアグレッシブだ。

「・・・やれやれ、この調子で大丈夫かのお？」

「ウルフもとんでもない相棒を選んだでブクね・・・。」

「ああ・・・。ま、俺としちゃ悪い気はしねーんだがな。」

「ブロロオオオオ！さつさと俺達も暴れようぜー！」

電波体四体が会話を終えると、戦闘が再開される。舞われる白鳥の羽に、冠に付き従う髑髏が敵を打ち砕いていく。接近してくる電波ウィルスにしても、強烈な拳とそして鋭い鋏で雑魚と化していった。やがて、この騒動は10分足らずで終息するのだった。

「……と、言うわけで彼らが今日から新・サテラポリス遊撃隊の仲間だ！」

ここはWAXA内にあるサテラポリス本部。何が『というわけ』なのかはよく分からないまま、シドウは新しい仲間である二人と四体を紹介した。改めてみると、キグナスにキャンサー、クラウンとウルフといった

個性的な面子だ。

「よお、ボウズ！アレからスゲエ活躍ぶりだつてな！」

「尾上さんこそ、さっきの戦い凄かったですよ！」

「ふん、凄いのは余の雷じゃ！」

久しぶりの会話に割り込んできたのは、クラウンである。

そう言えば、彼の相棒である幽霊のクローヌ14世の姿が見えない。FM星人は取り付いた人間のデータを記憶して、自力で電波変換できる能力はあるがと言つて相棒が居ない事に不信感を無視できない。

「オイ、クラウン。あのユーレイはどうした？」

「霊じゃからここにつれてこれるはずもなかるう。」

「・・・そりゃ、そーだな。」

確かにそうである。それにしても、クローヌはどうかやら地縛霊の扱いらしい。

「で、宇多海さんも戦つてくれるんですね！」

「研究の傍らだけだね。僕にも電波変換できるのなら、この力は役に立てたいし。」

嘗てFM星人であるキグナスに取り付かれ、大勢をお陀仏にさせてしまいそうになたアマケンの事件。

それは人を疑い事への戒めになつたらしい。
あれ以来の宇多海の積極さ、そして変わりようは誰もが関心を抱いていた。

「それにして、何ていうか意外だね。」

「そうね。何でキャンサー達は志願したのかしら？」

ミソラとハープは当然の疑問を抱いた。

宇多海理由は納得出来るが、そのほかの連中となれば話は別だ。
確かに電波変換出来て、しかも地球を破壊したくない者達であれば戦力として心強い。

それでもこの面子に、到底纏まつた目的があるとは思えなかった。

「俺あ勿論、戦つたためもあるが学校の子供達を守るのも仕事なんだな。」

「オイオイ十郎よお、素直に『スバルが心配だった』って言やあいいじゃねえか。」

ウルフのツツコミに、コホンと咳をならした。

「で、キャンサー達は？」

「「ミソラちゃんを守るため!!」」

「……………え、ああ、ありがと……………」

そういえば、クラウンとキャンサーはミソラの熱狂的なファンだった。

キャンサーに至っては彼女の付き人でもある。恐ろしいほどまでに、納得できる理由だった。とは言え、協調性が欠けているわけではないので安心は出来る。

「とにかく、皆よろしくね！」

「……こちらこそ！」

スバルの挨拶に、全員が返してくれた。

ウォーロックやハープら元侵略者側から見れば、この四体のFM星人も以前なら絶対に言わなかったセリフだと思っていた。

この地球に来て、彼らも変わったらしい。しばらく退屈しなくて済みそうだ、とウォーロックは呟いた。

「ホントは、後二人ほど捕まえたかったんだけどな……。」

「二人？」

一人は恐らく、ブライことソロだろう。

しかし馴れ合いを嫌い、孤高である彼は絶対に参加しないだろう。以前勧誘したものの、返り討ちにあったこともある。

時が経った今でも、共闘は期待しないほうがいいだろう。

もう一人が誰なのかは分からなかったが、少なくとも電波変換できる人間だろう。

「とにかく、皆今日はお疲れ様。」

「本日はこれにて解散！……の前にスバルとミソラは少し残っててくれ。」

「あ、はい。」

クインティアとシドウの解散宣言に、遊撃隊のメンバーがゾロゾロ持ち場へと帰っていく。

とは言ってもクラウンとキャンサーはミソラを待っているのか、動こうとしなかったが。

どうやら聞かれて困る話というわけでもないらしい、二体の電波体がいるにも関わらずシドウは話を始めた。

「さて、ミソラに渡しておくものがある。」

「渡すもの？」

「ああ。これだ。」

シドウは自分の持つハンターV.Gに何かを打ち込んでいる。

するとその数秒後、ミソラのハンターV.Gに何かのポップアップが表示された。

それを開くと、中には『ノイズリジェクター』と表記されている。

勿論何なのかは分からないので、クインティアとシドウの説明が入った。

「ヨイリー博士の新発明、ノイズリジェクターよ。」

「これがあれば、ノイズ率100%を超えない程度なら自由に活動できる。」

「って事は、今までスバルくんしかいけなかった場所でもいけるんですか!？」

「ああ。他の仲間達にもすでに渡してある。」

それedyouやく合点が行った。

先程のスピカモールでの電波ウイルス事件の原因はノイズだったはず。

ノイズは電波体を苦しめる存在。つまり、並みのウィザードや電波変換した存在では活動できないのだ。

ロククマンは『エースPGM』と『ジョーカーPGM』のおかげでノイズに対する被害を受けない。

あのメテオG事件から数ヶ月たった事で対策は出来たようだ。

これのおかげでウルフ達は活動できた、というわけだ。

「ただ、ノイズウェーブなどは気をつけてください。」

「分かった！それじゃ帰ろ、スバルくん！」

「え、あ、うん。」

ミソラは、スバルの腕を取りながらその場を後にした。

「それにしても、大丈夫かしら……。」

「スバルの事か？」

「ええ。ファイナライズの影響で倒れたって聞いたから……。」

「何、アイツは死にやあしない。」

「どうしてそう言えるの？」

「ヒーローは不滅、だからだ。」

「……貴方って人は。でも、それでも心配ね。」

「?どうしてだ。」

「だって。」

クインティアが指差した先。そこには。

「ってかキサマア!!何故、ミソラちゃんとイチャイチャしておるのじゃ!?!」

「え!?!あ、いやこれは」

「知らないの?私とスバルくんはカップルなんだよ」

「何!?!?!キサマ、ミソラっちを誑かしていたでブクかあ!?!」

「た、誑かすってそんなんじゃ……」

「「問答無用、表に出るオ!?!」」

「っっしゃあ、スバル!暴れるぜ!?!」

クラウンとキャンサーから決闘を申し込まれているスバルの姿があったという。

第二十五話 新たな仲間（後書き）

HAHAHA、長くなっちゃったZE

イラツと殺意が沸いてしまった方ゴメンなさい、テンペストです。

サテラポリス遊撃隊に、嘗てのFM組参戦！まあ、宇多海さんはいろんな意味で違います。

それにしてもキャンサー、ウルフ、クラウンは大好きです。アニメ版で一気に好きになっちゃいました。

特にスタッフのクラウンの扱いが色んな意味で凄いです。

さて、次回は学校編です。え？映画はどうなったかって？それを次回で明かします。

ではお楽しみに！

第二十六話 労い、そして復活

某国某所。

ここは人知れずの場所にある、ブラックホール基地。

ブラックホールとは、何も宇宙の墓場と恐れられるあの黒き穴ではない。

六体の電波体で構成された、闇の星商社を指すのだ。

あらゆる星をその圧倒的力で侵略し、そしてその星や民を土地や奴隷として売買している組織。

だからこそ、『ブラックホール』と呼ばれたのだ。

そのリーダーである、UFO・インベーターは現在ドラマを見ている。

『この人は私のものよ。貴方とは終わったの。オーツホツホツホ！』

『そんな……どうして……酷いわ……！』

「……ドウシテビガ……酷イビガ……ウ、ウウ……」

UFOは現在、響ミソラ主演のドラマを見ていた。

どうやら彼も、何だかんだ言っているうちにミソラのファンになってきているようだ。

その証拠に見よ、嘗てのFM星でアンドロメダに並ぶ電波兵器のこの溢れかえる涙を。

「このクソがああああ！成敗してくれるわあああああ……！！」

「オツ、オリオン。一緒二見ルデビガ？」

「うむ。」

隣には、実力的にこの組織No.2の実力を持つ電波体であるオリオンが居座っていた。

彼もまた、響ミソラの熱狂的なファン。

この二人、よく見てみるとまるでキャンサーとクラウンのようだ。それはさて置き、ドラマはとうとうクライマックスを迎えている。

『こんな女に貴方は渡さないわ！私の怒りはエベレスト級！可愛さあまつて憎さ百倍、貴方の居ない世界なんて、滅ぼして見せるんだから！！』

さすがは国民的アイドルといえよう。

歌って、踊れて、演技も出来て。この二体の電波体のハートをがちりと掴んでいた。

『次回、惚れたら地獄、夏の乱！お楽しみに……………』

最後の次回予告を終えると、UFOはDVDを取り出してケースに収納する。

それらを片付ける作業をしていると、オリオンが訊ねてきた。

「で、あれからの進展はどうかの？」

「既二、我々ノメンバー四人ガ倒サレテイルビガ。ココイラデ、ロツクマンヲ始末シナイト。」

「そっじゃなあ……………」

倒されているといっても、全員何とか帰還している。

だがまさか失敗という二文字が大嫌いなスコープオンまでしくじる有様だ。

勿論自分達が負けるとは考えてはいないが、このまま被害を拡大するのにも心望ましくない。

「ハア……一気に侵略できるような兵器でもあればのお……。」

「ソナ事、簡単ニ出来ルワケ……アルカモビガ。」

「ややつ！それは本当かのお？」

そんな事出来るのなら、とっくの昔にやっている。

けれども何かヒントがあるかもしれないと重い、スーパーコンピュータ並みの頭脳を持つUFOの脳内は目まぐるしく動いていた。そして一つだけ、それが引っかった。

「ウム。シカシ、ソレニ八時間ガカカルビガ……。」

「なら、しばらくは準備に回ろつかの。」

「ソジャ、続キヲ見ルデビガヨ！」

そういうと、二体の電波体はまたソファに座って続きを見始めた。それから約十分後、フェニックスとアクエリアスの怒号が施設全体に響き渡ったという。

一方その頃、コダマタウン内のある料理店

「では、文化祭の成功及び映画で金賞を取った我がクラスに！！」

『『『かんぱーい！！！！』』』』

白金ルナの音頭で、この料理店に来ているクラスメート達が飲み物を一斉に口にした。

そう、セリフから分かるとおりこれは文化祭が終了して直後の事だ。俗に言う、打ち上げと言われるものである。

あの撮影も成功し、その甲斐あって見事金賞を収めた。

誰もが清々しく、飲み物や運ばれる料理を口にする中少しため息を漏らす人物が一人。

「……………まさか、この間の戦いがビデオに撮られていたなんて……………」

スバルは机に突っ伏していた。

実は先日のカルジーン宮殿内での闘いは、全て録画されていたのだ。勿論スコープオンによって。

どうやら彼は、完璧な暗殺を自らの手で確認し、その華麗さに浸るという気障な部分があったようだ。

おかげで撮影は何とか順調に進んでいたものの、入院していて全く聞かされていなかったらしい。

後はちょこちょこ撮影を行ったぐらいだが、改めてみると恥ずかしさがこみ上げてくる。

「でもいいじゃん。もうスバルくん＝ロックマンなんて知られてるし。」

「良くないよ！」

「しかも、結果的にスバルくんがミソラちゃんを選んじやってますからね。」

「世間に知られたら、大スクープを通り越して大スキャンダルなこりゃ。」

スバルの憂いごとは、まさにキザマロとジャックが解説したとおりだった。

もうお分かりだろうが、ミソラは国民的アイドル。

そんな彼女と付き合っていることがバレれば、スキャンダルなど生ぬるい。

きつとファン達から血祭りに上げられてしまうだろう。脅迫の電話すら掛かってくるかもしれない。

「安心なさい、スバルくん。」

「委員長？」

「そもそも私たちの映画は世間には非公開なもの。スキャンダルまでには至らないわ。」

意外にも、ここでルナがそう言って来た。

確かに文化祭は学校の生徒が楽しむものであり、世間がどうこう言うものではない。

警備体制も万全だったし、世間に流出という事態はまずないと見ていいだろう。

しかし、スバルはそれよりもルナの言葉の方が意外だった。

何故ならば撮影に望むまではあれだけスバルとの共演を熱望していたのに。クライマックスだって、特に変更もせずスバルがミソラを選んでハッピーエンドだ。

「な、ならいいんだけど……。」

「そうよ。あ、私ちょっと電話が入ったから外出るわね。」

ルナはスバルに言葉の続きを許さずにそのまま外に出た。

ちよっとだけ覗けたその横顔。

どこかスツキリはしているものの、まだ悲しいものを残しているかのようだ。

「スバルくん。」

「あれ？モードじゃない。どうしたの？」

すると突如、小動物のような声が聞こえた。可愛らしい声ではあるがスバルからすれば、ミソラには程遠いと感じる。

隣を振り向けば、その正体がすぐに分かった。

ルナのウィザードである、モードだった。どうやらウィザード・オンしてきたらしい。

「ルナちゃんについてなくていいの？」

「それよりも、スバルくんに聞いてほしい事があるんです。」

「僕に？何なの？」

「スバルくん、どうしてルナちゃんはそのエンディングにしたと思いますか？」

ミソラの質問に答えずに、モードはそんな質問を投げかけてきた。思わずスバルはえ、と声を漏らした。

あれ以上撮影を引き伸ばす事が出来なかったから？いや、取り直す時間は十分にあった。

ならばどこか体の調子が悪かったのか？違う。撮影中に三人の下僕相手にいつもの調子で怒鳴っていた。

だったら 踏ん切りがついた、のか？

「多分、スバルくんが最後に考えているものです。」

「・・・そ、なの・・・」

「ルナちゃん・・・。」

確かにそれだったら、あの表情も撮影も納得できる。

彼女なりに悩み、そして出した答えだ。

だからこそ周りには顔に出さず、自分の中で納得させるのに必死なのだろう。

考えていたスバル本人は少し戸惑っていたが、ミソラはやはりという顔をして見せた。女の勘は、やはりよく当たる。

二人とも理由をとりあえずは理解している。それを踏まえた上で、モードが本題に入った

「だから、お願いです！ルナちゃんとは仲良くしてください！これまでどおり！！」

「・・・うん。勿論だよ。」

「私も、ルナちゃんとはいつまでも友達だから！」

モードが、必死の声と表情でそんな事を言ってきた。

スバルとミソラにとつてすれば愚問だった。

ただルナの方も、せめて友達で在り続けたいとは願っていた。でなければ、モードがこんなに頼み込む事は無いだろう。

それを知って、二人は安心した。

「ありがとうございます・・・！では！」

モードも非常に安心した顔をしてウィザード・オフした。

彼女も、心配だったのだろう。恋と友情とに板ばさみになっている、自らの主に。

と入れ替わりになるような形でルナが戻ってきた。

何気ない表情。でも内心ではどこか心細いかもしれない。それを『友達』として埋められて上げられるなら。

スバルとミソラはどんな努力をも惜しまないつもりだ。

「……………？何よ貴方達、そんな優しそうな顔をして。」

「何でもないよ。」

「ルナちゃん、何かあったら遠慮なく言ってね！」

「????？」

二人の返答に対してルナは頭に『？』を浮かべている。

それでも、顔はどこか安心していているような顔つきになった。

確認できた二人は互いに向き合って微笑む。

と、ここでルナは机をバンと叩いてクラスメート全員を注目させた。

「みんな、ご苦労様！さてステキなお知らせがあります！！！」

だがそれは怒りなど負の感情の類ではない。寧ろ晴れ晴れとしているものだ。

そして手にしているハンターの映像を見せた。

最も近くにいるスバルが、その画面に映っている文字を読み上げる。何かの招待券のようだ。

「え〜と…………『映画、お見事でした。最優秀賞を射止めた貴方達には賞品としてよかよか村温泉招待券をプレゼント』…………ってえ

え!？」

「よかよか村って言ったら温泉の桃源郷!？あそこ私でも言った事
ないよ!？」

よかよか村というのは二百年以上も前から続く老舗の温泉がある街
だ。

観光スポットとしても有名で最低限のテクノロジーしか用いていな
い、昔からの風情を残し続けている伝統ある街。

温泉も効能が凄まじいという。肩こり、腰痛、疲労。受験生の味方
である。

美肌にも優れており、まさに最高の温泉と名高い。

「そつよ!今度はそこに修学旅行に行く事になったの!」

『『『イエーイツ!!!』』』

彼らは盛大に嬉しさという名の雄たけびを上げた。

修学旅行は今から一週間後。ミソラもこれから事務所に休暇届を出
すところだ。

彼女だって立派な学生。しかも中学生は義務教育。正式な届けを出
せば事務所も拒めないだろう。

スバルは彼からみんなとの思い出作りに思いをはせていた。

「・・・・・・・・ここは・・・・・・・・どこだ・・・・・・・・」

「又ウ・・・・・・・・長く・・・・・・・・眠っていたような・・・・・・・・」

二対の電波体は目を覚ました。

一体は戦車のような姿をした、將軍のような姿。

もう一体は業火の輪を背負った、威圧感溢れる電波体。

「・・・・・・・・オリガ、か・・・・・・・・」

「おお、アポロンさま！！ご無事でしたか！？」

戦車のような電波体は、どうやらもう一体の部下らしい。

その名は『オリガ・ジエネラル』。この世界とは並行世界、つまり
パラレルワールドに存在していたはずの、滅びた『ムー大陸』の電
波体。

そしてその主である『アポロン・フレイム』。彼らは嘗て電波の神
と呼ばれたラ・ムーにより生み出された史上最強の電波体と名高い。
プログラミングされた破壊衝動に従い、自らが滅ぼした世界とは別
の平行世界にまで手を出そうとした。

だがその野望も、ロックマンによって打ち砕かれている。

特にアポロンはその後シリウスによって復活させられているため、これで復活するのは三度目。

「……無事、といわれると返答に困るな。」

「は、そうですね……。」

折が・ジエネラルは主であるアポロンの命令には一言一句忠実だ。それは彼がただ圧倒的に強いからだけではなく破壊衝動の塊といわれておきながらも、同属に対する思いやりがあるからだ。

そんな彼のたつた一つの憂いが回りに自分が従えていた『IF』達がない事であろう。

「……ドウヤラ、アマリ良い目覚メデハナカッタミタイビガネ。」

「……何奴!？」

暗がりから声が聞こえた。

身構えるオリガ・ジエネラル。最大級ともいえるその重量とパワーで一気に突進していきそうだ。

対するアポロン・フレームは燃える炎の輪を背負っているにも拘らず冷静である。

彼らの体制にもかかわらず、蘇らせた存在であるそれは出てきた。

「我が名ハ、UFO・インベーター。コノ地球ヲ侵略スル者デア
ルビガ。」

「どうやら……貴様が我らを復活せしめた、と……。」

「ソノ通り。残留電波ヲ拾ッテ再構築スルノハ、骨ガ折レタデビガ

三。」

復活経験のあるアポロンは事を冷静に受け止めていた。嘗て消滅してしまった存在を復活させるなど、アポロンにはない芸当だ。

それをこのUFOが出来るということはこの電波体は自分より格上。すぐに戦いを挑むのは得策ではない、と目でオリガにも伝える。

「それで、何故に我らを蘇生させた？」

「是非、我ラノ仲間ニナツタホシイビガ。」

「仲間……だと？」

「おれの、アポロンさまに向かって無礼千万！！」

今にも突進をかましそうなオリガを、主は手で制した。

先刻シリウスに復活させられた、とは記述したもののその際は手駒扱いだ。

故に気持ちのいいものでもない。ところがこの者は仲間になれという。

「我ラ八星ヲ乗ツ取ル『ブラックホール』。ツマリ、我々ガホシイノ八星ダケ。」

「侵略の際、邪魔な人間は我らが滅ぼしても良い……と？」

「理解ガ早クテ結構！才互イノ利益八満タサレルビガ。」

アポロンは思案した。

確かにこの男の言う通り、自分達はただ破壊の限りを尽くす存在。人間を屠り、殺し、滅ぼす事に快感は覚えないものの使命感が存在する。それを満たせるというのだ。

UFO達ブラックホールも、人間がいなくなったあとの星は売り飛ばせばいい。まさにお互いの相互利益が満たされる。

「・・・我は、仁義を無視する程愚かではない・・・」

「ゴ協力、感謝スルデビガ。・・・デ、才前ハドウスルビガカ？」

「・・・我輩はただ、アポロンさまに従うのみ。」

双方の合意が得られた。

まずは同盟の発足として、握手を交わそうとする。

訝しげに見るアポロンだが、UFOは無理矢理その手を取って握手した。

「ンジャ、初仕事八来週デビガ。シツカリ、準備シテオクデビガヨ」

機械的な口調で、尚もUFOは狂気を滲ませた。

第二十六話 労い、そして復活（後書き）

どうも、お久しぶりです。はい、石を投げないで。

ちよっと色んな意味で時間が押してきているので残念ながら文化祭はカットです。

ですが次回の修学旅行ではスバミソ路線・・・なのかなあ？

さて、2では散々梃子摺らせてくれた凶悪電波体二体も登場です。

え？とあるフラグが経ったんじゃないかって？正解です。

次回は懐かスイ人達が登場しますよ。では、感想お待ちしております。

第二十七話 よかよか村

季節は秋。あの暑かった日差しが秋風によって何処かへ流れていく。涼しいそれは、少年少女達の頬を撫でた。

頬を撫で、髪を揺らした風は勢いを増して彼らの背後に聳える山々の紅葉をを揺らした。

ざわざわと鳴らされる山の音。紅葉は風に舞い、色とりどりに彼らを出迎えた。

風情のある温泉の町、よかよか村。スバル達は修学旅行に来ていた。

「うわあ〜！ここがよかよか村かあ……。」

「『いい旅電波気分』でも取り上げられていた大人気スポットよ！」

「この間の『湯煙殺人事件』での舞台にもなってたよなあ！」

「ロツクくん……そういう事は言わない方がいいよあ〜。」

ハープとは180度違う紹介文にミソラが突っ込んだ。

確かに様々な番組やドラマでのロケ地にはピッタリなのだろうが。

しかし大きく口をあけて息を吸い込むと、その味は都会のものとは明らかに違う。

排気ガスなどこの時代における都会はほぼゼロと言っているいいが、酸素を作り空気を浄化する森を有しているこのよかよか村の空気は格別だ。

「でもここすごくいい！まったり出来るって言うか……。」

「癒されますよね」

「空気中のマイナスイオン、豊富！」

キザマロとペディアも気に入ったようだ。

更にはウェーブロードなどの環境も整っているらしく、ウォーロック達電波生命体はすぐさまそれを駆け巡る。

「ここなら山の幸も大量そうだぜ！」

「・・・お前、メシのことしか頭に無いのな」

「それは今更と言うものよジャックくん」

ゴン太の発言に対するルナの突っ込みは適切であると言えよう。彼はもう中学までの付き合いなのだ。今更ということにもほどがある。彼女の発言にジャックも納得したらしくそれ以後何も言わなかった。言えなかった。

「それじゃここで宿泊施設に向かうぞ！　そこで各自部屋に荷物置いたら自由時間だ！　夕食には遅れるなよ！」

ここで引率であり、担当でもある先生が声を張り上げた。

本来ならば諸注意やミーティングなど様々な面倒ごとで自由時間を剥奪されがちだ。

だが先制の粋な計らいですぐに自由時間を作ってくれる。

生徒達は喜ばないはずがなく、急いで宿泊施設に向かう。そこは温泉完備、最高の「わびさび」なもてなしをモットーとする旅館だった。

「うわぁ・・・ここが僕たちの部屋か！」

「この畳のイグサのにおい・・・たまりません！」

「俺ん家よりいいじゃん！ お、机の上に菓子がある！」

「・・・景色や部屋より菓子なのかお前・・・いや、もう何も突っ込まねえぞ」

スバル達男組みは「松」と書かれた部屋に案内された。

この廊下を挟んで10m反対側は女子達の部屋となっている。

ミソラは当然スバルの部屋と一緒になりたかったのだが幾ら彼らがカッブルと言えど中学校の規則に則られるわけで、別々に分けられたのだ。

因みに彼女はルナと同じ部屋である。

「着てよかったですよね、よかよか村！」

「ああ！ 空気もメシも美味しい！ サイコーだぜ！」

「シーサーアイランドとは違う感じだね」

「なんていうか・・・癒されるな、ここは」

男三人だけでもこれだけ盛り上がり、そして同時に寛げる。

テクノロジーが発展した都会とは違う時の流れに、スバル達は用意されたお茶を啜る。

はぁ、と漏れ出したため息はまさに「まったく」一色である。

そのまま時すら忘れてしまいそんな感覚に陥ったその時だった。

「っと！ こっしちゃんねえ！」

「そうです！ 折角の自由時間、何もしないわけにはいきませんよ！」

「だね！ よし、さっさと行動あるのみ！」

「そうと決まりや俺が一番乗りだ！」

ジャックが荷物から財布など、貴重品を持ち出し外へ飛び出す。すると負けん気が働いたのかゴン太も襖を壊しかねない勢いで飛び出した。

その後に行くのはスバルだ。因みに勢いに乗り遅れたキザマ口は足がもつれてコケた。

「あ、スバルくん。 もう準備できた？」

「ミソラちゃん！ うん、ちゃんと準備できたよ」

「それじゃ湖に行こ！ ここのデートスポットなんだって」

ミソラはそんな事を言いながら素早くスバルの腕を絡め取り、走り出した。

デート、と聞くと今だ顔を赤くしてしまう今日この頃。だが最近デートらしいことをしていないのでつばを飲み込んでしまいうのも無理も無い。

そんな彼らを、ルナは手を腰に当ててため息をついていた。

「はあ。 全くあの二人は・・・ま、今回は二人きりにしておきますか」

本来ならルナルナ団、否クラスメイトとして、友達としての時間を過ごしたかった。

だが修学旅行はまだまだ続く。別に急ぐことは無い。身を引き、見守ると決めた以上ルナに口出しする権利は無かった。こんなことで、彼らを結んでいる絆は切れはしないのだから。

「おーい！ 委員長〜！！！」

「なーにしてるんですかー！？」

「ボサツとしていると自由時間の終わっちまうぞー！」

いつものメンバーが呼び声が聞こえる。

やれやれ、とため息を吐きながらもルナは顔を上げて進みだした。もう、恐れることは無いから。

「ここがよかよか湖だね〜」

「ドンブラー湖ほど大きくないけど、こっちは静かでいいなあ」

スバル達は件の湖にたどり着いていた。

その名も「よかよか湖」。ミソラも告げたとおり、デートスポット

として大変有名な場所である。

今回は修学旅行が行われることもあり、一般客は少ないようだ。それゆえだろうか、この湖の持ち味である「静寂」が心地よく響く。

「……………わぁ……………」

「まるで……………時間が止まったみたい……………」

ただでさえ時の流れが緩やかなこの村。その中でも最も静かなこの場所には時すら感じさせない。

風もただささやかに吹き、湖面を静かに揺らすだけ。

スバルとミソラはいつしか畔に座り込んで手を握り合っていた。

「ロック。 ちょっといいかしら？」

「なんだハーブ！ まだ何もしてねえぞ！」

「“まだ”？ ……やっぱりアンタは黙らせるに限るわね」

「ちよ待てお前！ 弦を絡みつかせるな！！ グエエエエ……………」
『！』

いつしか電波体は上空のウエーブロードでもめあっていた。

そしてウォーロックは見事に糸に絡められていた。

彼らの喧騒を知ってか知らずか真下のスバルとミソラはこのゆるやかな一時を過ごしている。

「……………なんていうか、こんな静かだと今までの思い出が蘇ってくるね」

「走馬灯、なんてのはイヤだからね」

「違うよ。でも、本当に色んな思い出が頭の中に浮かんでくるんだ」

人間、静かな時に出くわすと自然と思い出が再生されると言う。それだけ彼らは静寂を堪能していると言うことだ。

「湖と言えばドンブラー湖を思い出すなあ」

「それってキザマロ君がカミカクシで飛ばされた？」

「そ。キザマロったら潜水艦に閉じ込められて湖のそこに沈められたんだよ」

キザマロにとっていい思い出であるはずが無い。

このほかにも水がらみでは苦い思い出ばかりであるという。その所為か、本人は極度のカナヅチだ。

ミソラも思わずクスクスと笑いを零してしまう。なんと可愛らしいことが。

「で、その湖のそこからミソラちゃんの手がかりも見つけたんだ」

「あ・・・それってバミューダラビリンスの時の・・・」

「うん。ミソラちゃんを探すのに必死だったよ」

ミソラもまた、ムーの騒動のときにカミカクシの所為である場所に飛ばされた。

散り散りになった仲間を探すため、スバルとルナは奮闘していた。

そうして最後に得た手がかり、それがミソラの映像だった。

「あの時は・・・本当にゴメ・・・むぐっ?」

「ミソラちゃん。僕、そんな辛気臭い空気にするために言ったんじゃないからね?」

ミソラは謝り掛けた。それもそのはず、カミカクシによって飛ばされてしまったときだ。

当時、ムー大陸復活のために暗躍していたドクター・オリヒメ。その片腕とも言うべき存在であるエンプティーに協力を持ちかけられたのだ。

「ロックマンへの攻撃を中止する」と言う条件を提示して。

初めてのブラザーにして、当時最も想っていた相手。この得体の知れない相手・・・そしてブライの手からスバルを守り抜くためには、ミソラにとって誘惑的だった。

その結果が　　一時的とは言えの、スバルとの決別だった。

一度は突き放した。しかし彼はルナの叱咤と激励の元戻ってきてくれた。

彼を戻らせるためにも攻撃したのに。彼はただ「信じる」といつて動こうとしなかった。

それどころか「一緒に傷ついたほうがいい」とまで言ってくれた。ミソラはそれに感化され、再び彼とブラザーバンドを結ぶことが出来た。

そのときの罪悪感はまだ吹っ切れていなかった。だが、スバルはそれを止めたのである。

一本の人差し指で、唇を押さえることで。

「……もー。切り出したのはスバル君でしょー？」

「ゴメンゴメン。でも僕にとって、大切なミソラちゃんの思い出の一つだから」

「……そんなことまで大切にしてくれるんだね……」

「当たり前だよ。だって……こ、恋人……なん、だから……」

「

未だ、恋人という単語になれないのか唇を震わせるスバル。

しかし否定などしない。彼もまたミソラを愛しているのだから。

そしてミソラも例え過去の裏切りであつても捨てずに向き合つてくれているスバルが好きで好きで、愛して止まない。

いつしか二人の唇が近づき、小さなリップ音を鳴らした。

「あ………」

「……ん………」

小さな悲鳴が漏れ出す。

それすらも、このそよ風は攫うことがない。本当に時が止まったかのようなこの湖の傍で二人はただ幸せを分かち合っていた。本当に、このまま時が止まればいいのに。

パシャパシャパシャ！

「うわあっ!?!」
「きゃっ!?!」

二人のキスは突然の音に中断を余儀なくされた。
ビクリと肩を震わしながらも警戒心をすぐに発揮し、構える辺りも
うサテラポリスの一員として戦い続けてしまった所為なのだろうか。
そしてミソラは先程の音に一つ思い当たった。それは歌手兼アイド
ルである彼女からすれば聞きなれた音だった。

「さっきのは・・・シャッター音？」

「え？ シャッター音って・・・」

「それもその茂みから！ 誰!? 出てきなさいッ!!」

更には音を操って戦う、自称「戦うアーティスト」だからだろうか。
音のした箇所を見極め、指を挿した。

指差された箇所からは明らかに動揺したような不自然な揺れが一つ。

「シューッシューッシ！ バレちゃあ仕方ねえ！」

「あれ？ その顔・・・その声・・・その笑い方・・・」

飛び出したのは、やたら顔つきが細い漢だった。

顎には無精髭も生やしている。幾分か顔はやつれているものの、そ
の輪郭には見覚えがあった。

それは過去、先程のドンブラー湖での事件の発端となった男。

嘗てはテレビ局のディレクターでありながら「やらせ」をしたこと
でクビになっているはずの男。

「あー！ 思い出した！ お前、デマキュー！」

「デマキュー……って出間崎さん！」

「シッッシッシッ！ 思い出してくれたか！」

カメラを構えたその男の名は「キュー・出間崎」。通称デマキュー。やり手のディレクター、とも言われたが先程あったとおりドンブラ湖の一件でムーの電波生命体と電波変換し、「ブラキオ・ウエーブ」となったこともある。

だがスバルの活躍で彼は倒されヤラセも発覚したのだった。しかし意外なのはミソラも彼の名前を知っていたことである。

「ミソラちゃんも知ってるの？」

「知ってるも何も、昔私絡みで色んな特番作るうとしたの！ 胡散臭い話ばかりの！」

「み、ミソラちゃんまでダシに使ったのかお前ッ！」

どうやら彼女も出間崎にはうんざりしているようだ。

そしてスバルは当然彼のことを許していない。むしろミソラも迷惑をかけられたと知って更に怒りのボルテージが上昇している。

だが出間崎は依然、動じていない。それどころか何かの機械を弄ったままだ。

「いいねえ、いいねえ！ ヒロインを守るために怒るヒーロー！」

「な、何だよ突然！」

「分かつちやねえな！　これが俺が待ち望んでいた特ダネだつっの！」

「と・・・特ダネ!?!」

この男が「特ダネ」と言うと当然いい気分など微塵もしない。

クツクツク、と笑いをこぼしながら出間崎は自らの計画を明かした。

「知つての通り俺はお前らの所為でテレビ局をクビになつちまつた！」

「自分が巻いた種じゃない！　自業自得よ!?!」

「黙りなミソラ！　懲戒免職されてから俺はどれだけ地獄の日々を過ごしてきたか！」

「この人の辞書に『自業自得』とか『因果応報』ってないのかな・・・?」

二年たつた今でも全く反省の素振りなどない。

それどころか彼らに対する怒りの炎は燃え上がっているようだ。

しかしスバルはその怒りの対象に関係の無いミソラまでいることが何よりも許せない。

「必死に素性を隠しながら食いつないで、フリールポライターをやつてきたこの二年！　ついにチャンスが巡ってきた！」

「ちや、チャンス・・・?」

「お前らバカツプルの事だつっの！　シッシッシッシ！」

出間崎は腰に下げているカバンから何かを取り出した。それは数々のゴシップ記事や、写真などといったきな臭い物品である。

しかし何れもスバルやミソラ関連のものだ。

「ある伝手から国民的アイドルのミソラが恋しているという情報を入力してな！」

「え……？」

「そうして調査を進めていたらその相手が俺様を陥れたガキで、しかも今や地球の英雄ロックマンの正体である星河スバルときやがった！ しかもめでたくカップル成立と来た！」

今、彼の顔はご馳走を目にした時と同じような色をしている。まさに美味い汁をすする、最低な大人の図だ。

「こんな一大スキャンダル、俺様が独占レポートすれば一気にテレビ界に返り咲くってなもんよ！」

いや、それを越えた大出世だっつーの！」

「お、お前の言うことなんて今更誰も相手にしないよ！」

「そーいう奴もいると思って証拠も用意したんだっつーの！」

どうやらそれが彼の手に握られているカメラ、そして録音機ということらしい。

先程の会話や様子は彼に筒抜けなのだろう。

「シツシツシ・・・しかもミソラも電波変換まで出来るとなると誰も食いつかないわけがねえ！」

「な、なんて事を・・・私はともかくスバル君にまで迷惑じゃないそんなの！！」

ミソラの怒気を伴った一言は最もだ。

今や英雄として語り継がれるが、その実態は目立つのが余り得意ではない普通の男の子。

そんな彼が、例のニユースを流されたらどうなるか。

一大スキャンダルを起こしたということで一気に世間は食らいつくこと間違いなしだ。毎日報道陣が押しかける、あの生活が蘇る。

「そうそれそれ〜！ 俺様の復讐も兼ねてるってワケよ〜！」

「ふ、フクシユウ・・・！？」

「そもそもテメエが俺様の邪魔をしなければ、ブラキオ・ウエーブの力を持ったまま大出世できたんだっつーの！ それを滅茶苦茶にした仕返し、って事よ〜！」

救いようが無い、とはまさに事のことだ。

スバルもミソラも怒り心頭だ。特にスバルは今にも殴ってきそうな面構えと気迫。

だが電波変換されなければ特にどうと言うことはない、と踏んだのか出間崎は未だ有頂天だ。

「シ〜ツシツシツシ！ いやぁお前らバカカップルには本当に感謝してるぜ！〜！」

「黙れ！！！」

「黙るのはお前の方だったの！ 証拠もある以上、ここにはもう用はねえ！！！」

早速これらを提出するつもりなのだろう。

幾ら彼が過去やらせを行った人物であろうと明るみになる可能性はゼロではない。

正直、ミソラは恋仲であることを知られることは何の抵抗も無い。だが出間崎のやり方は自分達を想いを踏みにじったも同然なのだ。そして隣にいる大好きな人 スバルを傷つけようとしている。今日ほど、怒りをぶつけていいと思った日はない。

「ハープ！ お願い！！！」

「任せなさい！！ この最低男、待ちなさい！！！」

ハープが音波を飛ばした。

音波の塊は逃げようとする出間崎の背中にクリーンヒット。大きく吹き飛ばした。

「がぶらあぁっ！！？」

思い切り衝撃を背中を受けたことで大きく吹き飛ばされたばかりか気絶してしまったようだ。

正直この姿にスバルとミソラは同情の欠片なども無い。しかしこのままでは胸が空かないのは事実だ。

「ロック！ やっておしまい！！！」

「おお！！ このクソ野郎のデータなんざ・・・メチャメチャにしてやるぜえええ！！！」

ハーブが合図を繰り出した。するとウォーロックが飛び込んでくる。次々と彼のカメラや録音機、更にはハンターV.Gや周辺機器など転々としては暴れまわる。

その暴れようが機械から飛び出る音や火花、電流などでよく分かる。普段なら止めるスバルであるが今回は「もっとやれ」というような表情でいる。

「ハア・・・ハア・・・全部スカラカンにしてやったぜ・・・！」

「ご苦労様」

「ロック君、グッジョブ！」

スバルもミソラもウォーロックの働きを存分に労う。

彼の暴れようではデータはもう無いだろう。あつたとしても機器そのものが壊れている可能性が高い。

つまり出間崎の野望はこれで潰えたのである。

「で、どうしようかこの人」

「置いていったら『バカは死ななきゃ直らない』って言うし」

「待て、ここは警察に突き出そうぜ。いかなる罪人も、裁きは平等だからな」

「ロック、それ刑事ドラマの台詞だね」

スバルは肩を竦めているものの、正直目の前のこの男の処理について悩んでいた。

自分達の想いを利用したどころかミソラにまで迷惑をかけようとしていたのである。

許されるべき人物ではないのは分かっている。しかし今はあくまで「修学旅行」であることを思い出した。

「・・・こんな人が原因で、みんなの修学旅行を潰すわけにはいかないよ」

「だね。 ショージキ、もっと反省させたいけどスバル君が言うならそれでいいよ」

「クスクス。 スバル君、やっぱり優しいのね」

「甘ーんだよ、コイツは」

今度はウォーロックが肩をすくめて見せる。

だが彼の甘さと付き合ってもう三年以上になる。気にしていない様子だ。

「でもだからって甘やかすのもよくないからここに放っておこうか」

「だね。 データも機械もないからなーんにも出来ないもんね」

「ミソラちゃん、ゴメン。 折角のデートなのに・・・」

「うっん。 キスマでしたし、もう幸せっ!」

そう言いながらまたミソラはスバルの隣に引っ付いた。

スバルも十分満足したことが、溜飲を下げる要因となったようだ。その後メールが届き、そろそろ自由時間が終了すると言う報せを聞いて二人は旅館へと戻るのだった。

哀れな、人の思いまで利用しようとした悪漢を残して。

「イテテ・・・お、俺どうなったんだ・・・？」

彼らが去ってどのくらい経ったのだろうか、ようやく目覚めた出間崎。

彼が覚えているのは特ダネを追っていたこと、スバル達に種明かしをしたこと、そして背中に謎の衝撃を受けたところまでである。

「ハッ！ データデータ・・・あああああああ！！！！？」

これもディレクターとしての性なのか、すぐさまデータチェックに取り掛かる。

しかし何れもウォーロックによって消去された後だった。

それどころか愛用してきたカメラ等取材機器も破損してしまっている。

「これも・・・コイツも！ ダメになってやがる・・・！ ちくしよおおおおお！！！」

出間崎は使い物にならなくなったカメラを地面に叩き付けた。

憤りの分だけ勢いが乗り、カメラは見事砕け散った。

だがカメラは壊れど彼の追い求めていた特ダネはもうない。しかもご丁寧なことにバッグの中からスバルとミソラに関する情報類も消

え失せてしまっている。
瞬時に彼らの仕業だ、と理解しつつももうどうすることも出来ない
現状に彼は泣き伏せた。

「うおおおおおお！！！！ もうダメだああああああ！！！！
！！！！」

「ではそこから奇跡の逆転劇を演じ、世界に知らしめるとよい」

絶望に打ちひしがれた出間崎。

だがそんな彼に声をかけるものがあつた。これに懐かしさがある。
たった一度、しかしある意味の声が彼の人生を大きく変えたといっ
ても過言ではない。

慌てて泥まみれの顔を上げると、そこにはあの顔があつた。

「あつ……アンタは……ハイド！」

「ソフフフ。 お久しぶりだね、出間崎君」

そこには紫色のローブに帽子を被り、ステッキを持った怪しげな男。
彼こそ「ファントム・ブラック」の正体にして現在ブラックホール
に加担しているハイドだ。

出間崎は彼の顔を見るや否や、顔を歪ませた。

「お前……よくもその面を俺に出せたな……！！！！」

「んん？ どういうことかな？」

「ふざけんな！ 元はと言えばお前があんな電波生命体を押し付け
てきやがったから！」

「私は君のスポンサーになっただけ。活かし切れなかったのは君自身、ではないかね？」

どうやらスバル達のみならず、力を与えた張本人であるハイドすら逆恨みしているらしい。

一方言いがかりをつけられたと言うのにハイドは依然薄笑いを浮かべたまま。

彼流に言うなら「脚本どおり」だからであろう。

「だが安心したまえ・・・先程言ったとおり、君には大逆転のチャンスがある」

「ちや、チャンスう・・・？」

「そう。・・・もう一度、電波変換してみないかね？」

電波変換、ハイドから発せられたその単語は魅力的だった。

一時であつたが出間崎は電波変換し、その力を実感した。

泳ぐだけで人が騒ぐ。身体を起こすだけで津波が巻き起こる。口を開けば雷が飛び出す。

人間以上の力を手にしたその時、確かに彼は快感を覚えた。

「でっ、でももうブラキオはいねえ！ ムー大陸とやらも無くなっちまったんだろ！？」

「しかしブラキオはいる。君の中に」

「・・・ハア！？ 俺の中！？」

「正確に言えば残留電波として残っているのだよ」

ハイドはまた笑う。彼はこうしていくつもの事件を引き起こした。ゴン太、ルナの残留電波を呼び覚ましスバルと戦わせたこともある。

「で、できるのか・・・？」

「出来るとも。それに今回は協力者もいる」

「きよ、協力者・・・!？」

「それは後ほど話そう。・・・さて、君はどうする？」

ハイドの甘言に、出間崎の心は揺らされるばかりだ。

またロックマンにやられるのではないか。そんな不安が駆け巡る。だがそれ以上にあの力で暴れられる事実は、何よりも彼の中を満たしていた。

それにここで断ったとして、もう他に生きていく手段が無い。

出間崎の答えは瞬時に決まった。

「・・・い、いいだろう！ この地獄から抜け出せるなら、またア
ンタの手先にもなつてやらあ！」

「ソフフフ！ マーベラス！ いい解答だ。では・・・ぬん！」

ハイドはステッキを掲げた。

先からあふれ出した光は出間崎を包み込む。

光は彼の体内に潜り込み、まるで探り回るかのように駆け巡った。

「う、お、おおおおおおおおおお!!!!」

「ソフフフ！ この村の紅葉は秋ではなく、君の血で染まるのだよ・
・ロックマン！」

脚本家はただ、静かなはずの湖畔で哄笑していた。

その日、静かと言うことで有名なよか村に吹き慣れぬ不吉な突
風が見舞ったと言う。

第二十七話 よかよか村（後書き）

大変遅れてしまいました。最早ここまでくると新人と同じですね。テンペストです。皆様、大変遅れて申し訳ありませんでした。

復活、かと思えばまた長い間を作ってしまったことに私自身もう皆様に足を向けて寝られませんか。

いい訳は幾つかあるのですが、もうおとなしく罵られることとします。ですがそんな中でも応援をしてくださった読者の声に支えられてまた戻ってきました。

月一更新すら難しいでしょうがどうか今後ともよろしくお願いします。

無論感想や要望は大歓迎です！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3928g/>

流星のロックマン～星の祈り～

2011年11月27日04時08分発行